掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

・向山遺跡

・東ノ谷遺跡

・西池古墳

・山脇横穴墓群

・本村遺跡・前坪古墳群6号墳

・本村横穴墓群E群

2002

掛川市教育委員会

図版 1

向山遺跡調査区全景

SX01

図版 2

東ノ谷遺跡調査区全景

SB02・SH01・SH02

図 版 3

西池古墳全景

ＳＦ０１玉類出土状況

図版 4

ＳＦ０２排水溝

ＳＦ０３土層断面

図版 5

山脇横穴墓群全景

2号墓玄室内遺物出土状況

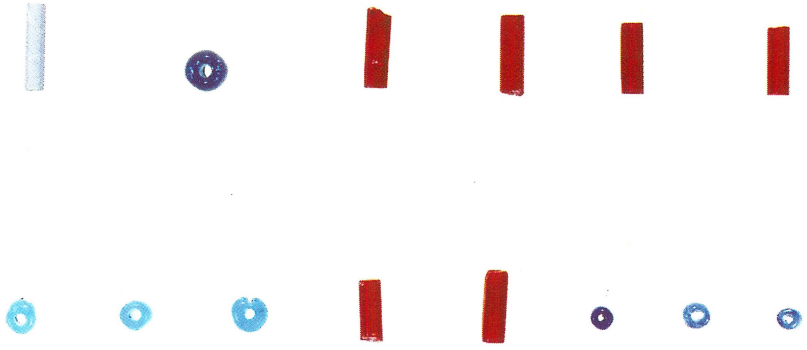
図版 6

3号墓礫床

3号墓玄門と工具痕

図 版 7

本村遺跡調査区全景



土坑墓群出土玉類

図版 8

本村横穴墓群Ｅ群全景

１号墓墓道検出状況と２号墓完掘

掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

・向山遺跡
・東ノ谷遺跡
・西池古墳
・山脇横穴墓群
・本村遺跡・前坪古墳群６号墳
・本村横穴墓群Ｅ群

２００２

掛川市教育委員会

例　言

1．本書は、掛川市長谷土地区画整理用地内において平成７年度に発掘調査を実施した向山遺跡、東ノ谷遺跡、西池古墳、山脇横穴墓群、本村遺跡・前坪古墳群６号墳、本村横穴墓群Ｅ群の発掘調査報告書である。
2．調査は、土地区画整理事業に先立つ緊急発掘調査で、調査費用を掛川市長谷土地区画整理組合が負担し、掛川市教育委員会が実施した。
3．発掘調査に際しては、掛川市長谷土地区画整理組合の方々に多大な御理解と御協力を頂いた。
4．発掘調査および本書の執筆・編集は、掛川市教育委員会の前田庄一が担当した。
5．調査の記録は、掛川市教育委員会が保管している。

凡　例

1．挿図における方位は、座標の北である。
2．本書で使用した遺構名称は次の意味である。

ＳＡ：柵列	ＳＢ：竪穴住居跡
ＳＤ：溝状遺構	ＳＦ：埋葬土坑
ＳＨ：掘立柱建物跡	ＳＫ：土坑
ＳＳ：方形周溝墓	ＳＸ：性格不明の遺構

3．遺物の番号は、挿図と写真図版と同一である。

目　次

Ⅰ　発掘調査の概要……1
　1．調査にいたる経過……1
　2．遺跡をめぐる環境……1
Ⅱ　向山遺跡……2
　1．調査の概要……2
　2．遺構の概要……2
Ⅲ　東ノ谷遺跡……17
　1．調査の概要……17
　2．遺構の概要……17
　3．遺物の概要……18
Ⅳ　西池古墳……35
　1．調査の概要……35
　2．遺構の概要……35
　3．遺物の概要……36
Ⅴ　山脇横穴墓群……51
　1．調査の概要……51
　2．遺構の概要……51
　3．遺物の概要……52
Ⅵ　本村遺跡・前坪古墳群6号墳……77
　1．調査の概要……77
　2．遺構の概要……77
　3．遺物の概要……79
Ⅶ　本村横穴墓群E群……109
　1．調査の概要……109
　2．遺構の概要……109
　3．遺物の概要……110
附載　掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡から出土した炭化材の樹種について……127

挿図目次

向山遺跡
第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図……4
第２図　位置図……5
第３図　遺構全体図……6
第４図　ＳＸ01実測図……7
第５図　ＳＸ02実測図……8
第６図　ＳＡ01・ＳＸ03実測図……9
第７図　ＳＸ04実測図……10
第８図　ＳＸ05実測図……11
東ノ谷遺跡
第１図　位置図……19
第２図　遺構全体図……20
第３図　ＳＢ01・ＳＢ04実測図……21
第４図　ＳＢ02実測図……22
第５図　ＳＢ03・ＳＢ05実測図……23
第６図　ＳＨ01・ＳＨ02実測図……24
第７図　ＳＨ03・ＳＸ01実測図……25
第８図　土器実測図(1)……26
第９図　土器実測図(2)……27
第10図　土器実測図(3)……28
第11図　木製品・石器実測図……28
西池古墳
第１図　位置図……37
第２図　墳丘図……38
第３図　ＳＦ01遺物出土位置・ＳＦ01実測図……39
第４図　ＳＦ02実測図……40
第５図　ＳＦ02排水溝実測図……41
第６図　ＳＦ03実測図……42
第７図　ＳＦ04実測図……43
第８図　土器実測図……44
第９図　玉類実測図……44
山脇横穴墓群
第１図　位置図……53
第２図　横穴墓群全体図……54
第３図　１号墓実測図……55
第４図　２号墓実測図(1)……56
第５図　２号墓実測図(2)……57

第６図　３号墓実測図……58
第７図　土器実測図(1)……59
第８図　土器実測図(2)……60
第９図　土器実測図(3)……61
第10図　土器実測図(4)……62
第11図　耳環・銅釧実測図……62
第12図　玉類実測図……63
本村遺跡・前坪古墳群６号墳
第１図　位置図……80
第２図　遺構全体図……81
第３図　方形周溝墓群全体図……82
第４図　ＳＳ01・ＳＳ04実測図……83
第５図　ＳＳ02・主体部ＳＦ02実測図……84
第６図　ＳＳ03実測図……85
第７図　ＳＳ03主体部ＳＦ03・ＳＫ01・ＳＫ03実測図……86
第８図　前坪古墳群６号墳みかけの墳丘図……87
第９図　前坪古墳群６号墳主体部ＳＦ01実測図……88
第10図　かわらけ平面実測図……88
第11図　土坑墓群実測図……89
第12図　ＳＦ04・ＳＦ05・ＳＦ06・ＳＫ06実測図……90
第13図　ＳＦ08・ＳＦ09実測図……91
第14図　ＳＦ07・ＳＫ04・ＳＫ05実測図……92
第15図　土器実測図(1)……93
第16図　土器実測図(2)……94
第17図　石製品実測図……94
第18図　玉類実測図……95
第19図　かわらけ実測図……96
本村横穴墓群Ｅ群
第１図　位置図……111
第２図　１号墓実測図(1)……112
第３図　１号墓実測図(2)……113
第４図　２号墓実測図……114
第５図　３号墓実測図(1)……115
第６図　３号墓実測図(2)……116
第７図　土器実測図……117
第８図　玉類・砥石実測図……117

図版目次

向山遺跡

図版１　上　調査区全景（東から）
　　下　ＳＡ01･ＳＸ01･ＳＸ02(南から)
図版２　上　ＳＸ01玄室内部（北東から）
　　中　ＳＸ01玄門（北から）
　　下　ＳＸ02完掘（北から）
図版３　上　ＳＸ02完掘（西から）
　　中　ＳＸ03玄室内部（北から）
　　下　ＳＸ03完掘（南から）
図版４　上　ＳＸ04完掘（南から）
　　中　ＳＸ03・ＳＸ04（東から）
　　下　調査区東端ピット群（東から）

東ノ谷遺跡

図版１　上　ＳＨ01・ＳＨ02・ＳＢ02（南から）
　　下　ＳＨ01・ＳＨ02（東から）
図版２　上　ＳＢ02検出状況（西から）
　　中　ＳＢ02土器出土状況（西から）
　　下　ＳＢ02炉址（西から）
図版３　上　ＳＢ02完掘（西から）
　　中　ＳＢ03完掘（東から）
　　下　ＳＢ05・ＳＨ03（北から）
図版４　出土遺物(1)
図版５　出土遺物(2)
図版６　出土遺物(3)

西池古墳

図版１　上　主体部完掘（西から）
　　下　ＳＦ01・ＳＦ04遺物出土状況（西から）
図版２　上　ＳＦ01・ＳＦ04完掘（西から）
　　下　ＳＦ02遺物出土状況（西から）
図版３　上　ＳＦ01遺物出土状況（北から）
　　中　ＳＦ01鉄斧出土状況（北から）
　　下　ＳＦ02土層断面（西から）
図版４　上　ＳＦ02遺物出土状況（北から）
　　中　ＳＦ03鉄剣出土状況（東から）
　　下　周溝完掘（北から）
図版５　出土遺物(1)
図版６　出土遺物(2)

山脇横穴墓群

図版１　上　墓前域完掘（北から）
　　下　２号墓完掘（南西から）
図版２　上　１号墓玄室内（北西から）
　　中　１号墓閉塞石（北から）
　　下　１号墓完掘（西から）
図版３　上　２号墓玄室内（北から）
　　中　２号墓閉塞石（北から）
　　下　２号墓玄室完掘（南西から）
図版４　上　３号墓閉塞石（西から）
　　中　３号墓羨門と閉塞石（北から）
　　下　３号墓奥壁（玄門方向から）
図版５　出土遺物(1)
図版６　出土遺物(2)
図版７　出土遺物(3)
図版８　出土遺物(4)
図版９　出土遺物(5)
図版10　出土遺物(6)

本村遺跡・前坪古墳群６号墳

図版１　上　ＳＳ02全景（西から）
　　下　ＳＳ03全景（東から）
図版２　上　土坑墓群全景（西から）
　　下　ＳＤ10完掘（南から）
図版３　上　ＳＦ01（東から）
　　中　ＳＦ03・ＳＫ01（東から）
　　下　ＳＤ02（南から）
図版４　上　ＳＤ03（西から）
　　中　ＳＤ04（西から）
　　下　ＳＤ05（南から）
図版５　上　ＳＤ07（南から）
　　中　ＳＫ02・ＳＫ03（北から）
　　下　かわらけ出土状況（東から）
図版６　上　ＳＦ04遺物出土状況（東から）
　　中　ＳＦ04完掘（北から）
　　下　ＳＦ05（西から）

図版７　上　ＳＦ07（南から）
中　ＳＦ06・ＳＦ07・ＳＫ04(東から)
下　ＳＦ08（東から）
図版８　出土遺物(1)
図版９　出土遺物(2)
図版10　出土遺物(3)
図版11　出土遺物(4)
図版12　出土遺物(5)
本村横穴墓群Ｅ群
図版１　上　横穴墓群全景（南から）
下　１号墓・２号墓（南東から）
図版２　上　１号墓玄室内（右壁から）
中　１号墓閉塞石検出状況(東から)
下　１号墓羨門と閉塞石（東から）
図版３　上　１号墓羨門（東から）
中　１号墓羨門（南東から）
下　１号墓完掘（南東から）
図版４　上　２号墓羨門（南東から）
中　１号墓・２号墓完掘（南東から）
下　３号墓玄室内（玄門方向から）
図版５　上　３号墓閉塞石（南西から）
中　３号墓玄室完掘（羨道から）
下　３号墓墓前域完掘（南西から）
図版６　出土遺物(1)
図版７　出土遺物(2)
図版８　出土遺物(3)

Ⅰ　発掘調査の概要

1．調査にいたる経過

平成６年２月15日、掛川市長谷土地区画整理組合理事長栗平彰から掛川市教育委員会に掛川市長谷土地区画整理事業用地内63.9ヘクタールについて、「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（照会）」があった。掛川市教育委員会では、平成６年２月28日から３月15日まで現地踏査を行い、平成６年３月24日、区画整理組合に対して「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて（回答）」した。

平成７年３月９日、掛川市長谷土地区画整理組合から、平成７年度宅地造成及び街路築造工事予定地内における埋蔵文化財の「確認調査の依頼について」が提出された。市教育委員会は、同年４月24日から28日にかけて西池古墳の確認調査を実施し、埋葬施設を確認した。５月22日から24日にかけて東ノ谷遺跡の確認調査を行い、遺構と土器片を確認した。５月24日から25日にかけて向山遺跡の確認調査を実施し、柱穴と弥生土器片を確認した。

平成７年７月７日に、掛川市長谷土地区画整理組合と掛川市が「掛川市長谷土地区画整理事業施行区域内埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結し、同日から平成８年３月31日まで発掘調査を実施した。

2．遺跡をめぐる環境

今回報告する６遺跡が所在する長谷地区周辺は、あたかも指を広げたかのごとく丘陵が枝分かれしていて、その丘陵の間に谷が入り込む地形をしている。６遺跡のうち従来から遺跡とされていたのは前坪古墳群６号墳のみで、他の遺跡は、区画整理事業に先立つ確認調査によって確認されたり、他の遺跡を調査中に新たに発見された遺跡である。長谷地区周辺は、土地区画整理事業、東名高速道路、市庁舎建設等の開発により過去遺跡が調査されている。南東の丘陵上や斜面からは、弥生時代中期の方形周溝墓群や弥生時代後期の集落跡である堀ノ内遺跡、古墳時代中期の古墳群で４基から成る山麓古墳群、堀ノ内古墳群14号墳、古墳時代後期の横穴墓である山麓山横穴・宇洞ヶ谷横穴・堀ノ内横穴群、横穴式粘土室墳である堀ノ内13号墳などが発見されている。今回調査した前坪古墳群６号墳と同一の丘陵上には、古墳時代前期の前方後円墳である前坪古墳群３号墳を含む前坪古墳群が存在している。南から南東に連なる丘陵斜面には、古墳時代後期の横穴墓群が築かれていて、市内屈指の横穴墓密集域となっている。丘陵上には、古墳時代中期の古墳群である本村古墳群、天上塚古墳、屋敷越古墳、東照ヶ谷古墳群、池ノ奥古墳群、寺ヶ谷古墳、八幡神社脇古墳、篠場古墳群などが存在するが、調査例が少なく、内容が明らかでない古墳が多い。古墳時代後期は、横穴墓が墓制の主流をなしているが、数少ない横穴式石室を内部主体とする丈山古墳群や４基から成る居村古墳群が築かれている。居村古墳群は、丘陵上に存在する７世紀代に築造された古墳群で、同じ地点からは弥生時代中期後半から古墳時代前期の集落跡が発見されている。

西側や北側に広がる沖積地には、弥生時代後期・古墳時代後期の遺跡と考えられる黒田遺跡・沢田遺跡・細田遺跡・大池遺跡・領家遺跡が存在するが、わずかに領家遺跡から弥生時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、環濠など、大池遺跡から弥生時代後期の柱穴、土坑などが発見されているにすぎず、実体は明らかではない。

Ⅱ　向山遺跡

1. 調査の概要

調査は、確認調査で遺構を確認した深さまでバックホウで掘削し、その後、人力により精査・遺構確認を行った。

調査に当たっては、調査区の形に合わせて５ｍ方眼のグリッドを設定することとし、座標の北から西に16度30分振れるラインを南北軸とした。

現地での図面作成は、20分の１の縮尺により、一部10分の１の縮尺で微細図を作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成７年７月７日から８月７日まで、現地調査を行った。

2. 遺構の概要

調査地は、東から西に伸びる丘陵の先端に位置するが、先端はすでに道路により削り取られ、上面も削平されていた。検出された遺構には、柱穴、柵列、地下式壙などがある。

柵列

ＳＡ０１（第６図）

調査区西端で検出された３間分の柱穴列で、方位は、Ｎ－15°－Ｗを測る。北側・東側に伸びることはないが、南側と西側には伸びる可能性があり、掘立柱建物の可能性もある。

柱穴の直径は約50㎝、Ｐ１・Ｐ２・Ｐ３の底面の標高は約24.3ｍで、Ｐ４は20㎝ほど低くなる。Ｐ１・Ｐ２間、Ｐ２・Ｐ３間は1.9ｍ、Ｐ３・Ｐ４間は2.5ｍと柱間が長くなることから、Ｐ１からＰ３間で柵列または、掘立柱建物になる可能性もある。柱穴からの出土遺物はない。

地下式壙

ＳＸ０１（第４図）

地下式壙５基は、すべて泥層を掘り込んで造られている。

上端の幅70㎝～80㎝、下端の幅約40㎝の墓道状の遺構が2.5ｍほど続き、その先に玄室部分がある。墓道状の遺構は、先端から1.07ｍまでは５度の傾斜で下降し、その先1.05ｍが17度、そこから玄門までは33度の傾斜で下降する。

玄室部分は、幅2.3ｍ、奥行2.2ｍの隅丸の方形を呈し、主軸方位は、Ｎ－６°－Ｅである。天井はすでに失われていたが、壁は約1.4ｍの高さまでほぼ垂直に立ち上がる。調査中に崩落したが、幅、高さとも約70㎝の玄門状の施設が確認でき、長さ30㎝の羨道が存在した。右壁に沿って30㎝前後の大きさの礫が、40㎝～50㎝の間隔を置いて長さ1.6に亘り、一直線に並ぶ。この石列と約50㎝の間隔を置いて２個の礫が検出された。これらの礫は、掘り方に密着していた。火を受けて煤が付着している礫もあった。玄門部分には、幅40㎝前後、長さ約90㎝、深さ約15㎝の溝状遺構が存在し、そこに向かい玄室中央部分から溝が伸びている。左前壁の掘り方から約10㎝の高さのところに、約20㎝の間隔を置いて２つの穴が穿たれていた。壁面に見られる工具痕は、幅９㎝で刃先が少し湾曲したものである。

陥没土中から、弥生土器の破片、土師器高坏の破片、寛永通宝１枚、かわらけの底部破片が出土している。

ＳＸ０２（第５図）

入り口部分に白色の泥層のブロックと砂を版築状に積んでいた。これはＳＸ01の墓道状遺構の先端部分でも確認できた。現存する竪坑は、幅60㎝、１段目が10㎝、２段目が52㎝、そして48㎝の段を降りると玄室部分に至る。

玄室部分は、幅2.67ｍ、奥行２ｍの隅丸の長方形を呈し、主軸方位はＮ－32°－Ｅを測る。壁は掘り方から1.19ｍの高さまで残存していた。断面形は、ドーム形と推定される。中央に主軸と直交する幅15㎝、長さ57㎝、深さ２㎝の溝がある。玄門左には、一辺25㎝の方形を呈し、深さ10㎝を測る柱穴状の遺構が存在した。左壁奥から、直径２㎝、長さ45㎝の丸木が、掘り方にほぼ密着して検出された。壁面に見られる工具痕は、幅４㎝の直線状のものと、幅９㎝前後の刃先が少し湾曲したものがある。

陥没土中から、須恵器甕の破片、古瀬戸後期の志戸呂産のすり鉢の破片が出土している。

ＳＸ０３（第６図）

ＳＸ04と並んで位置する。現存する入り口部分は、湾曲するスロープ状を成している。

玄室部分は、幅2.60ｍ、奥行1.92ｍの隅丸の長方形を呈し、主軸方位はＮ－30°－Ｗを測る。左壁は、10㎝の高さを残してＳＸ04とつながっている。また、左玄門近くからＳＸ04まで溝が伸びる。右壁際から礫・岩が１点ずつ、左壁際から礫が１点検出されたが、右壁際の礫だけが掘り方に密着していた。礫の１点には、火を受け赤化し、煤が付着していた。工具痕はほとんど見られなかった。

陥没土中から、弥生土器ないしは古式土師器の破片が出土している。

ＳＸ０４（第７図）

ＳＸ03の東に隣接し、入り口部分は、南西隅の一部を残し崩落していて、スロープ状を呈する。

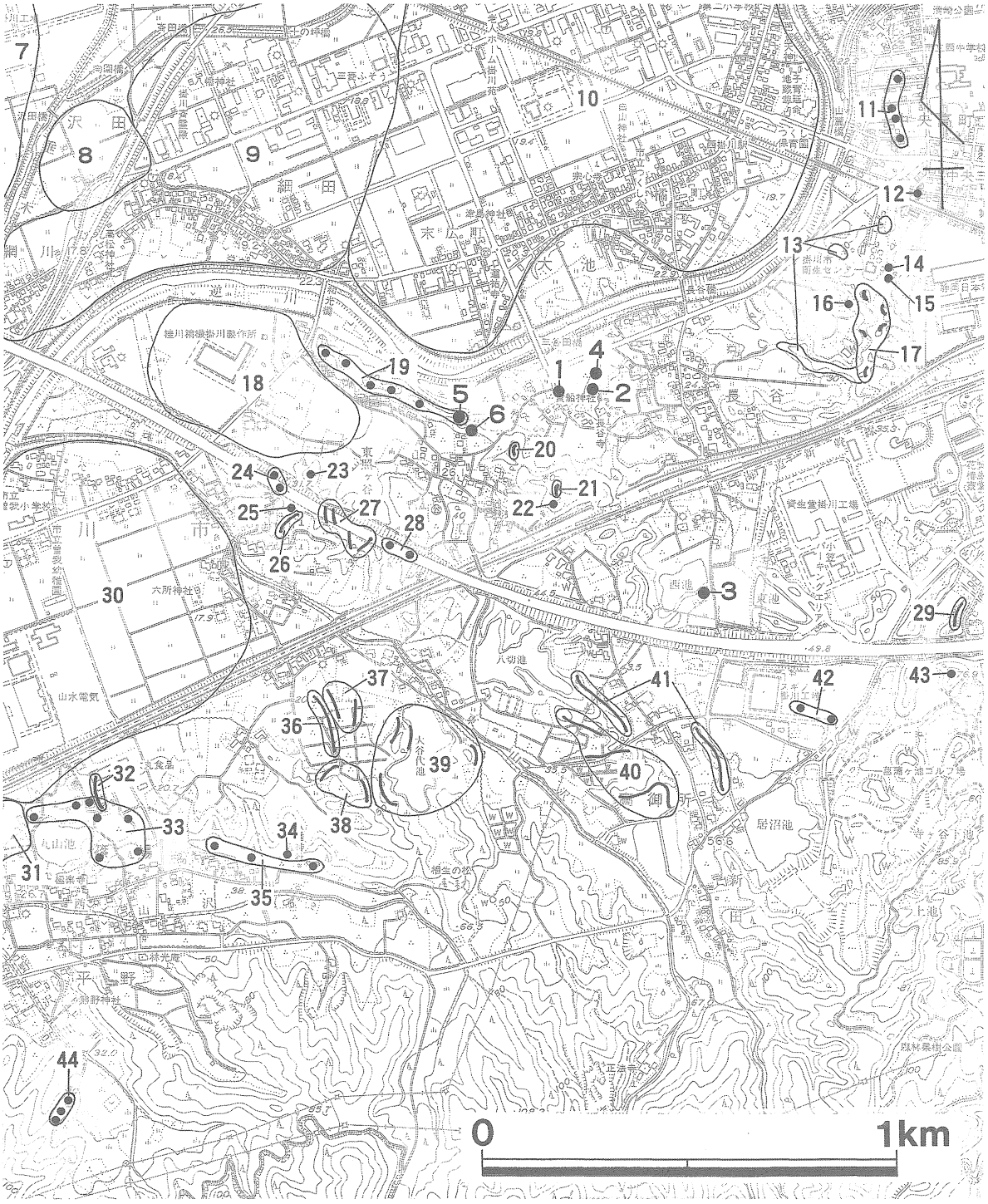
玄室部分は、幅2.65ｍ、奥行2.15ｍの長方形を呈し、主軸方位はＮ－12°30′－Ｗを測る。左前壁部分は幅62㎝、長さ1.12ｍ、深さ10㎝の長方形に掘り窪められていて、その中はさらに幅40㎝、長さ50㎝、深さ20㎝の方形に掘り窪められている。この掘り窪められた部分に向かい、前壁に沿ってＳＸ03、玄室中央、右壁中ほどから溝が掘られている。玄室の掘り方は、中央の排水溝を意識してか、中央部がもっとも低くなっている。中央から、煤が付着して黒ずんだ礫と火を受けて赤化した礫が掘り方から少し浮いた状態で検出されたが、礫の下から木の葉が検出されていて、原位置を動いていると判断される。工具痕はほとんど見られなかった。

ＳＸ０５（第８図）

地下式壙の中で最東端に位置し、最も残存状況が良かった。開口部は、70㎝×90㎝を測り、そこから竪坑が1.60ｍ伸び、30㎝のステップがあり、さらに33㎝下降し、また27㎝のステップがあり、そこから42㎝下降して玄室部分に至る。

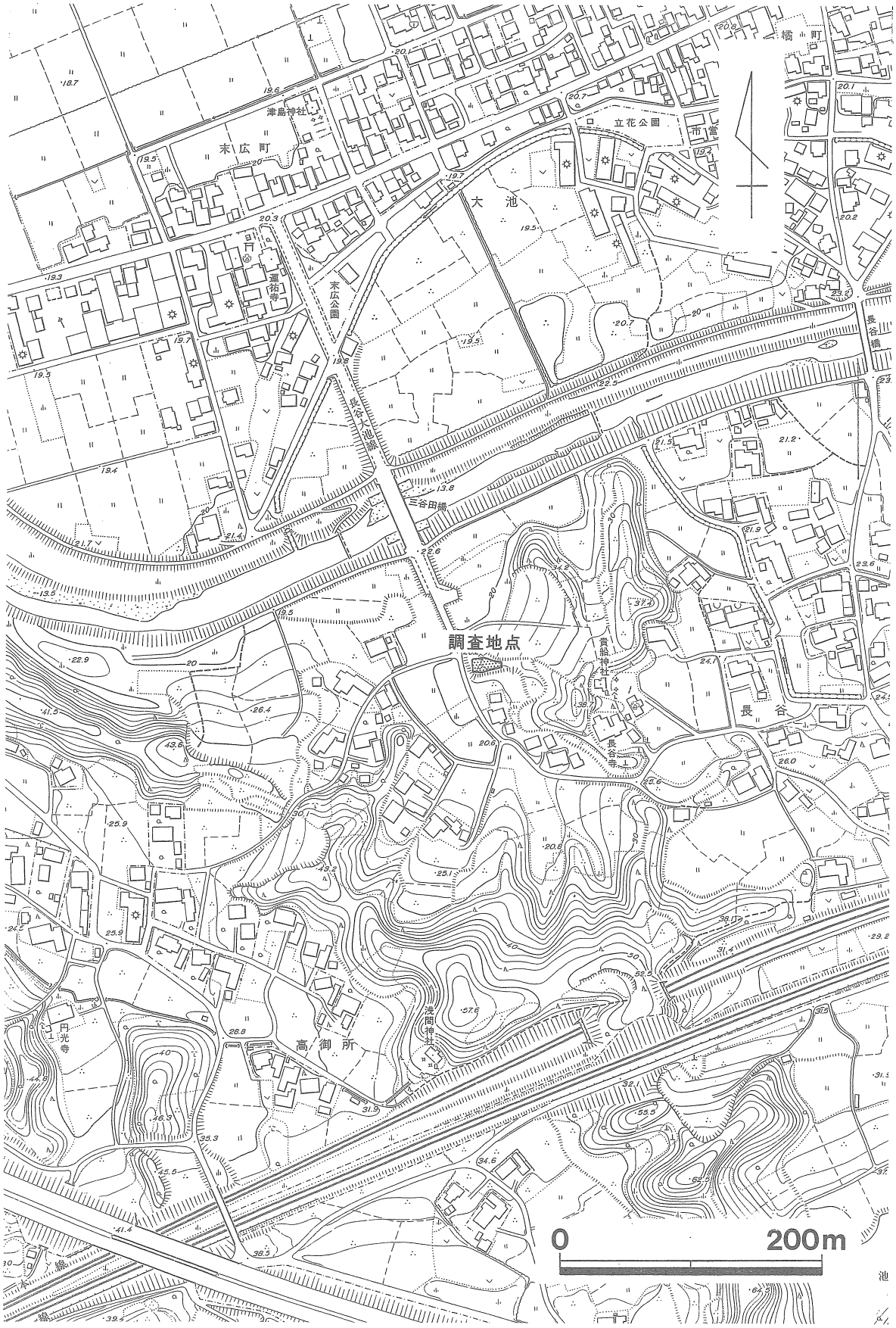
玄室部分は、幅2.22ｍ、奥行2.03ｍの平面円形に近く、主軸方位は、Ｎ－66°30′－Ｅを測る。左壁はほぼ垂直に立ち上がるが、右壁は緩く湾曲する。天井の横断面形は緩く湾曲するが、縦断面は、玄門に向い高くなる。掘り方の右壁に沿って幅10㎝前後の溝があり、その先に幅70㎝、長さ95㎝、深さ30㎝の楕円形の穴がある。左壁の前壁際には、幅35㎝、長さ52㎝、深さ５㎝の穴がある。右壁に１ヶ所、左壁に２ヶ所、標高約23.3ｍの高さの所に穴が穿たれている。前壁には、幅15㎝前後の穴とそれより一回り幅広い30㎝の穴が交互に穿たれているが、一回り大きな方が標高約23.3ｍ、小さい方は約23.4ｍと、高さが異なっている。中央の玄門寄りから、長さ10㎝～20㎝の礫が３点検出され、うち１点には煤が付着していた。これらの礫は、原位置から移動している可能性が高い。工具痕は、幅９㎝の少し湾曲したものが見られた。

流入土中から、19世紀以降の瀬戸・美濃産の甕の破片が出土している。

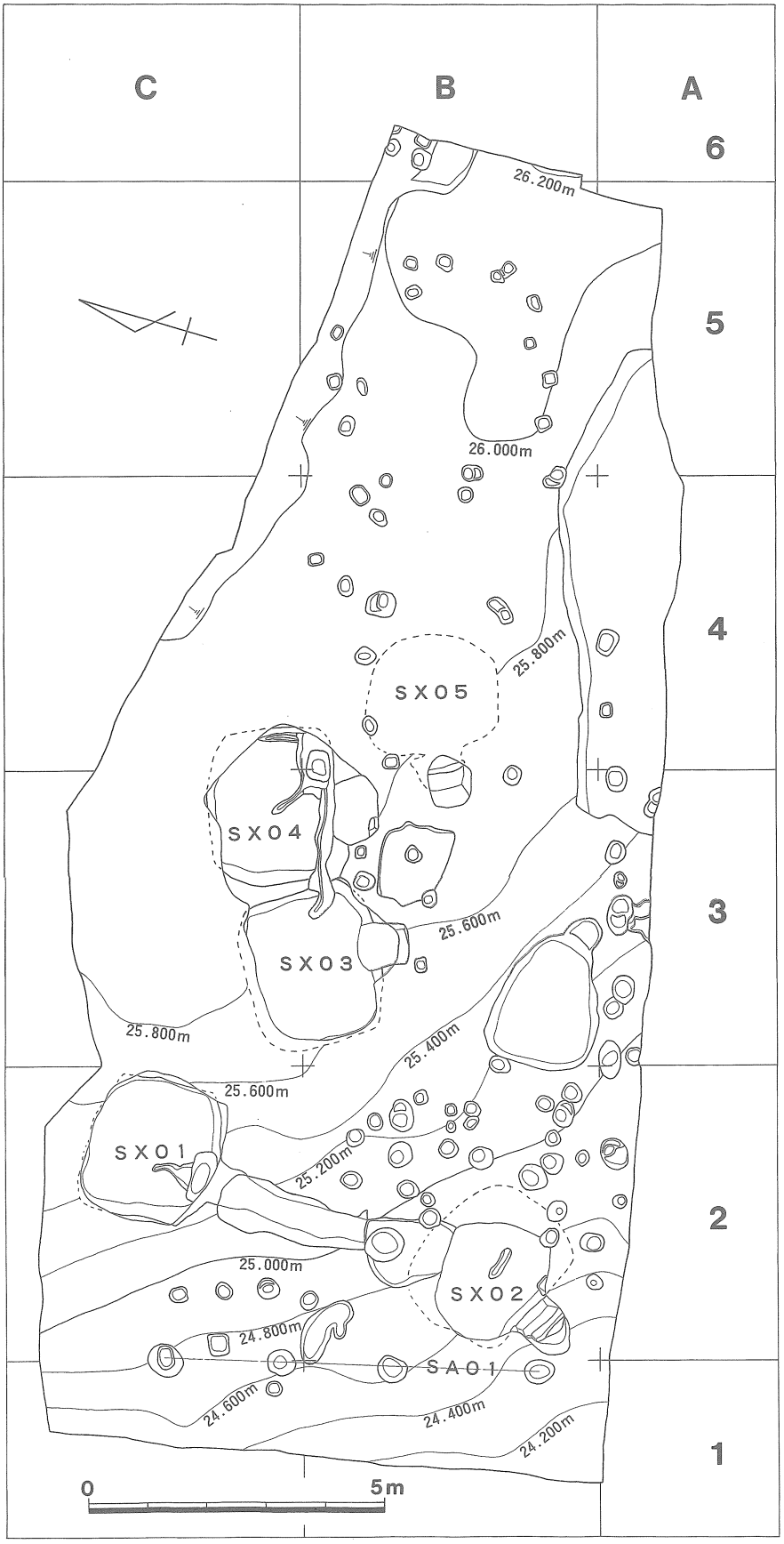


第１図　遺跡の位置と周辺遺跡分布図

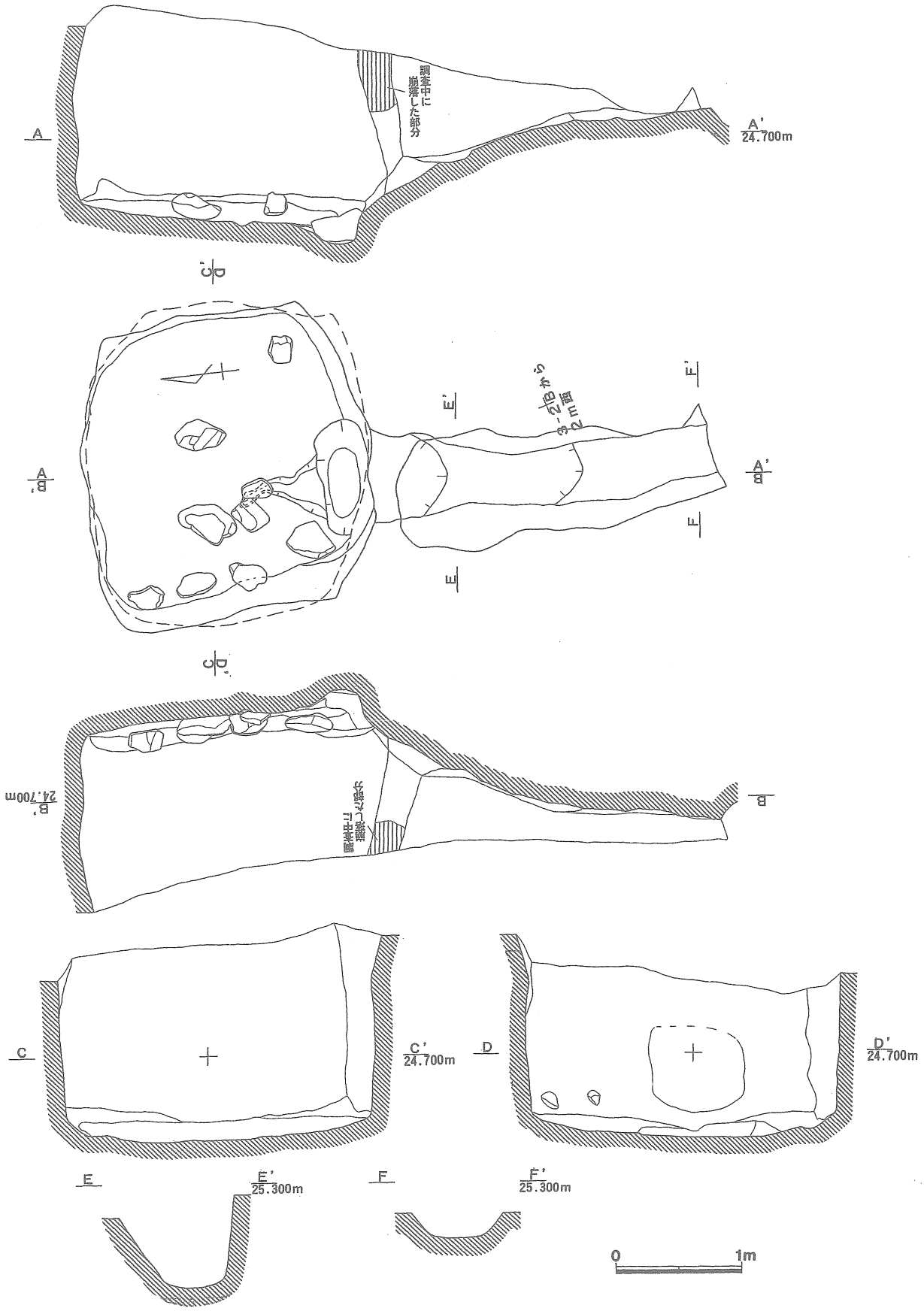
１.向山遺跡　２.東ノ谷遺跡　３.西池古墳　４.山脇横穴群　５.本村遺跡・前坪古墳群６号墳
６.本村横穴群Ｅ群　７.黒田遺跡　８.沢田遺跡　９.細田遺跡　10.大池遺跡　11.山麓古墳群
12.山麓山横穴　13.堀ノ内遺跡　14.宇洞ヶ谷横穴　15.堀ノ内古墳群13号墳　16.堀ノ内古墳群14号墳
17.堀ノ内横穴群　18.前坪遺跡　19.前坪古墳群　20.向山横穴群　21.前山横穴群　22.間神社古墳群３号墳
23.天上塚古墳　24.本村古墳群　25.屋敷越古墳　26.屋敷越横穴群　27.本村横穴群　28.東照ヶ谷古墳群
29.寺ヶ谷横穴群　30.領家遺跡　31.曽我山砦跡　32.丈山横穴群　33.丈山古墳群　34.八幡神社脇古墳
35.篠場古墳群　36.十二ヶ谷横穴群　37.斉兵衛ヶ谷横穴群　38.金兵衛谷田横穴群　39.大谷代横穴群
40.南坪横穴群　41.新田横穴群　42.池ノ奥古墳群　43.寺ヶ谷古墳　44.居村古墳群・居村遺跡


橋町
津島神社
末広町
立花公園
市営
大池
末広公園
長谷大池線
三谷田橋
長谷橋
調査地点
長谷
長谷寺
高御所
円光寺
浅間神社
0
200m

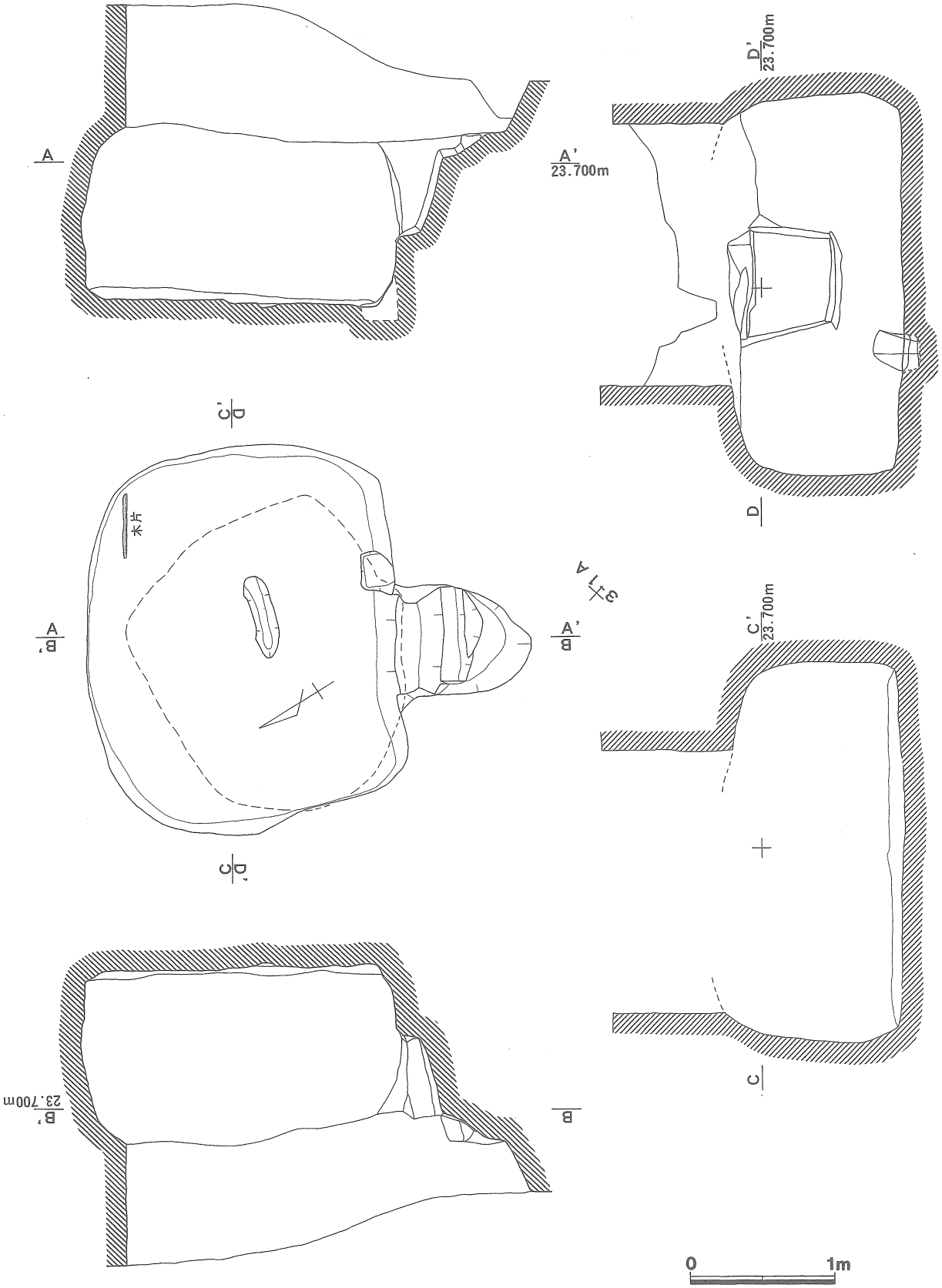
第２図　位置図


C
B
A
6
5
4
3
2
1
26.200m
26.000m
25.800m
SX05
SX04
SX03
25.600m
25.800m
25.400m
25.600m
SX01
25.200m
25.000m
SX02
24.800m
SA01
24.600m
24.400m
24.200m
0
5m

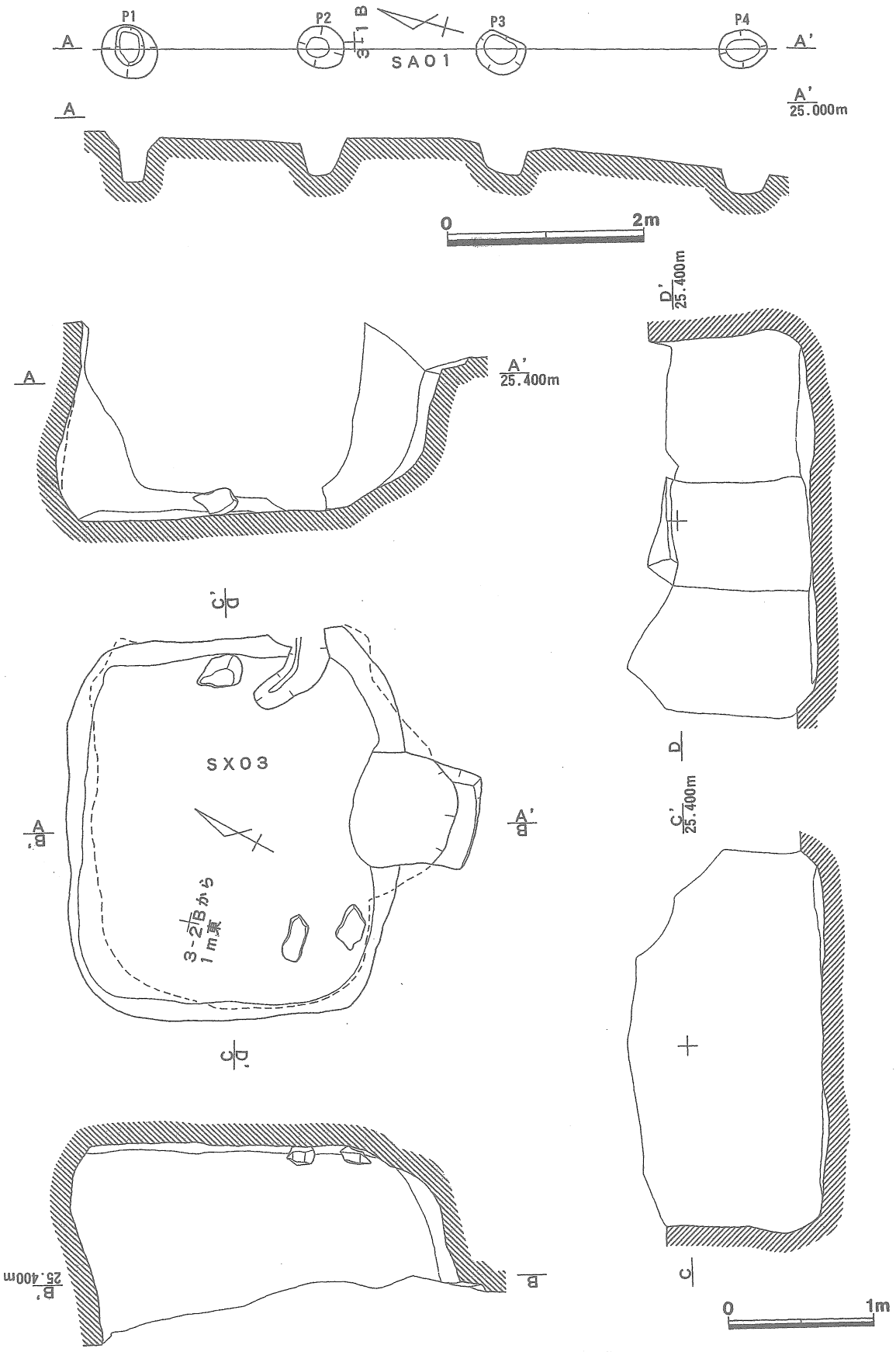
第３図　遺構全体図


調査中に崩落した部分
A
A'
24.700m
C
C'
24.700m
D
D'
24.700m
E
E'
25.300m
F
F'
25.300m
0
1m

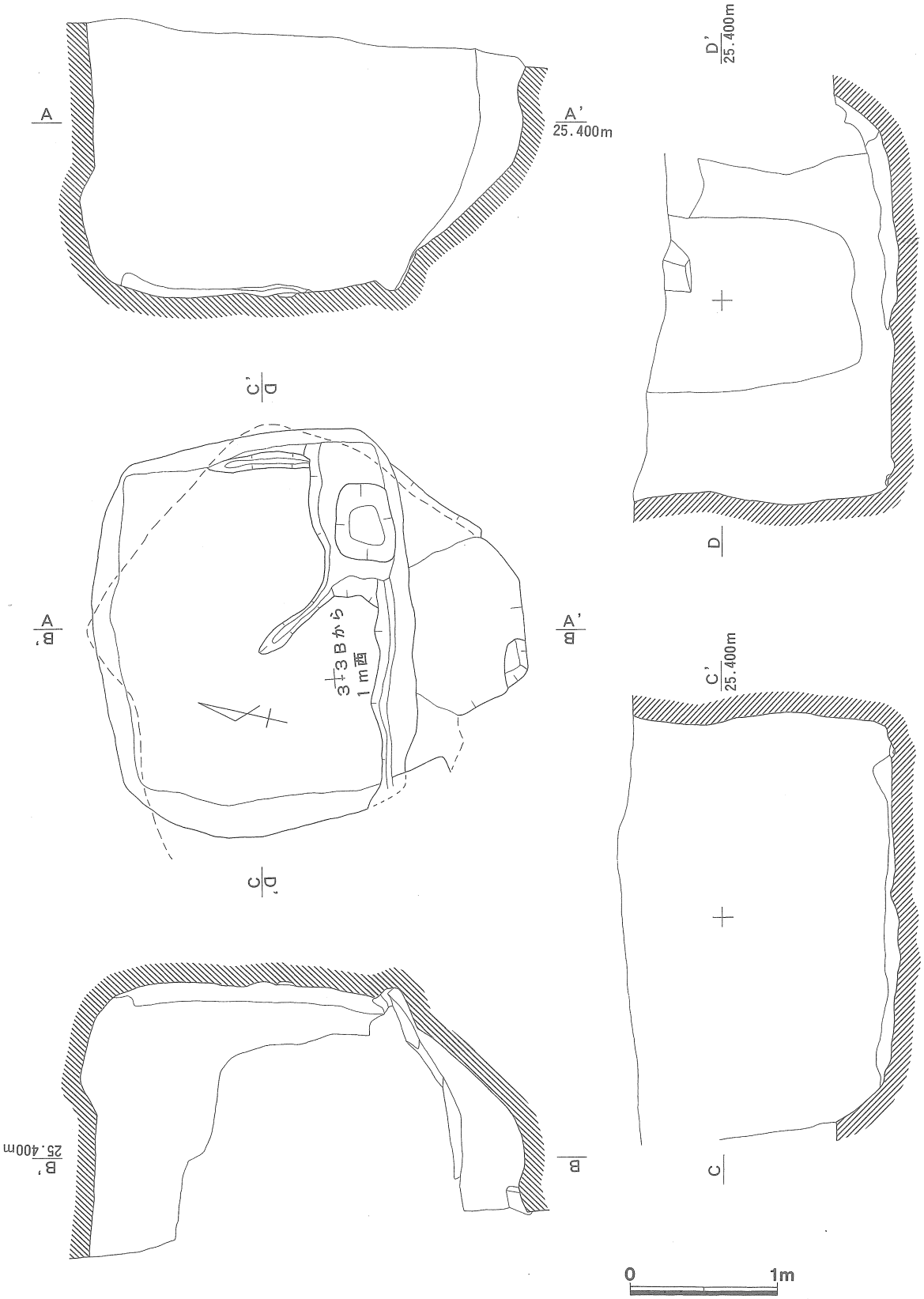
第４図　ＳＸ０１実測図



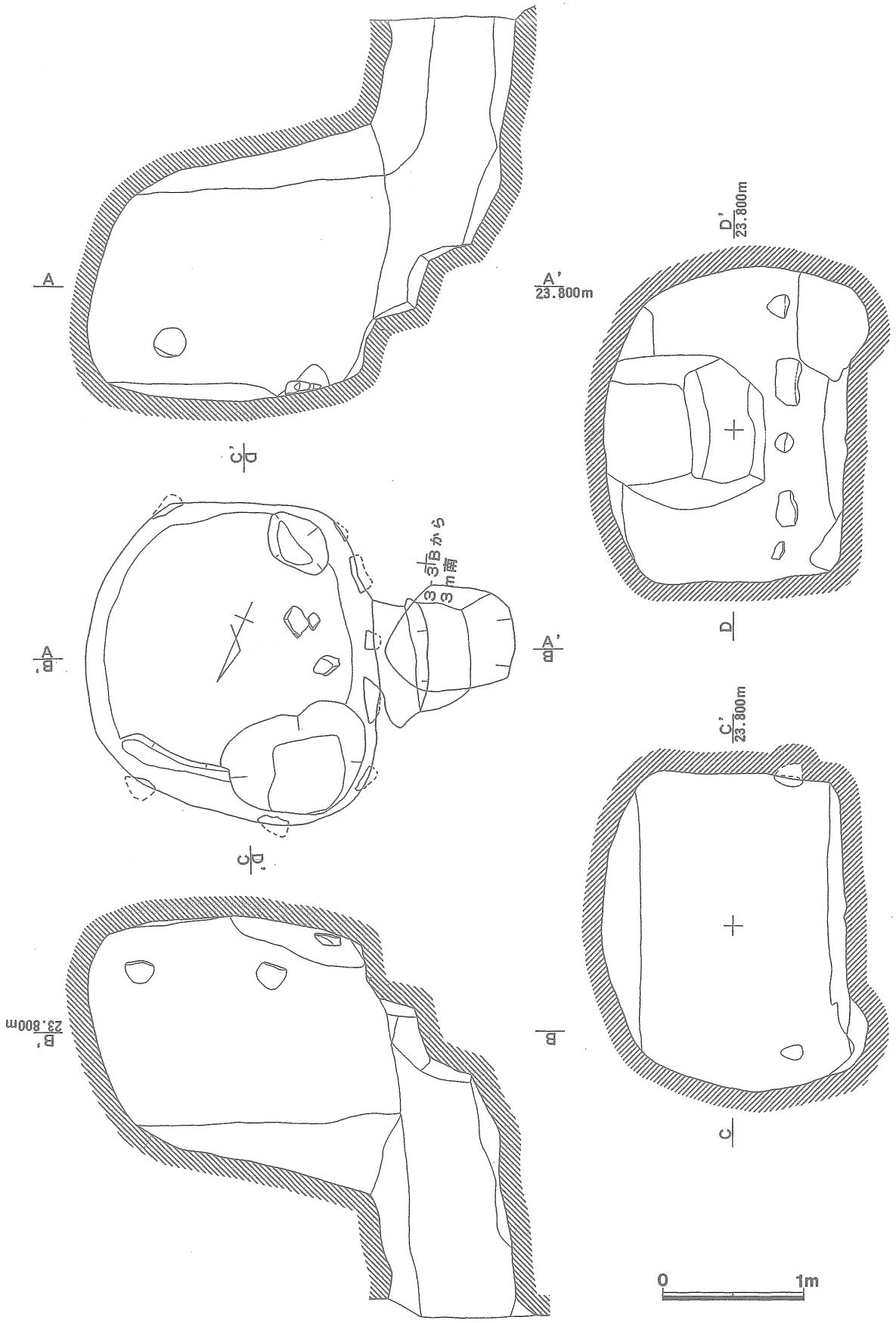
第５図　ＳＸ０２実測図



第6図　SA01・SX03実測図



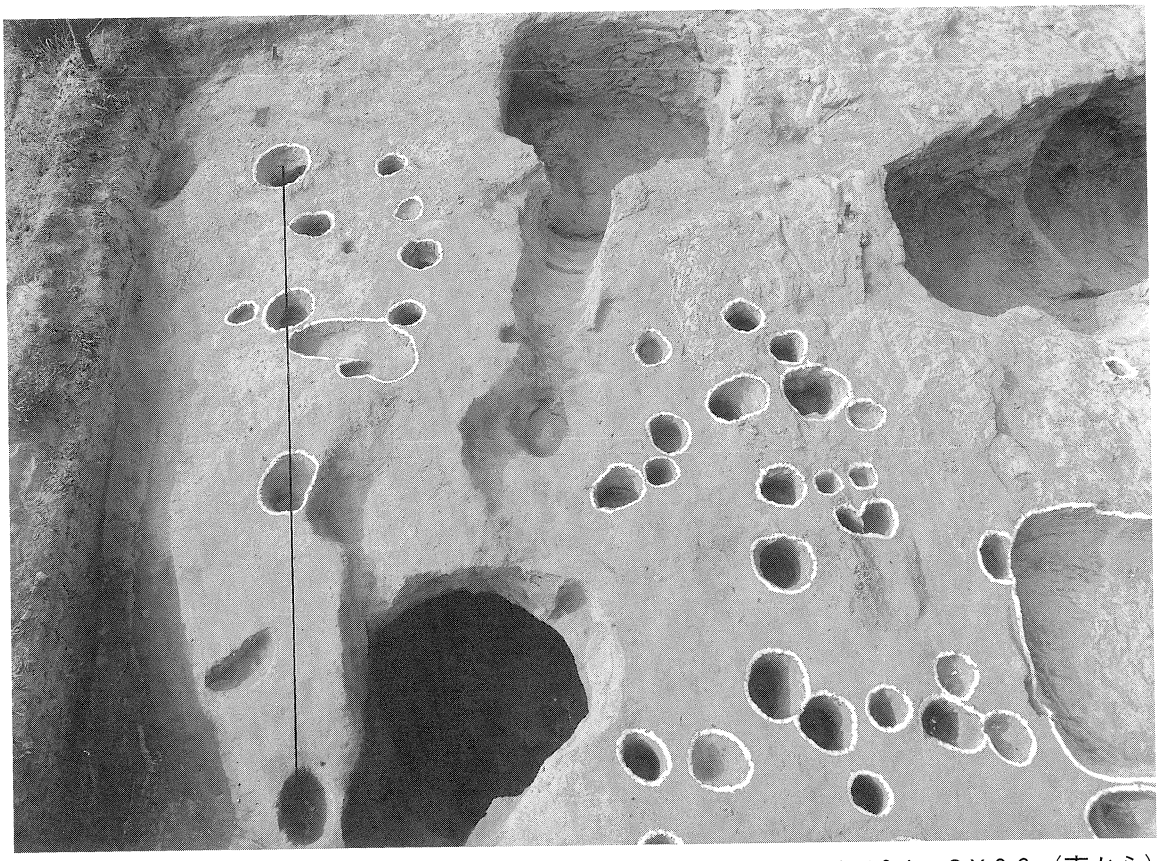
第７図　ＳＸ０４実測図



第８図　ＳＸ０５実測図

図版 1

調査区全景（東から）



SA01・SX01・SX02（南から）

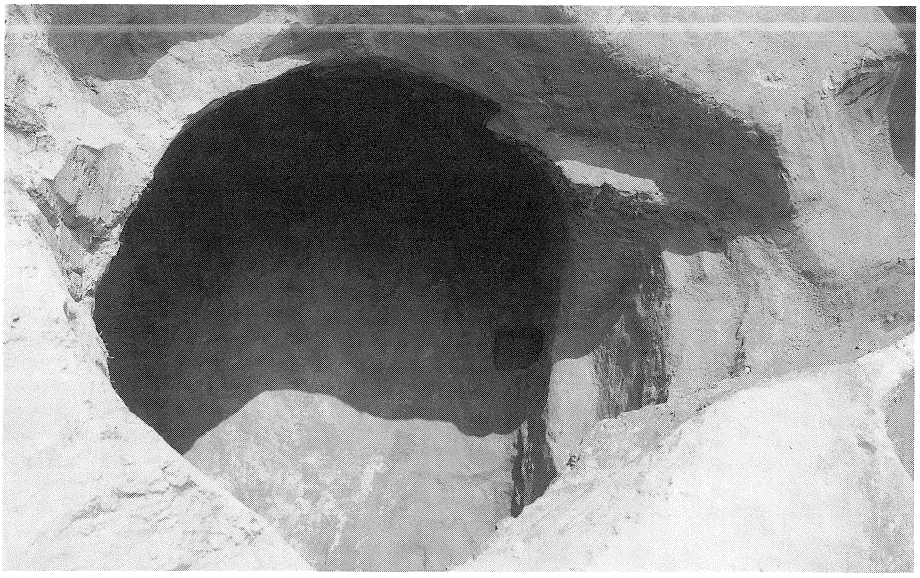
図版 2

ＳＸ０１玄室内部
（北東から）

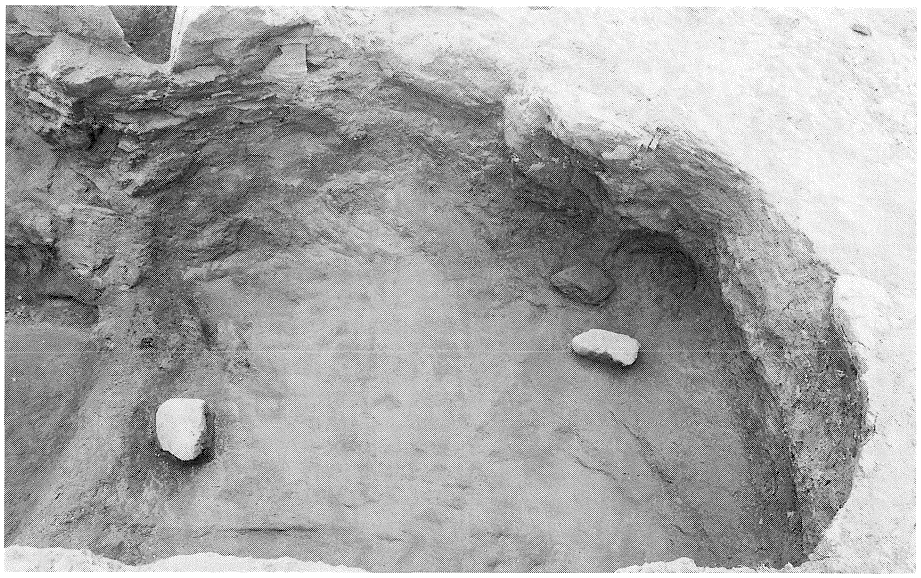
ＳＸ０１玄門
（北から）

ＳＸ０２完掘
（北から）

図版 3



ＳＸ０２完掘
（西から）



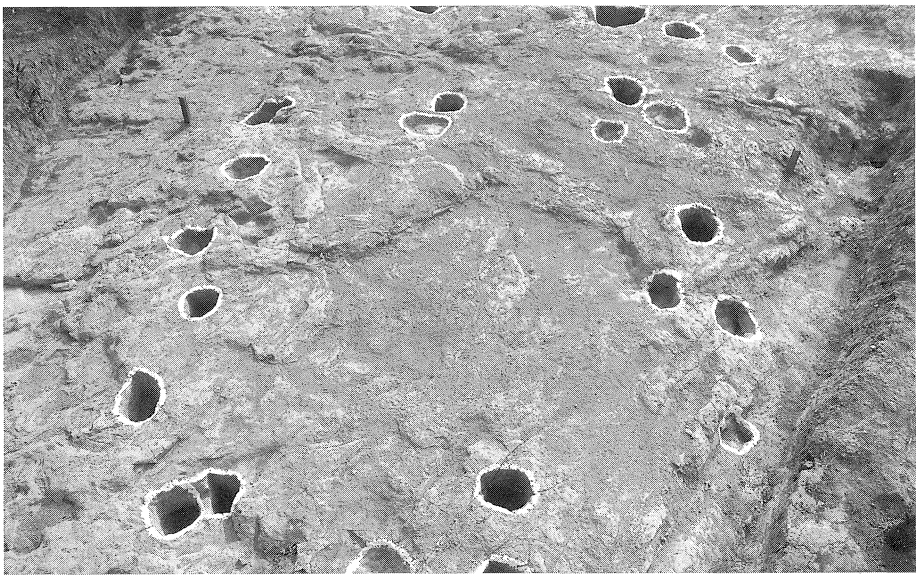
ＳＸ０３玄室内部
（北から）

ＳＸ０３完掘
（南から）

図版 4

ＳＸ０４完掘
（南から）

ＳＸ０３・ＳＸ０４
（東から）



調査区東端ピット群
（東から）

Ⅲ　東ノ谷遺跡

1. 調査の概要

遺跡は、北に向かって傾斜する斜面に作られた小集落で、調査前は茶畑になっていた。バックホウで耕作土を除去し、その後、人力により精査・遺構確認を行った。

調査に当たっては、調査区の形に合わせて５ｍ方眼のグリッドを設定することとし、座標の北から西に12度振れるラインを南北軸とした。

現地での図面作成は、20分の１の縮尺により、一部10分の１の縮尺で微細図を作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成７年８月８日から11月２日まで、現地調査を行った。

2. 遺構の概要

調査により検出した竪穴住居跡、掘立柱建物跡、性格不明の遺構を、順に概要を述べる。

竪穴住居跡

ＳＢ０１（第３図）

今回確認された５軒の竪穴住居跡の中で、最も東、最高所に位置する。残存状況は良好ではなく、住居跡の北東の壁溝と柱穴、炉址の確認にとどまる。柱穴のうち、Ｐ２は２つが近接し、Ｐ４は切り合いがあることから、建て替えの可能性がある。柱穴間の距離は、Ｐ１・Ｐ２間が2.9ｍ、Ｐ２・Ｐ３間が3.85ｍを測る。炉址は、柱穴を結んだラインの中央からはるかに北に寄っている。Ａ－Ａ′の土層断面の２層と３層の境が床面の可能性がある。炉址は粘土を３㎝程度の厚さに貼ったものである。弥生土器の小破片が出土している。

ＳＢ０２（第４図）

斜面に堆積した黒色土を掘り込んで造られている。焼失家屋で、焼け落ちた垂木と思われる部材や茅は見られたが、柱材が全く見られないことから、焼失後に何らかの理由で柱材が抜き取られたと考えられる。検出された炭化材の樹種同定結果を巻末に掲載した。

平面形は、東西4.56ｍ、南北5.23ｍの隅丸方形に近い形である。11層・12層が炉址で、10層と14層の境、６層～８層と13層の境が床面である。Ｂ－Ｂ′の土層で、壁溝状の断面が確認できた。炭化材は８層･10層に混入していたが、８層･10層を覆う５層から焼土が検出された。柱穴間の距離は、Ｐ１・Ｐ２間が2.35ｍ、Ｐ２・Ｐ３間が2.75ｍを測る。炉址は柱穴を結んだラインの中央から北に寄る。Ｐ１とＰ２のほぼ中間に小穴Ｐ５が存在する。Ｐ６は、貯蔵穴である。土器は少量出土した。台付き甕は、Ｐ２とＰ３を結んだ線の東側から、壺・鉢は、住居跡の北寄りから出土している。

ＳＢ０３（第５図）

調査区の南西隅から検出された住居跡で、ＳＢ02同様焼失家屋であり、炭化材が検出された。

住居跡の現存の平面形は、東西5.05ｍ、南北4.50ｍの隅丸方形に近い形である。Ａ－Ａ′断面の５層が貼床で、４層は壁溝であるが、掘り方までは達していない。完掘した掘り方は、壁際を掘り窪めたドーナツ状の掘り方である。柱穴間の距離は、Ｐ１・Ｐ２間が3.05ｍ、Ｐ１・Ｐ３間が、2.80ｍを測る。炉址は、柱穴を結んだラインの中央から南西に寄り、表面に粘土が貼られていた。ＳＢ02同様、Ｐ１とＰ２の中間に小穴Ｐ４が存在する。Ｐ５が、貯蔵穴である。第９図・第10図に図示した土器の

うち、第９図－10・11・14、第10図－16が炉の南東から、第９図－12がＰ５内から、第10図－17～19がＰ２の東の壁際から出土している。第11図－１の磨石が、Ｐ４の南から出土している。

ＳＢ０４（第３図）

調査区の中央南寄りの斜面から検出された溝状遺構と小穴群を、ＳＢ04とした。溝状遺構の断面の１層中には炭・焼土ブロックが多量に混入し、下端は火を受けて硬く焼け締まっていた。２層中に炭が少量混入していた。この溝状遺構を壁溝の可能性があると考えＳＢ04としたが、小穴で組み合わさるものはない。溝状遺構から、弥生土器の小破片が出土している。

ＳＢ０５（第５図）

調査区の中央から検出された溝状遺構を、ＳＢ05とした。３層・４層を覆土とする溝は弧を描き、円形と仮定すると外周の直径7.34mとなる。１層から４層までに、炭・焼土は混じらない。１層・２層を覆土する遺構から、弥生土器壺の小破片が出土している。

掘立柱建物跡

ＳＨ０１･ＳＨ０２（第６図）

Ｐ１～Ｐ８で構成される掘立柱建物をＳＨ01、Ｐ９～Ｐ16で構成される掘立柱建物をＳＨ02とした。この２棟の建物はともに１間（3.1m）×３間（５m）の規模で、主軸方向は同じで、Ｎ－15°－Ｗを測る。東西方向に60cmほどずれていて、ＳＨ02の方が高い所に位置する。柱穴の規模は、ＳＨ01が直径50cm前後で、ＳＨ02は60cmから85cmと一回り大きい。ａ－ａ′断面のＰ15の覆土の２層・４層・５層には、火を受けて茶褐色に変色した土が混じり、ｂ－ｂ′断面のＰ14の１層中にも火を受けて茶褐色に変色した硬い土が混入していた。ＳＨ01が火災により焼失した後に、東にずらしてＳＨ02を建てた可能性がある。柱穴からの遺物の出土はない。

ＳＨ０３（第７図）

ＳＢ05と重複する位置にある、東西１間（2.6m）、南北２間（2.8m）の柱穴を、掘立柱建物跡と判断した。主軸方位は概ねＮ－13°－Ｗを測る。柱穴は、直径70cm前後を測る。Ｐ２・Ｐ３・Ｐ４の断面観察では切り合いが見られ、建て替えの可能性がある。Ｐ４から弥生土器の小破片が出土している。

性格不明の遺構

ＳＸ０１（第７図）

東西1.62m、南北1.43mの楕円形の遺構で、底面に凹凸が見られ、１層中と２層の東半に１cm前後の炭と５mm前後の焼土ブロックが多量に混入していた。覆土の色調は、中世以降のものではない。

3. 遺物の概要

土器（第８図～第10図）

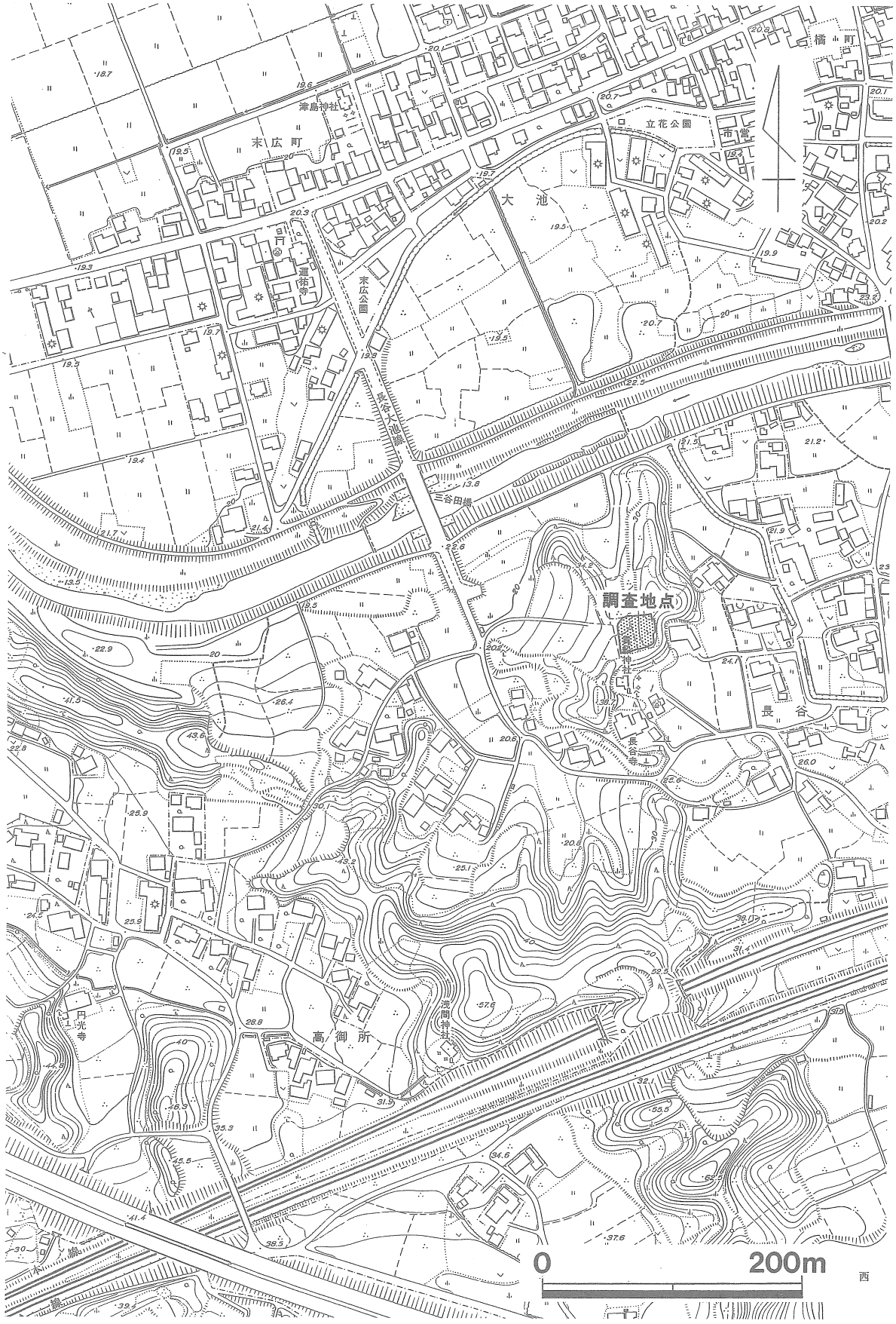
１～20まで、すべて弥生時代後期後半の菊川式に位置づけられる。３・４の台付き甕は、他の遺跡出土のものに比べ小型である。６は、台付き甕の口縁部破片と判断した。14の壺の口縁部内面には、ヘラ状工具による「く」の字状の陰刻が半周施される。

木製品（第11図）

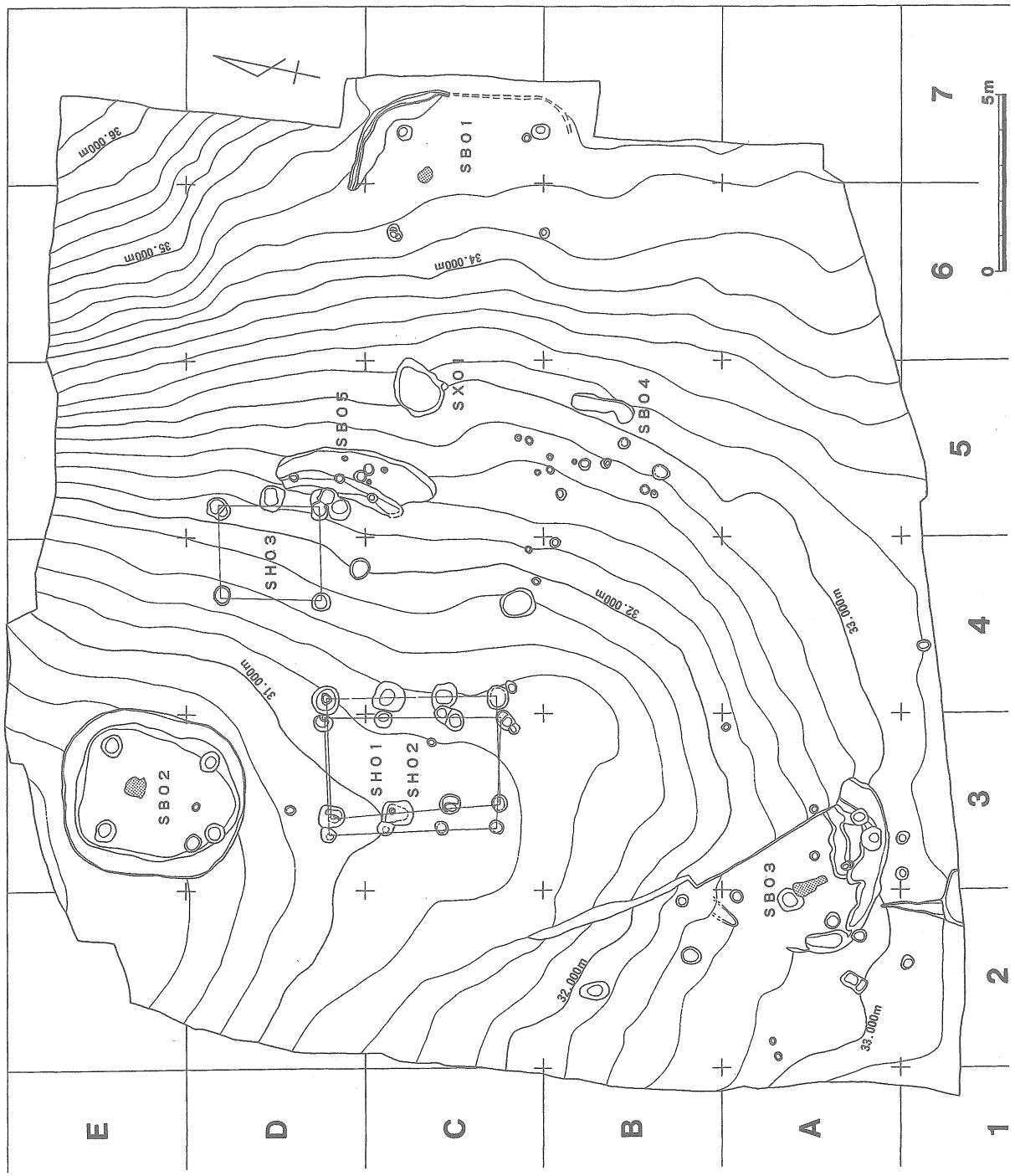
２・３は、６mm×９mmの楕円形で、長さ1.7cmを測り、直径３mmの穴が穿たれていて、管玉状を呈する。炭化していて、彩色の有無等は不明である。

石器（第11図）

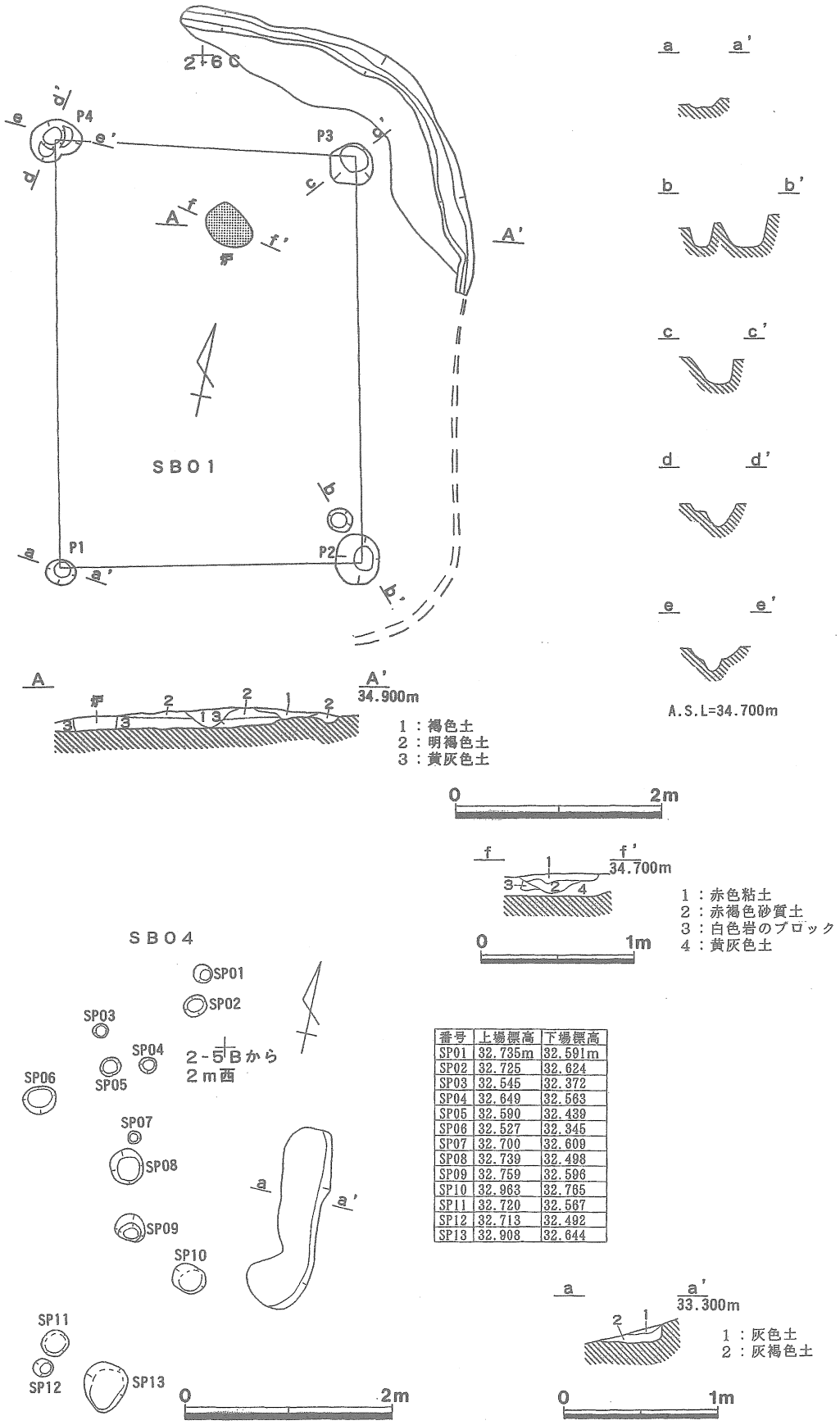
１の磨石は砂岩製で、全周磨られている。４は、ＳＢ02の南から出土した頁岩製の石鏃である。


末広町
津島神社
立花公園
市営
橋町
大池
末広公園
運命寺
長谷大池線
谷田橋
調査地点
長谷
長谷寺
高御所
浅間神社
円光寺
0
200m
西

第１図　位置図

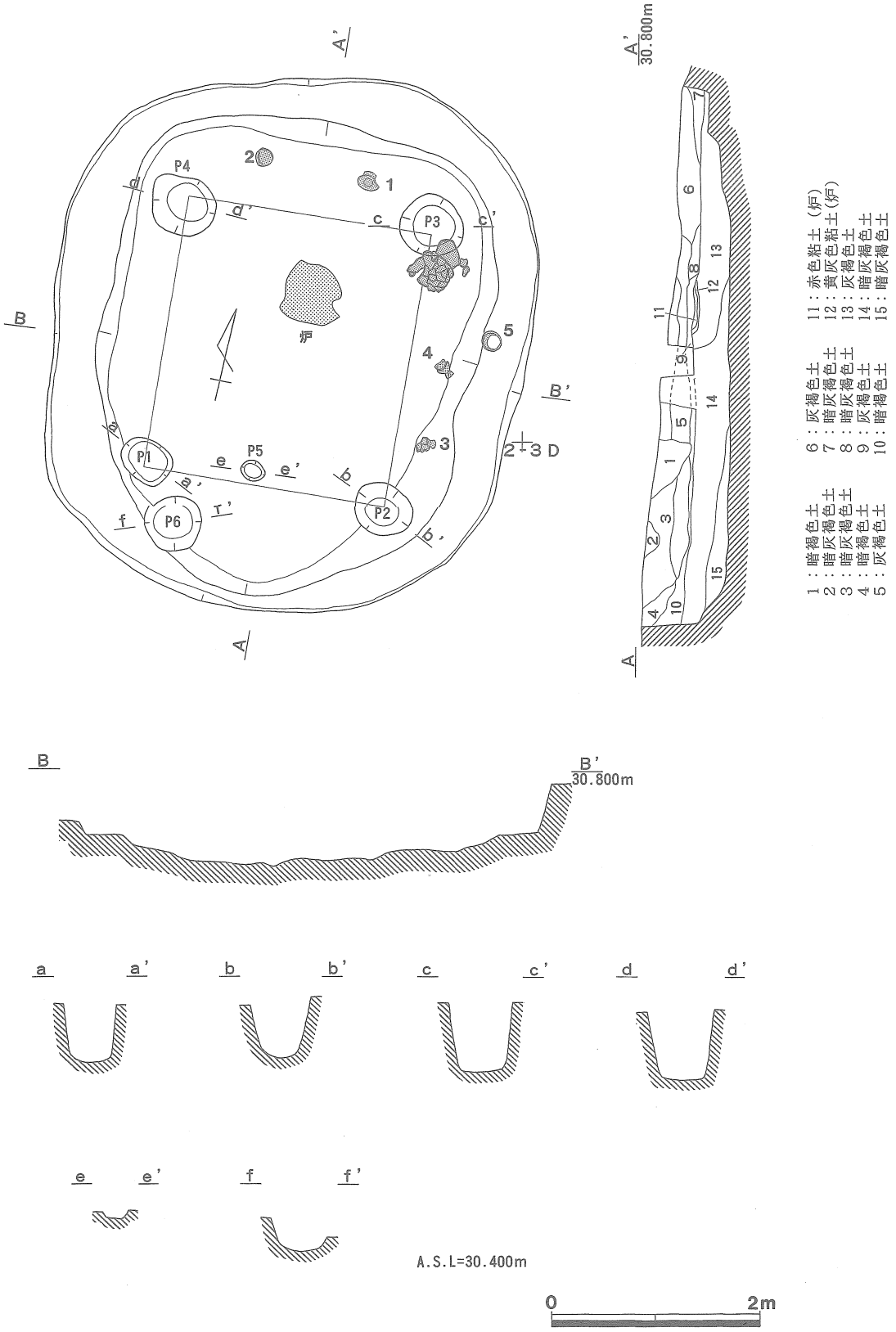

SBO1
SBO2
SBO3
SBO4
SBO5
SXO1
SHO1
SHO2
SHO3
36.000m
35.000m
34.000m
33.000m
32.000m
31.000m
32.000m
33.000m
E
D
C
B
A
1
2
3
4
5
6
7
0
5m

第２図　遺構全体図

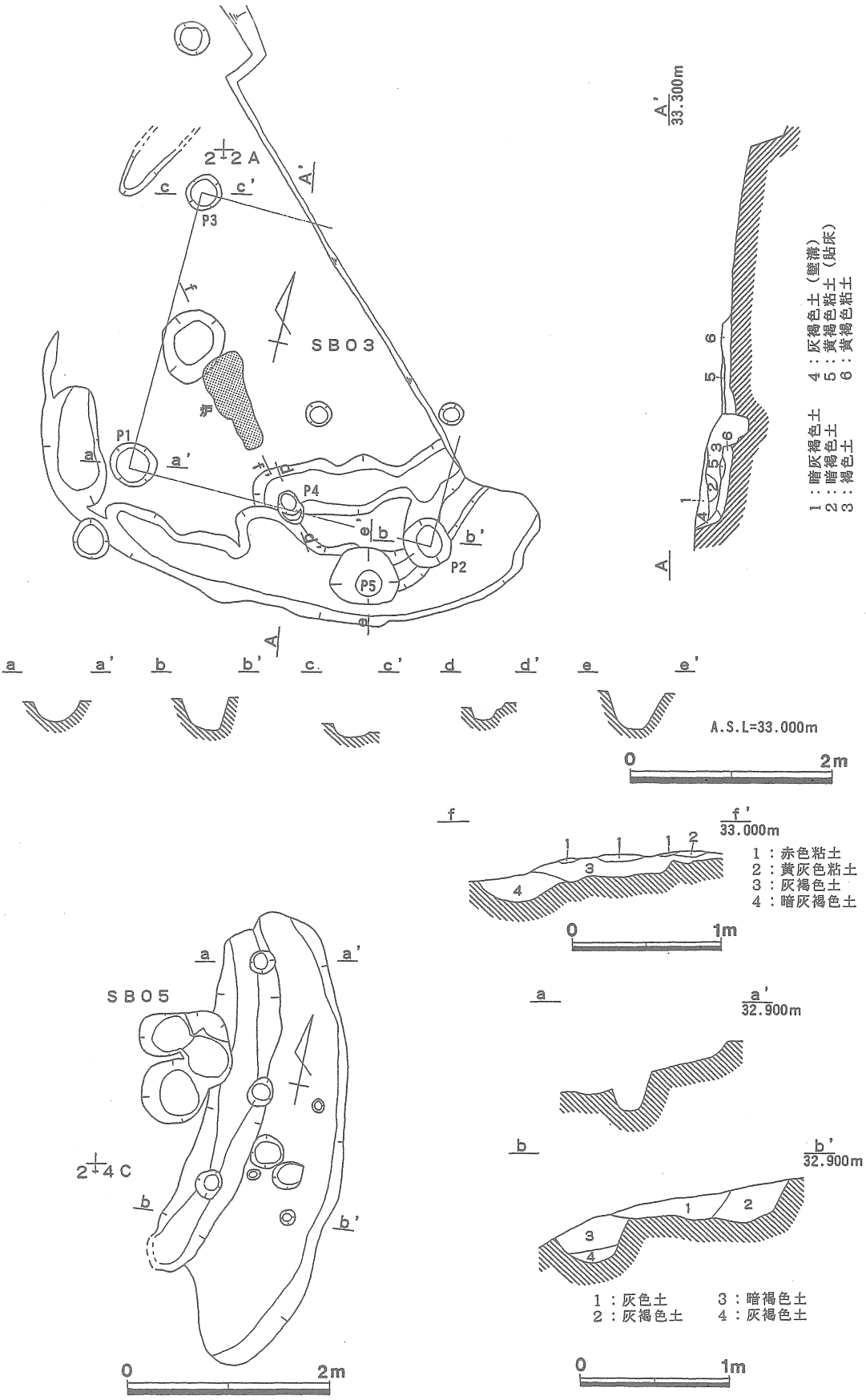


番号	上場標高	下場標高
SP01	32.735m	32.591m
SP02	32.725	32.624
SP03	32.545	32.372
SP04	32.649	32.563
SP05	32.590	32.439
SP06	32.527	32.345
SP07	32.700	32.609
SP08	32.739	32.498
SP09	32.759	32.596
SP10	32.963	32.765
SP11	32.720	32.567
SP12	32.713	32.492
SP13	32.908	32.644

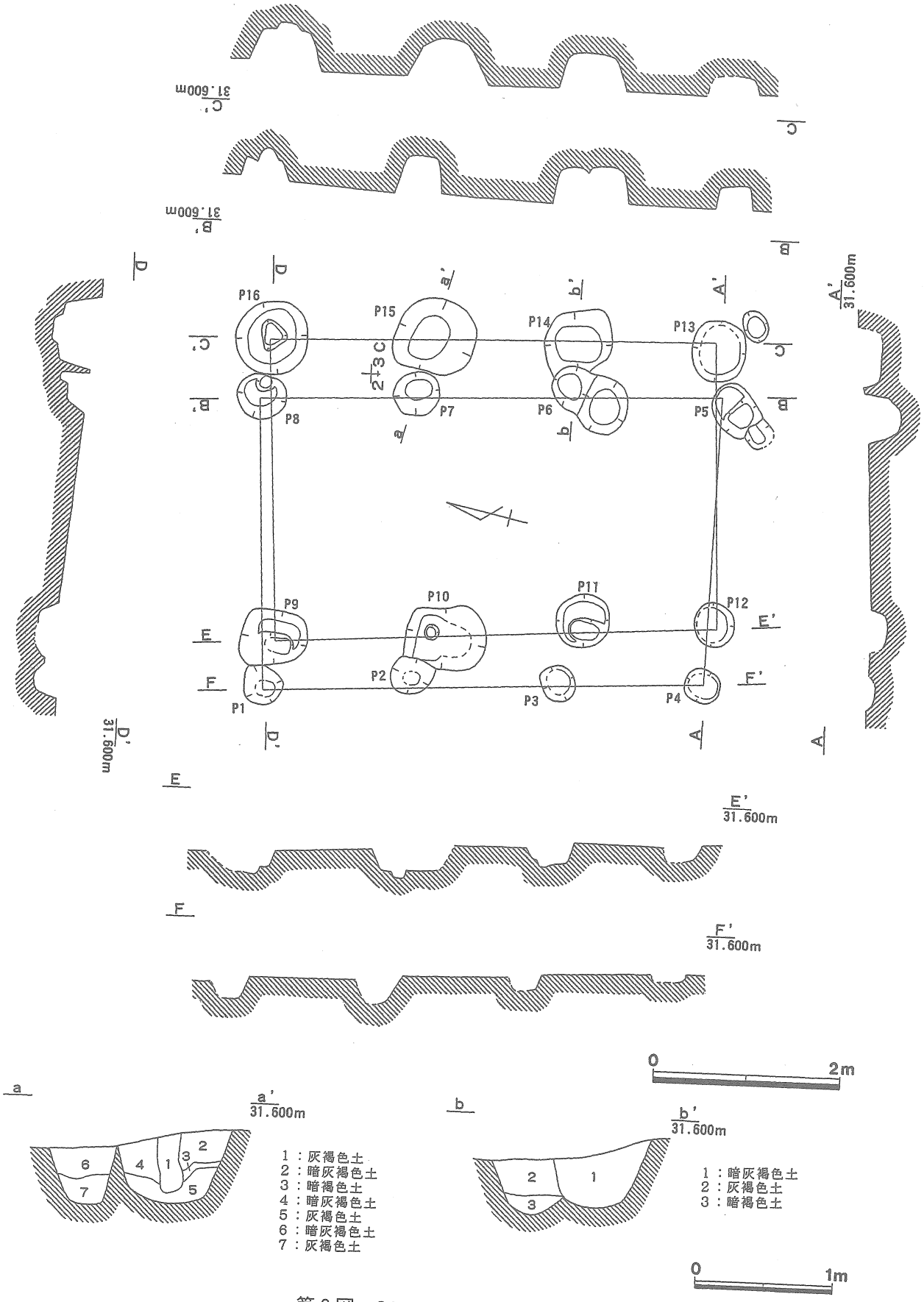
第３図　ＳＢ０１・ＳＢ０４実測図


A'
A
B
B'
P1
P2
P3
P4
P5
P6
a
a'
b
b'
c
c'
d
d'
e
e'
f
f'
2
1
5
4
3
2
3 D
A'
30.800m
A
B
B'
30.800m
A.S.L=30.400m
0
2m
1：暗褐色土
2：暗灰褐色土
3：暗灰褐色土
4：暗褐色土
5：灰褐色土
6：灰褐色土
7：暗灰褐色土
8：暗灰褐色土
9：灰褐色土
10：暗褐色土
11：赤色粘土（炉）
12：黄灰色粘土(炉)
13：灰褐色土
14：暗灰褐色土
15：暗灰褐色土

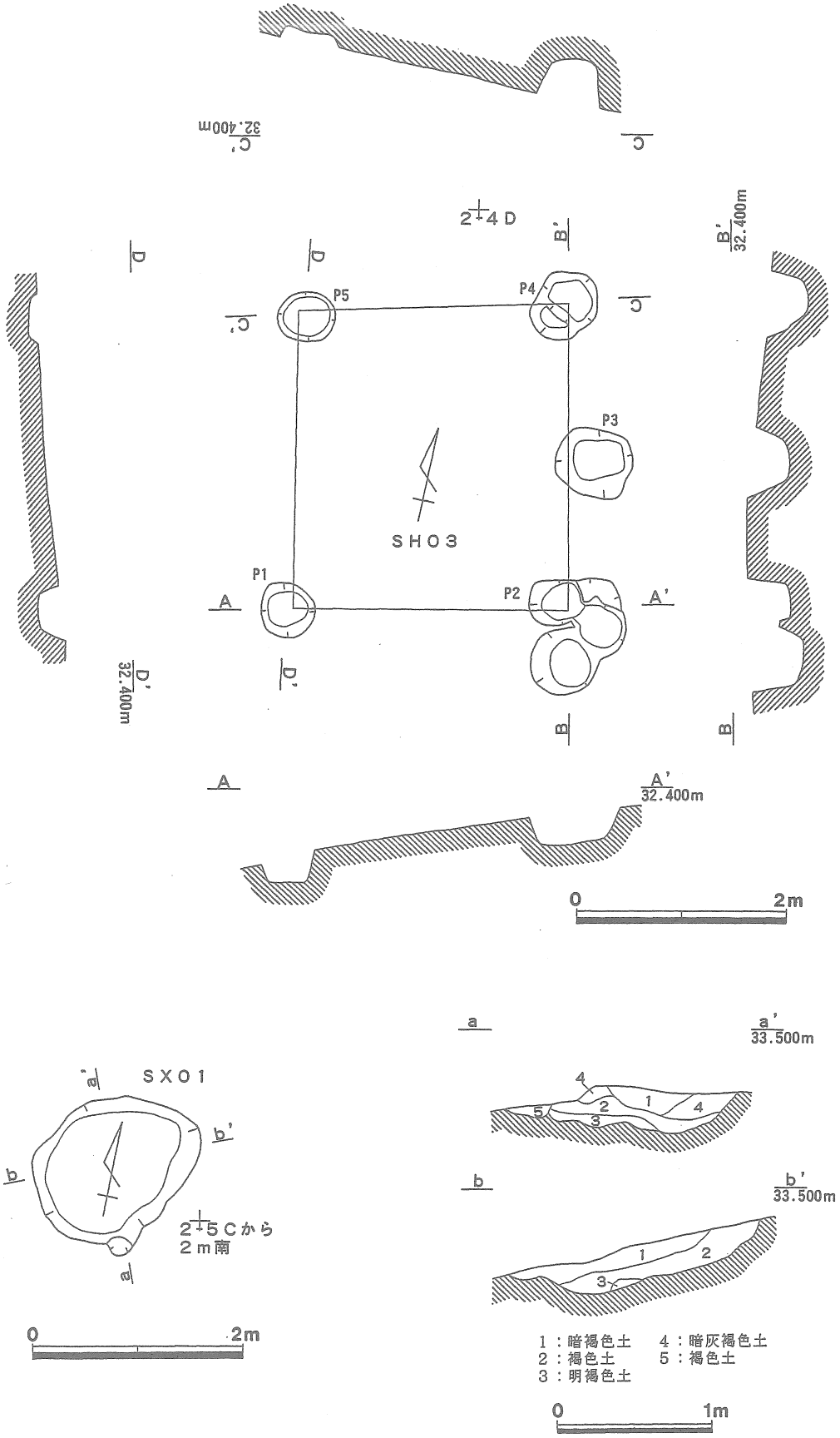
第４図　ＳＢ０２実測図



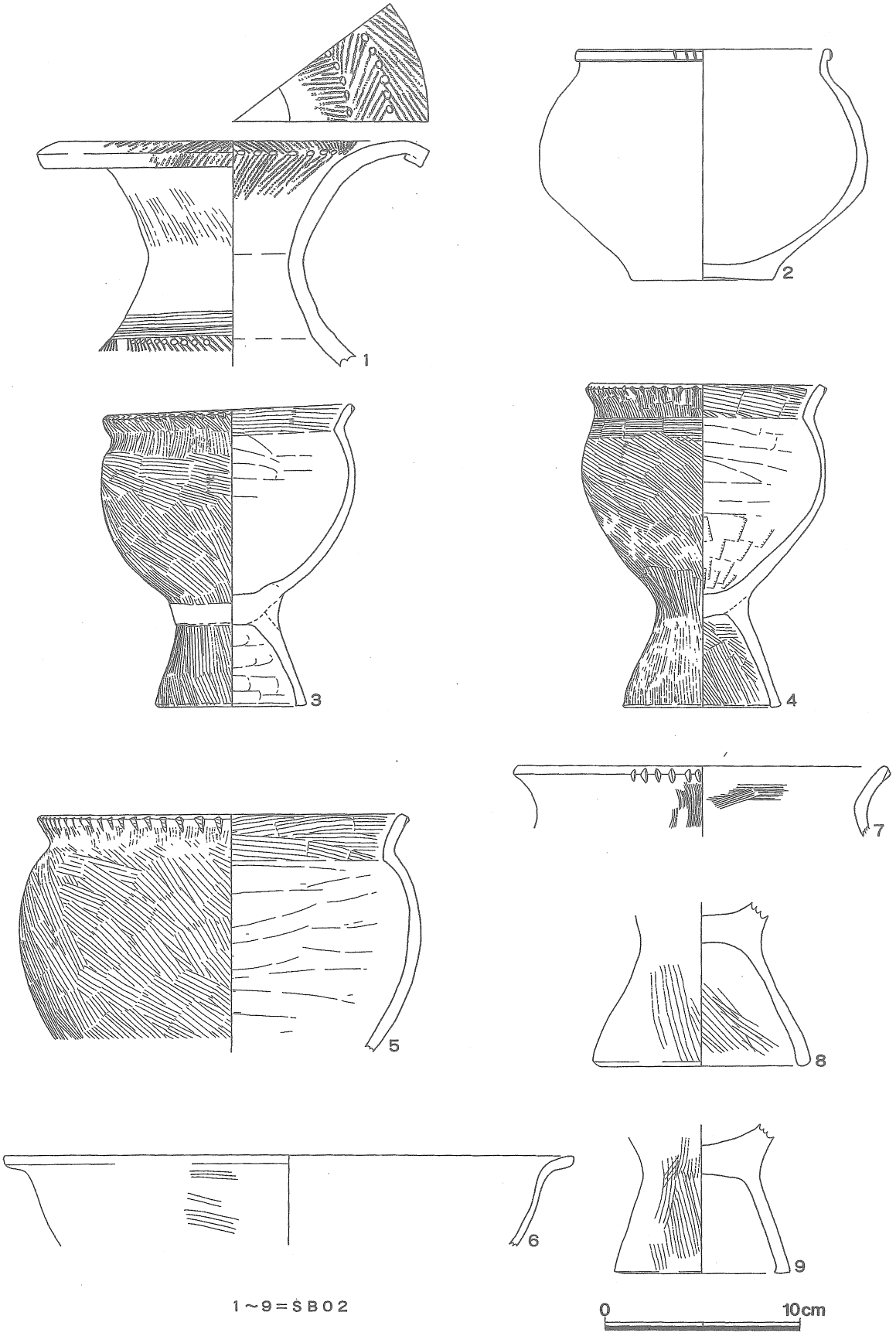
第5図　SB03・SB05実測図



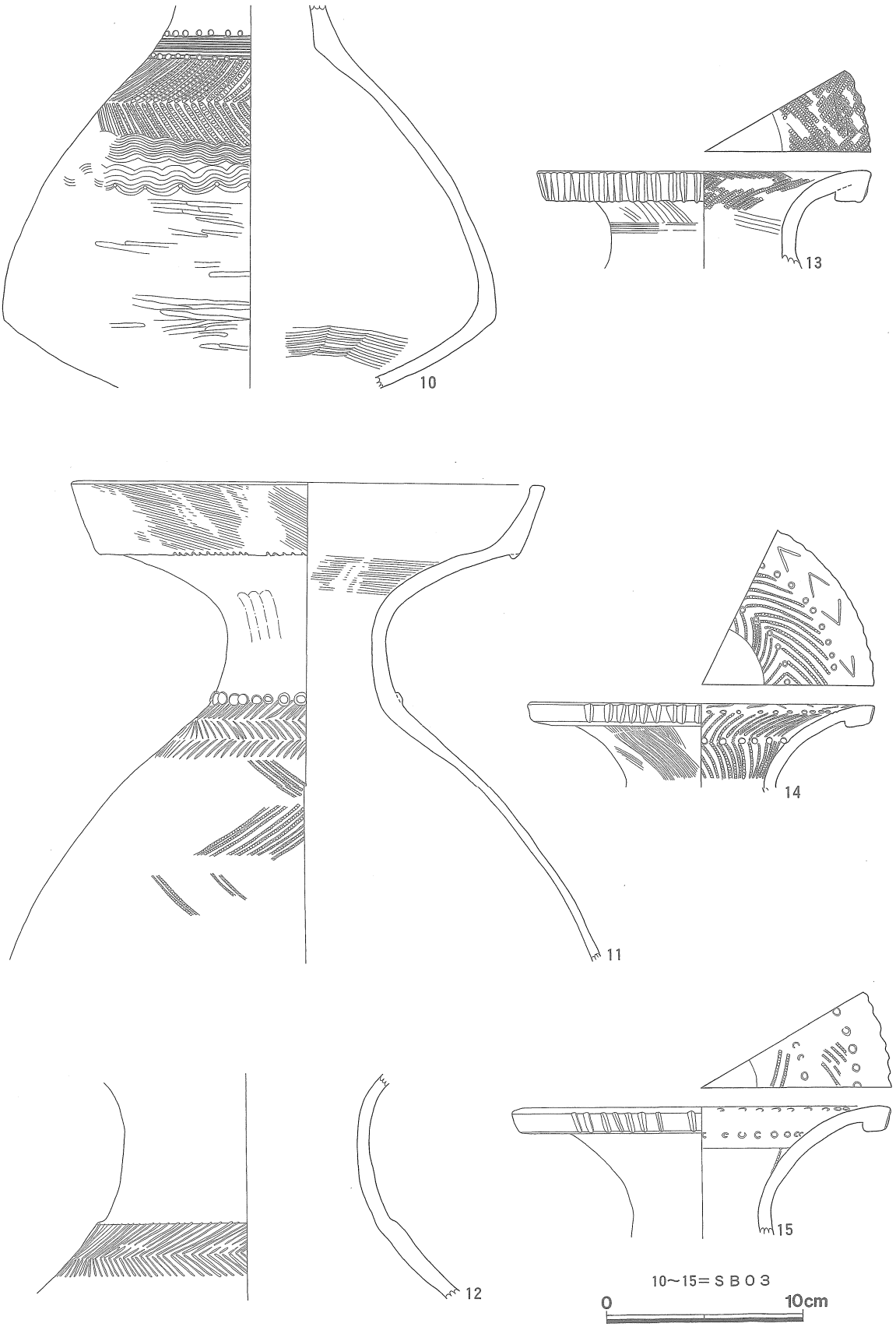
第6図　SH01・SH02実測図



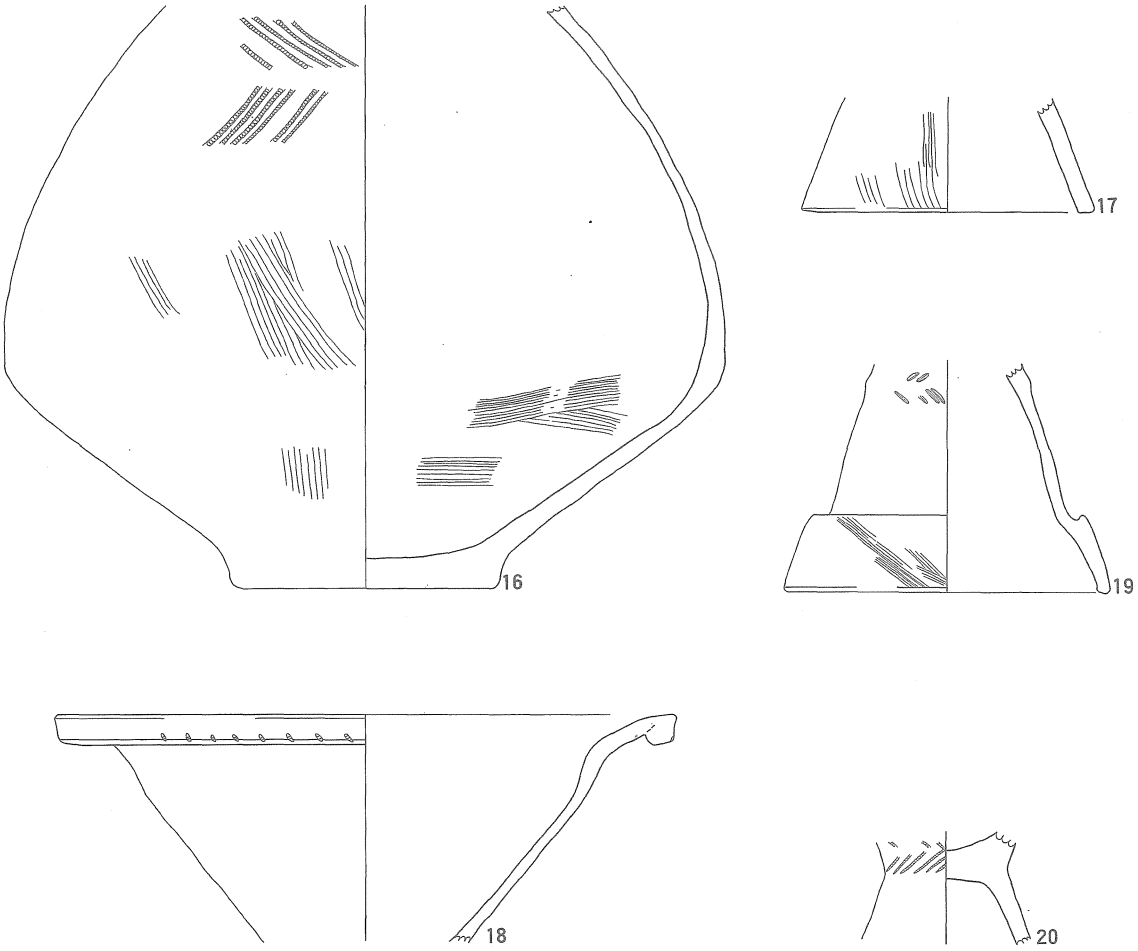
第7図　SH03・SX01実測図



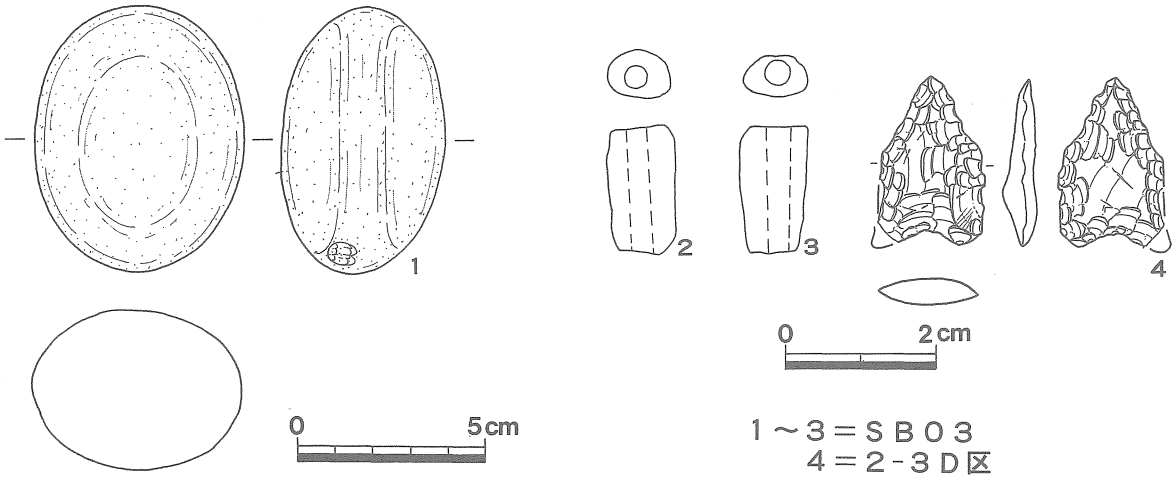
第８図　土器実測図(1)



第９図　土器実測図(2)

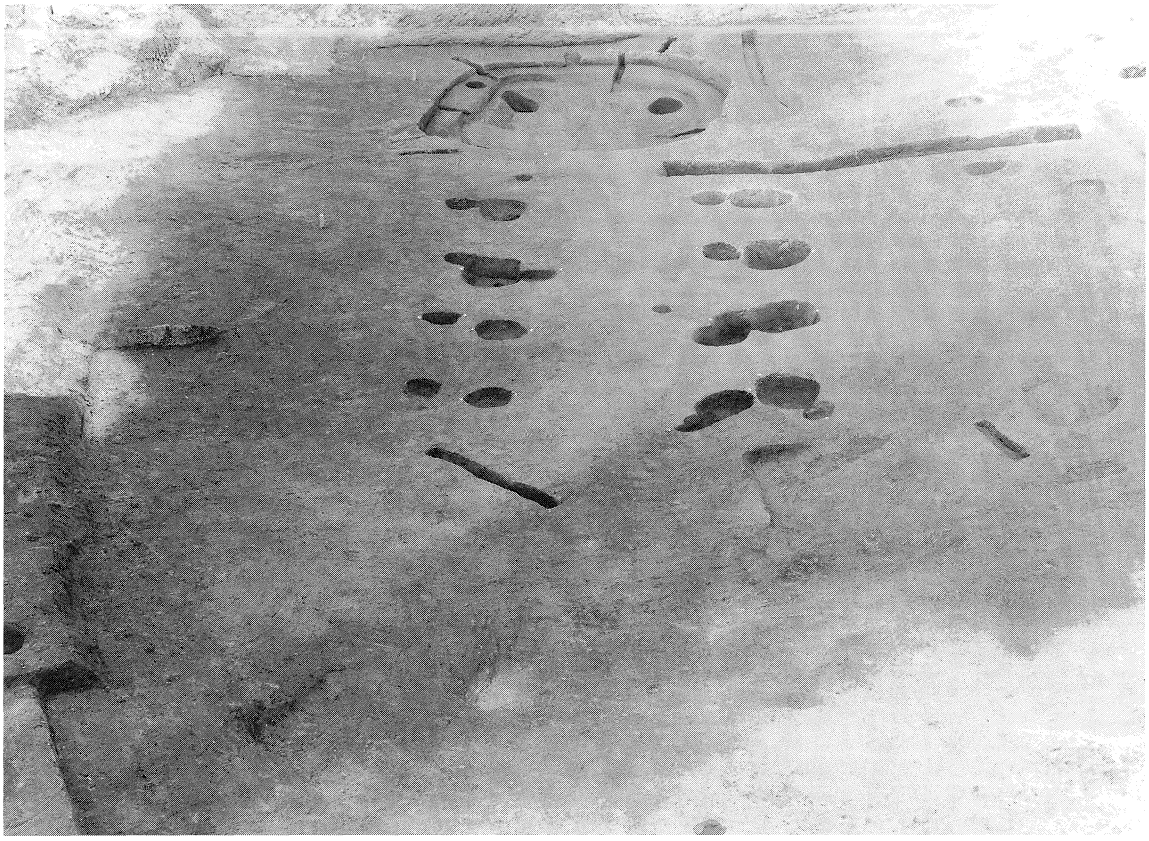


第10図　土器実測図(3)

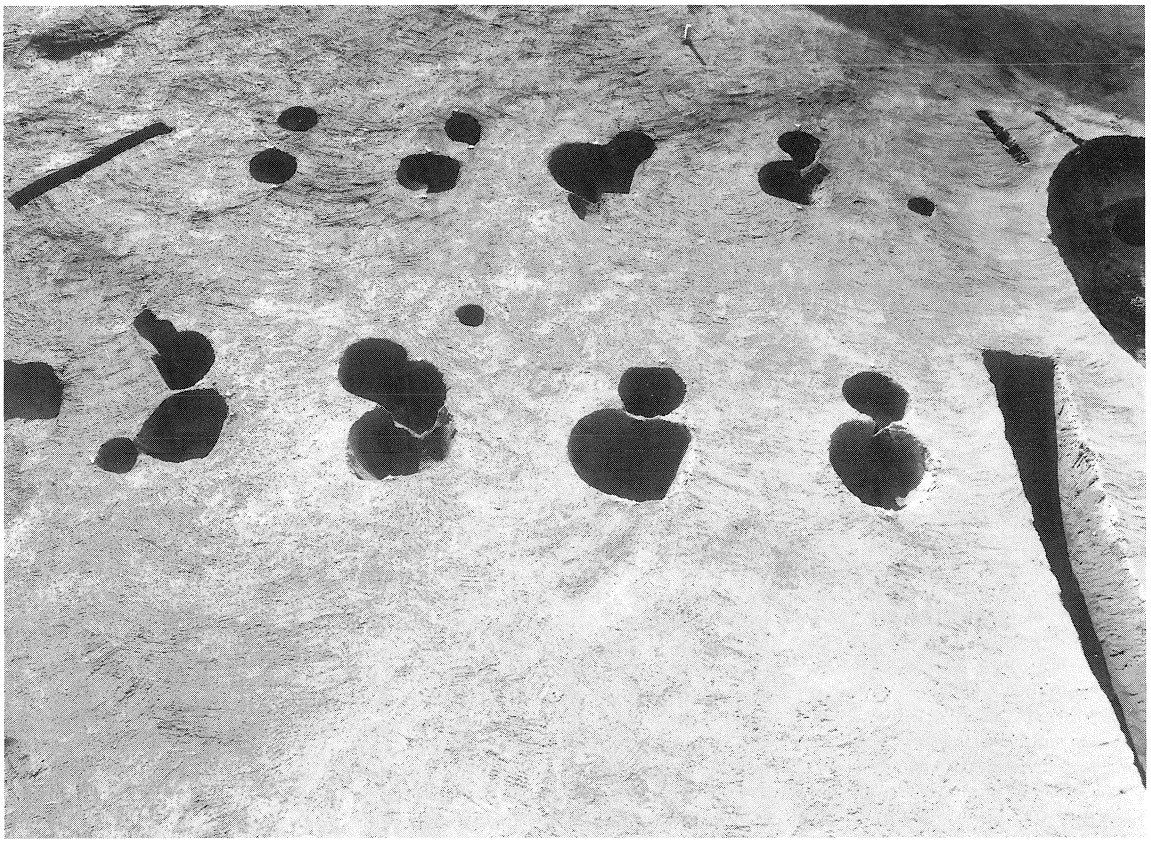


第11図　木製品・石器実測図

図版 1



SH01・SH02・SB02（南から）



SH01・SH02（東から）

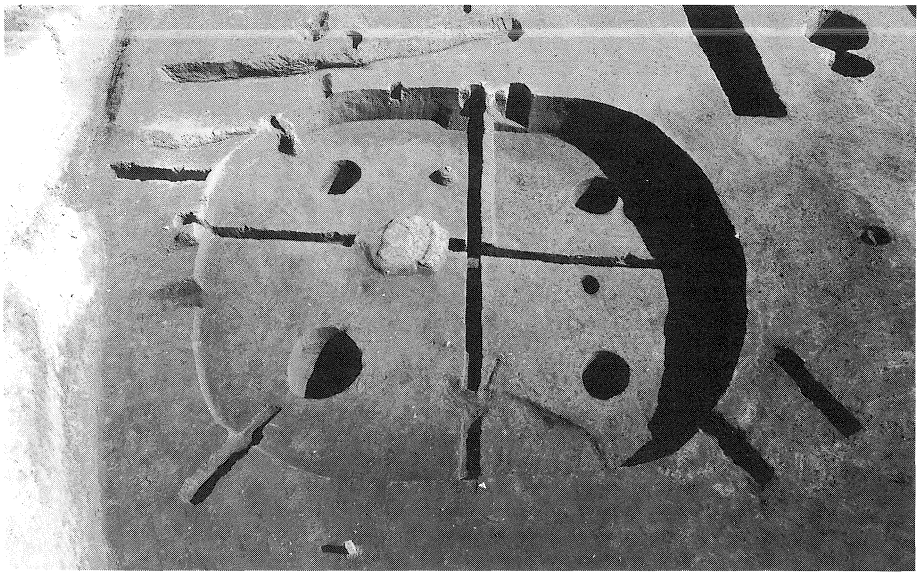
図版 2

ＳＢ０２検出状況
（西から）

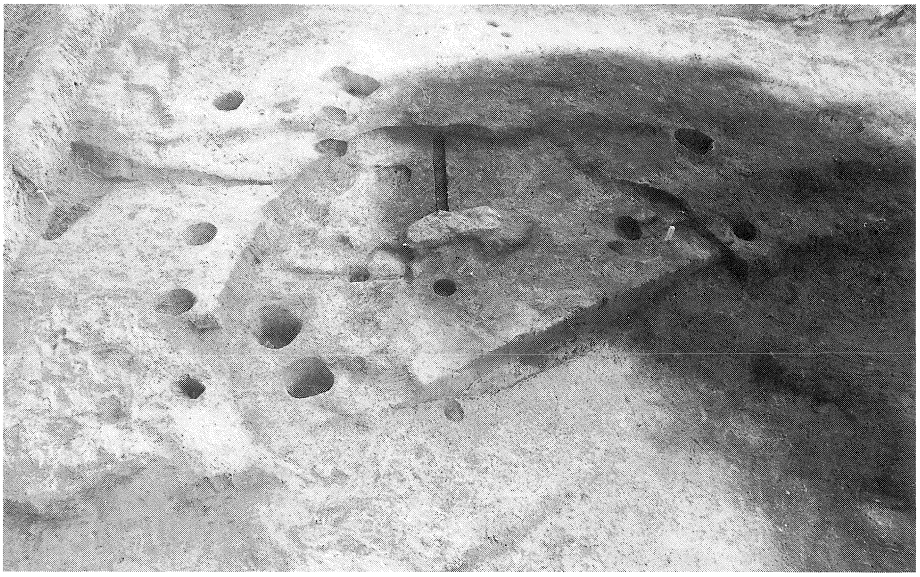
ＳＢ０２土器出土状況
（西から）

ＳＢ０２炉址
（西から）

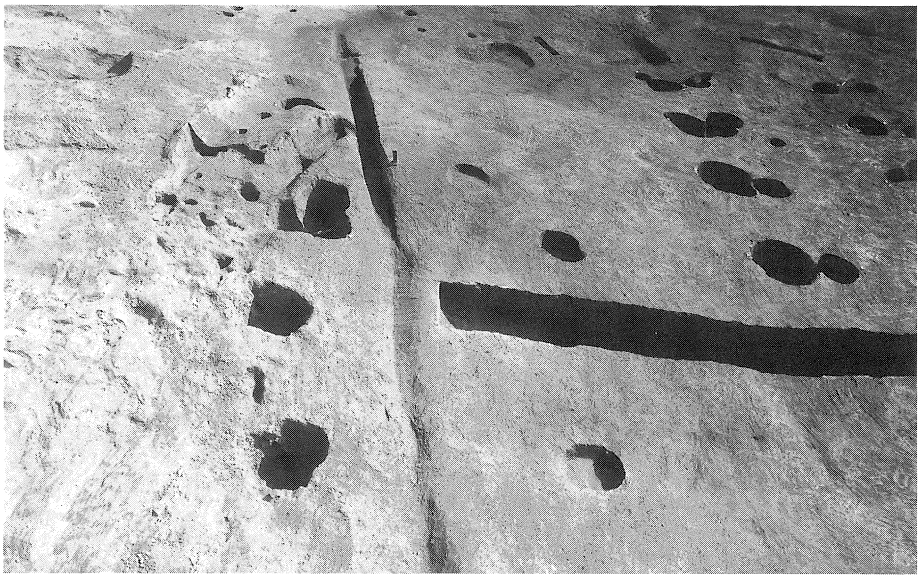
図版 3



SB02完掘
（西から）

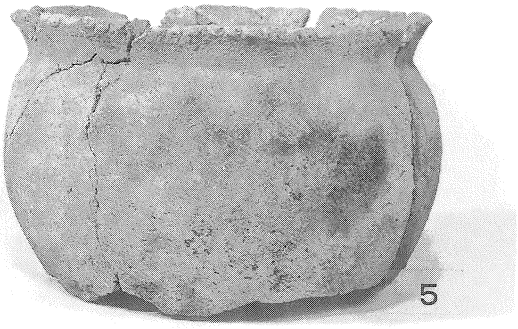


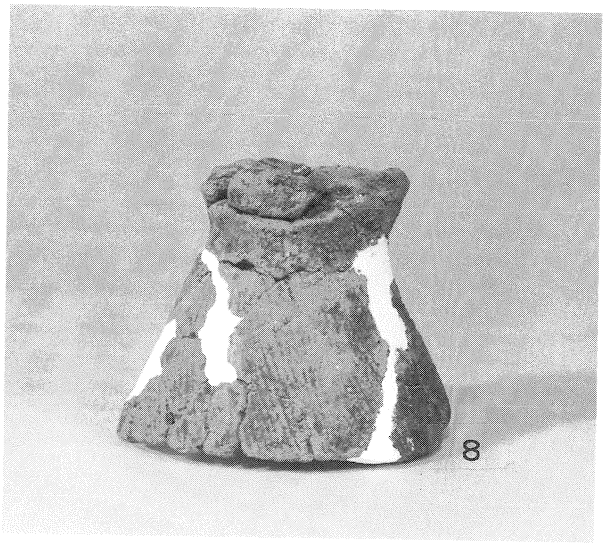
SB03完掘
（東から）



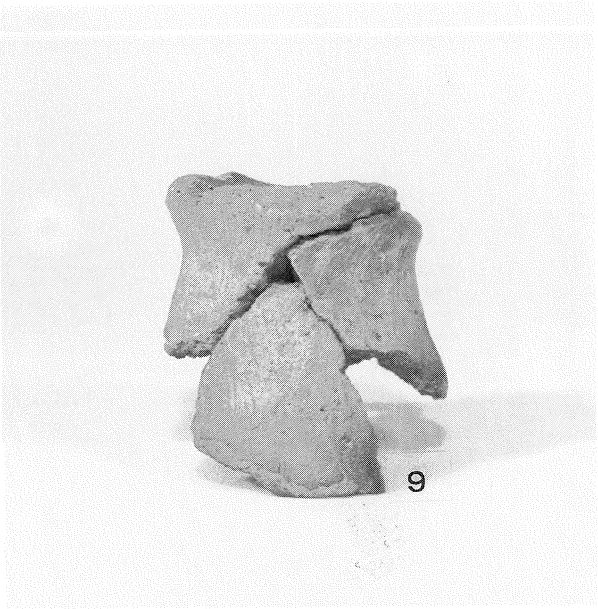
SB05・SH03
（北から）

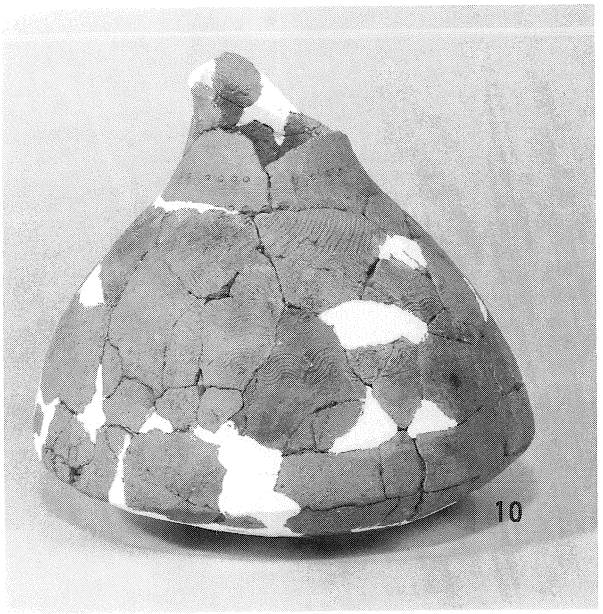
図版 4

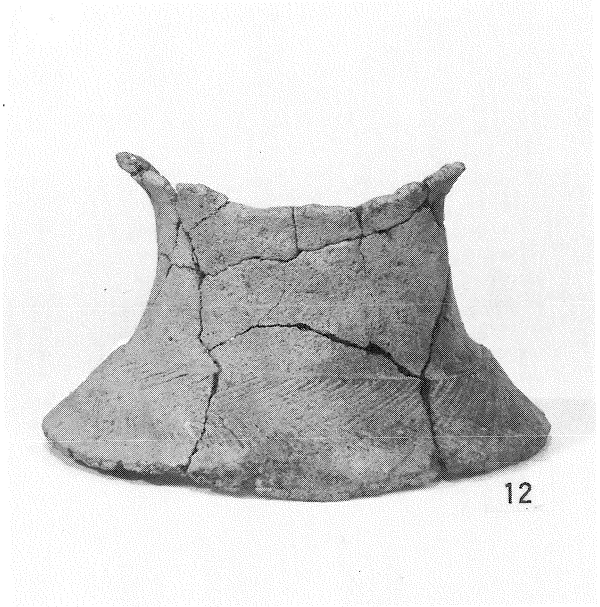


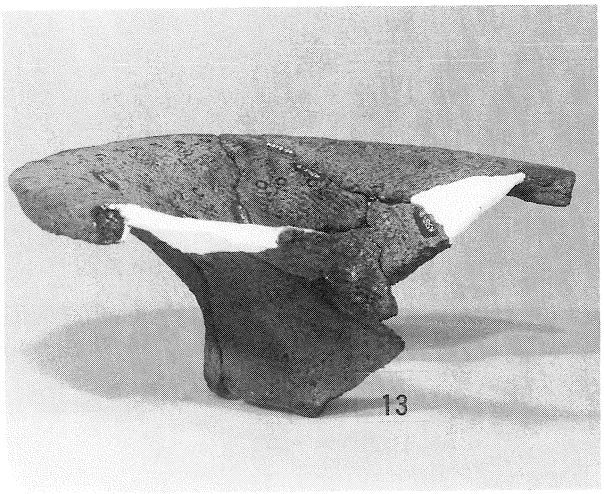


図版 5









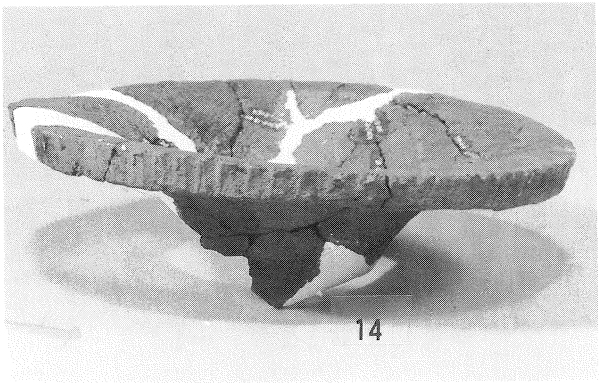
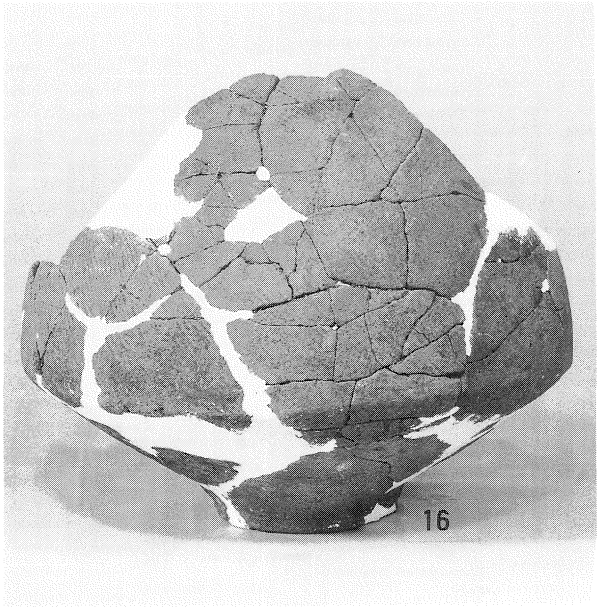
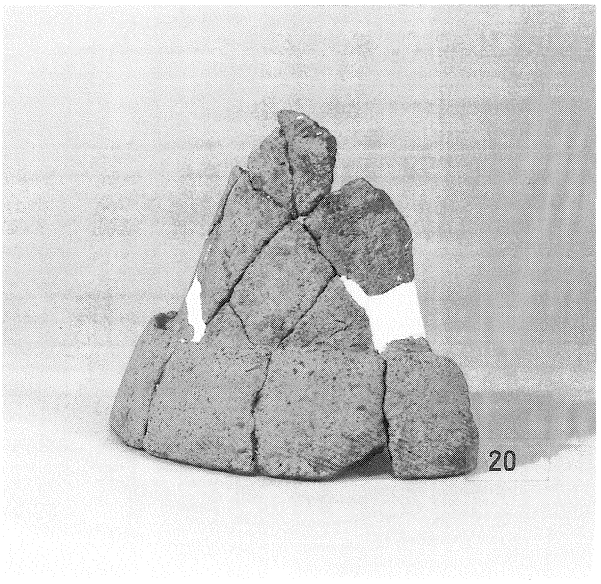
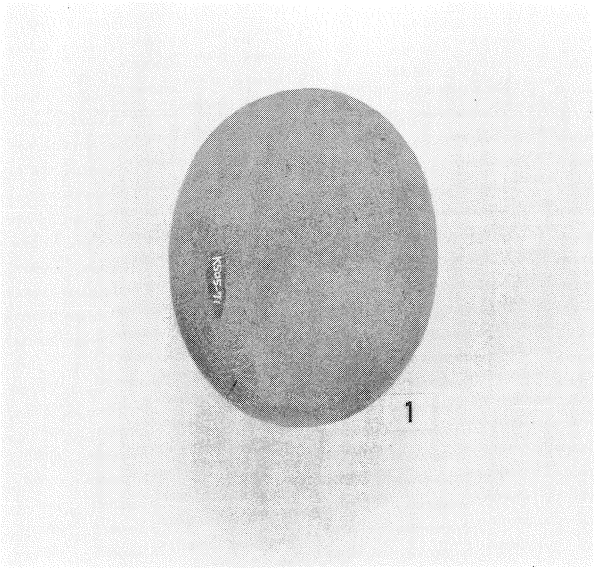
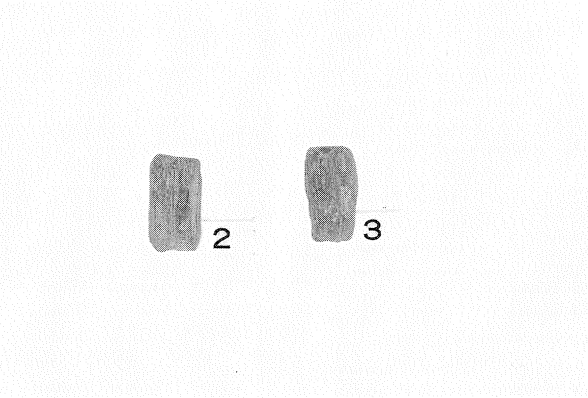


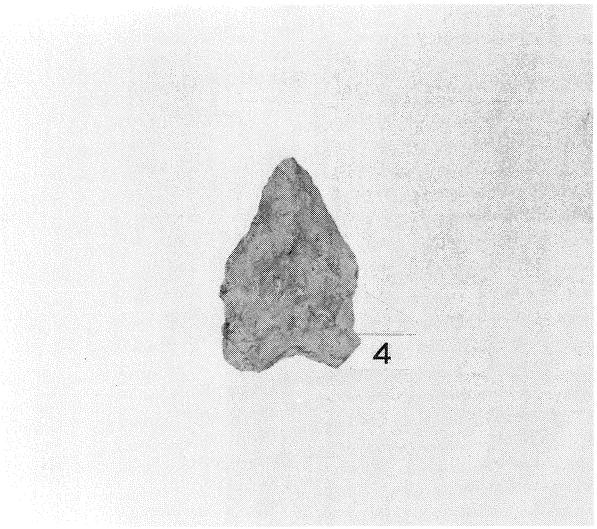
図 版 6











Ⅳ　西池古墳

1. 調査の概要

この古墳は、谷地田に張り出した丘陵の先端を利用して築かれていた。

山林を抜開後、人力で表土剥ぎを行った。調査に際し、墳頂の中央に基準となる８－４Ｂ杭を設置し、地形に合わせて５ｍ方眼のグリッドを設定した。南北軸は、座標の北から西に９度振れている。

現地での図面は、遺構・墳丘図を20分の１で、微細図を10分の１・１分の１の縮尺で作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成７年11月６日から11月17日、12月11日から12月27日まで、現地調査を行った。

2. 遺構の概要

墳頂部から埋葬土坑４、西側裾から古墳を区画する溝を検出した。墳丘、区画溝、埋葬土坑の順に概要を述べる。

墳丘（第２図）

墳丘の西端は、区画溝ＳＤ01の存在により明らかであるが、自然地形を削り出して墳丘を整えているため、東・南・北の裾は判然としない。ＳＤ01の底面の標高45.7ｍを裾とすると、東西約19ｍ、南北約15ｍ、溝底から墳頂までの高さ2.3ｍの規模の円墳となる。

南北方向の土層断面では、墳頂部の北側の墳頂から約40㎝下がったところから下には自然の堆積土である灰褐色土・暗灰褐色土が残存していた。このことから、北側についてはあまり大きな地山の削り出しが行われていないことが明らかとなった。南側と東側は、西側・北側に比べ急斜面になっていて、表土除去直下で地山が現れた。これが、地山削り出しのためか、それとも後世の影響によるかは明らかではない。

墳頂平坦面は、東西約７ｍ、南北約6.4ｍの円形で、10㎝の厚さの盛り土があった。この盛り土中には、炭材材・茅が混入していた。この炭化材の樹種同定結果については、巻末に記載した。

溝状遺構

ＳＤ０１（第２図）

古墳を区画する、丘陵に直交する溝で、溝底の幅１ｍ、深さ10㎝の規模である。攪乱を受けていて長さは１ｍほど確認したにすぎない。覆土中から、土師器壺の小破片が出土している。

埋葬土坑

ＳＦ０１（第３図）

墳頂中央から南にずれた位置にある。全長3.72ｍ、幅は、西端から中央東寄りまで76㎝前後で推移するが、東端は急激に幅を狭め、45㎝程度となる。掘り方底面の幅は、西端で46㎝前後、東端では30㎝と幅が狭くなる。確認面からの深さ50㎝を測る。主軸方位は、Ｎ－88°－Ｅである。墓坑内の覆土の１層・２層が棺を想定させるが、明らかではない。棺の長さも不明である。覆土中に粘土は全く見られなかった。掘り方底面の西端から30㎝～60㎝の場所から鉇と考えられる鉄製品が、そこから20㎝ほど離れた所から東に玉類が散っていた。勾玉と管玉が玉類の西端に位置し、ガラス玉がその東に位置する。鉇と玉類は、同じレベルから出土している。鉄剣の切先は掘り方に接するが、茎部分は15㎝ほど浮いている。大刀は、掘り方からわずかに浮いていた。鉄斧は、掘り方にほぼ密着した状態で

あった。

ＳＦ０２（第４図・第５図）

墳頂中央北寄りに位置し、全長4.76m、幅1.7m～1.8m、確認面からの深さ56cmを測り、主軸方位はＮ－84°－Ｗである。墓坑は２段掘りで、下段は、全長4.01m、幅70cm前後であるが、東端はふくらみを持つ。下段の掘り方の北東隅から幅20cm前後の排水溝が墳丘斜面まで3.68m伸びている。墓坑の掘り方底面は、東から西に傾斜しているにもかかわらず、排水溝は東に設けられている。この排水溝は、ＳＦ03に一部壊されている。排水溝の底には、10cmから15cmの大きさの礫が入れられていた。墓坑内の土層では、棺の幅を想定させるような層序が見られるが、棺の幅・長さとも不明である。覆土中に粘土は全く使用されていない。墓坑中央南側から大刀１と刀子が、北側から大刀２が出土したが、いずれも玉の検出レベルからは５cm程度高い。大刀１は切先を東に、刀子と大刀２は切先を西に向ける。ガラス玉７点は刀子より東から出土している。下段掘り方の東端近くから黒色の有機質状のものが検出された。玉類の出土位置から頭を東と考えたいが、そうすると排水溝は頭方向から伸びていることになる。

ＳＦ０３（第６図）

墳頂部北東寄りに掘られた墓坑で、ＳＦ02の掘り方・排水溝を壊していて、ＳＦ02より新しいことがわかる。西側の掘り方は２段掘りを思わせるが、東側には見られない。全長3.62m、幅80cm～85cm、確認面からの深さ57cmを測り、主軸方位は、Ｎ－38°－Ｗである。掘り方内の側壁寄りから、ＳＦ02の排水溝を壊した時の礫を転用したと思われる棺支えの礫が検出されている。この礫間の幅から棺の幅を50cm前後と推定できる。棺の長さは不明である。墓坑内の中央南寄りから切先を北に向けた鉄鏃・鉄剣が出土している。鉄鏃は掘り方から浮いていたが、鉄剣は掘り方にほぼ密着していた。覆土中に粘土は見られなかった。

ＳＦ０４（第７図）

ＳＦ01の南に、15cmから30cmの間隔を置いて並ぶ。全長2.99m、幅は東端が狭く45cm、西端で60cm、確認面からの深さ42cmを測り、主軸方位はＮ－88°30′－Ｗである。墓坑内の１層・２層が棺の痕跡と考えると、棺の幅は30cmから35cmほどとなる。副葬品は、坑内の東端近くから出土した大刀のみで、切先を東に、刃を北に向けている。覆土中に粘土は全く見られなかった。

3. 遺物の概要

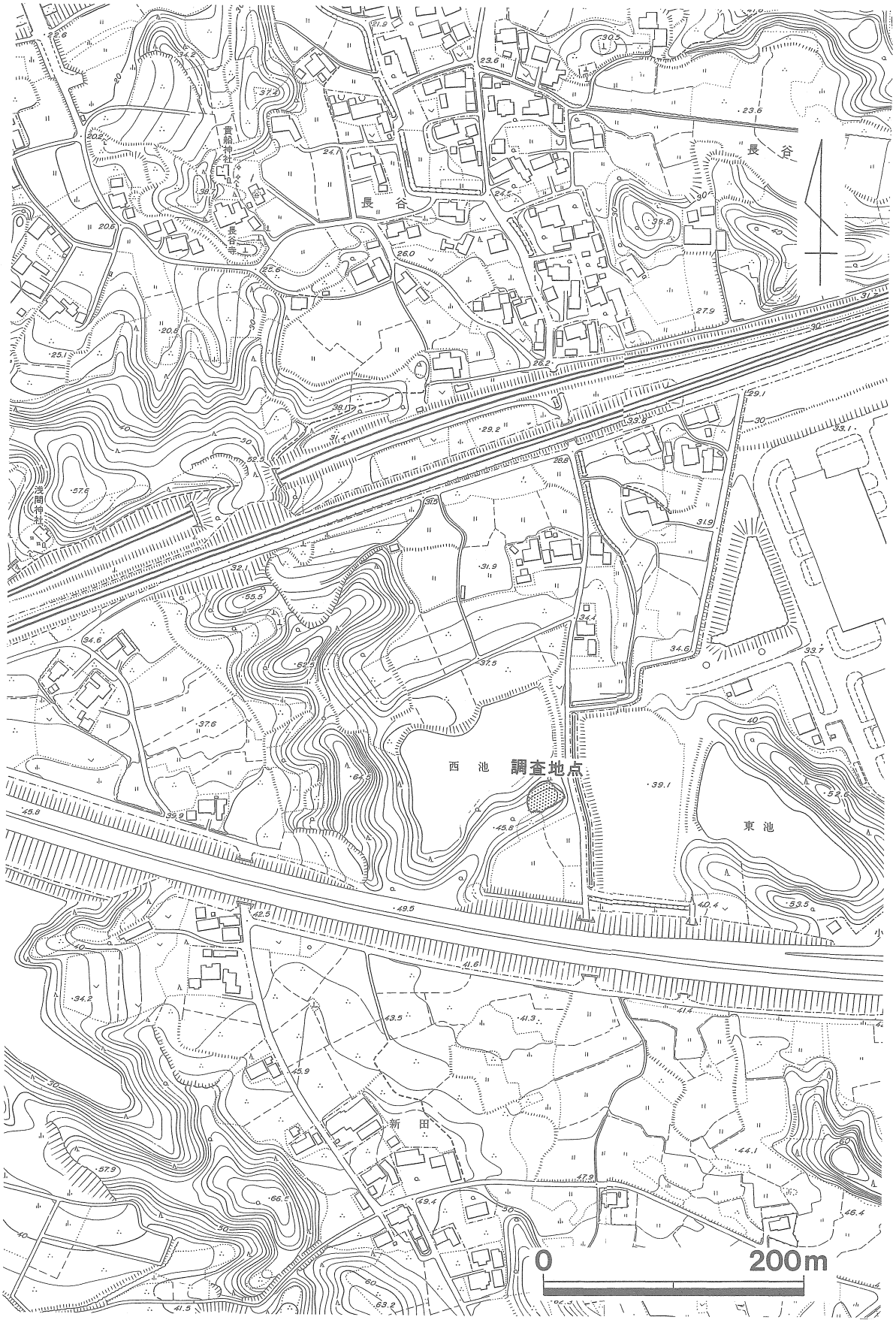
遺物は、ＳＦ01から鉇１・鉄剣１・大刀１・鉄斧１・玉類、ＳＦ02から大刀２・刀子１・玉類、ＳＦ03から鉄鏃２・鉄剣１、ＳＦ04から大刀１が出土している。鉄製品は、来年度の報告で述べることとし、今回は土器・玉類について概述する。

土器（第８図）

１から３は、須恵器高坏の脚端部と考えられる破片である。１・２は、ＳＦ03の覆土中から、３は墳頂部から出土した。いずれも暗灰色を呈し、器壁を厚く作るという共通点をもつ。

玉類（第９図）

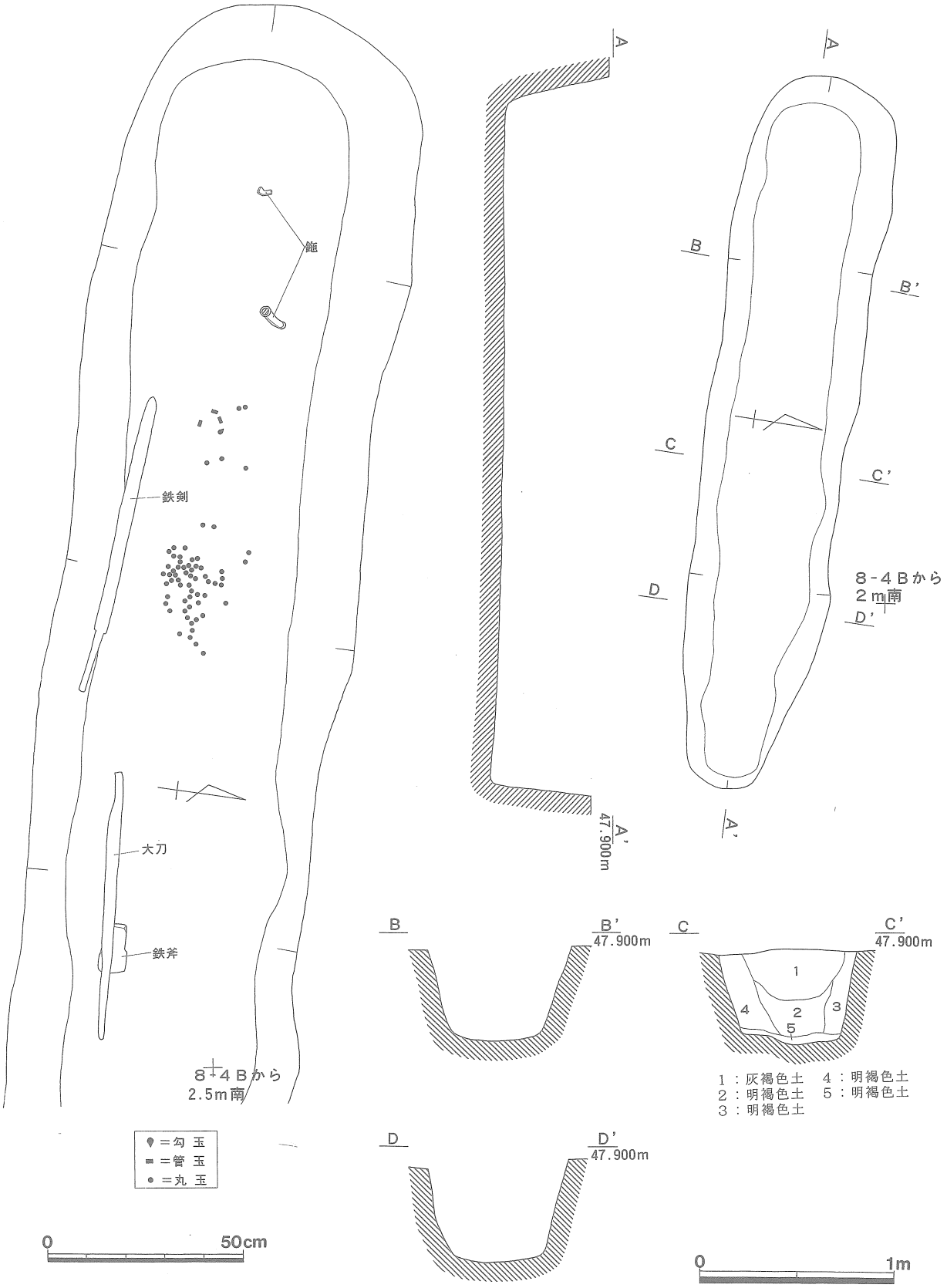
１から55まではＳＦ01、56から62まではＳＦ02から出土した。１は、白色を呈する石製の勾玉、２は緑色凝灰岩製の管玉、３はガラス製の管玉、４から62までは、ガラス玉である。ＳＦ01からは、緑色凝灰岩製の管玉がもう１点出土している。ＳＦ01出土のガラス玉は、54が紺色を呈するほかは、青色か水色を呈する。ＳＦ02出土のガラス玉は、青色か水色である。



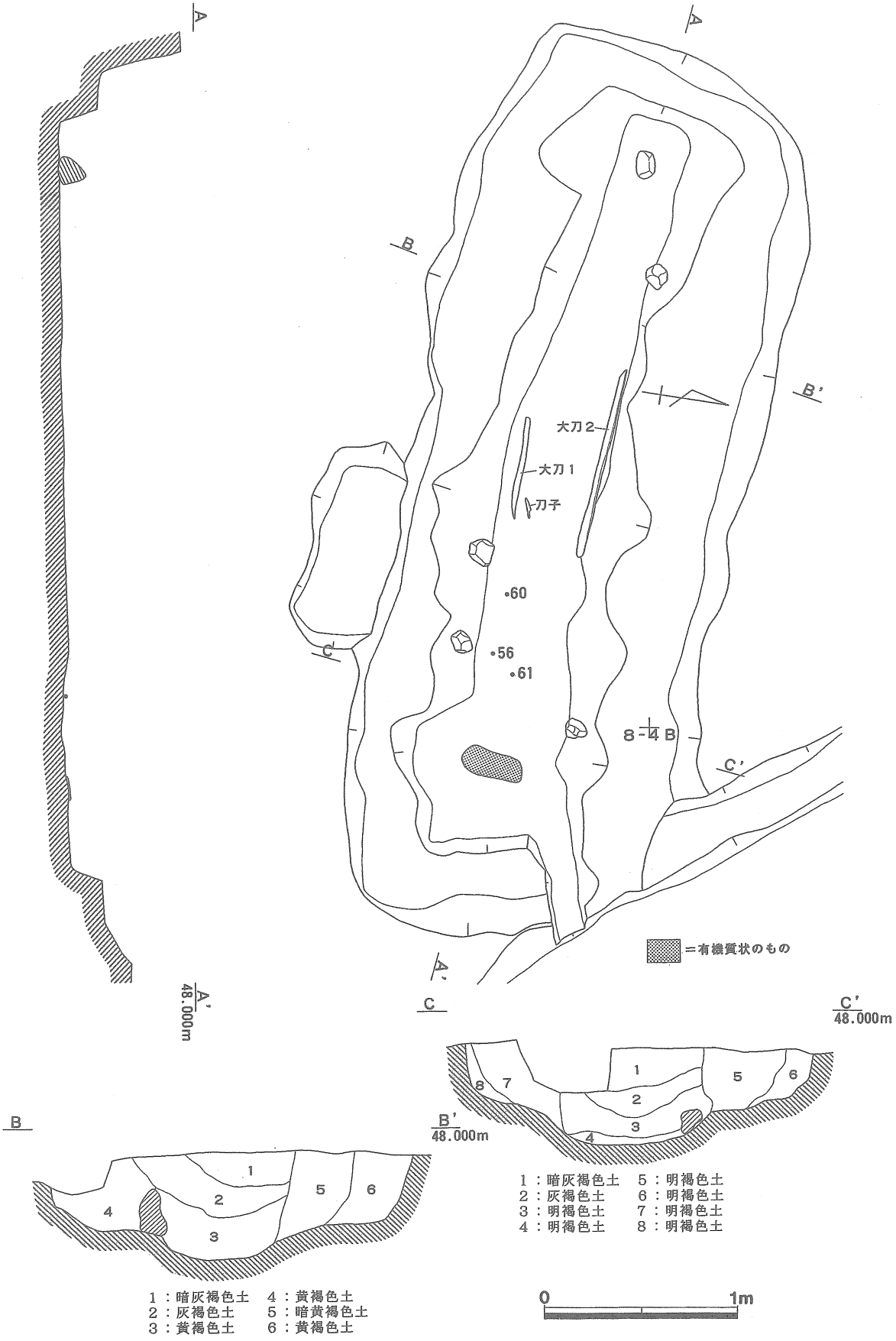
第１図　位置図

SF03
SF02
SF01
SF04
A
A'
B
B'
47.000m
46.000m
45.000m
44.000m
48.000m
1：暗黄灰色土
2：遺構覆土
3：暗灰褐色土
4：暗灰褐色土
5：灰褐色土
0
5m

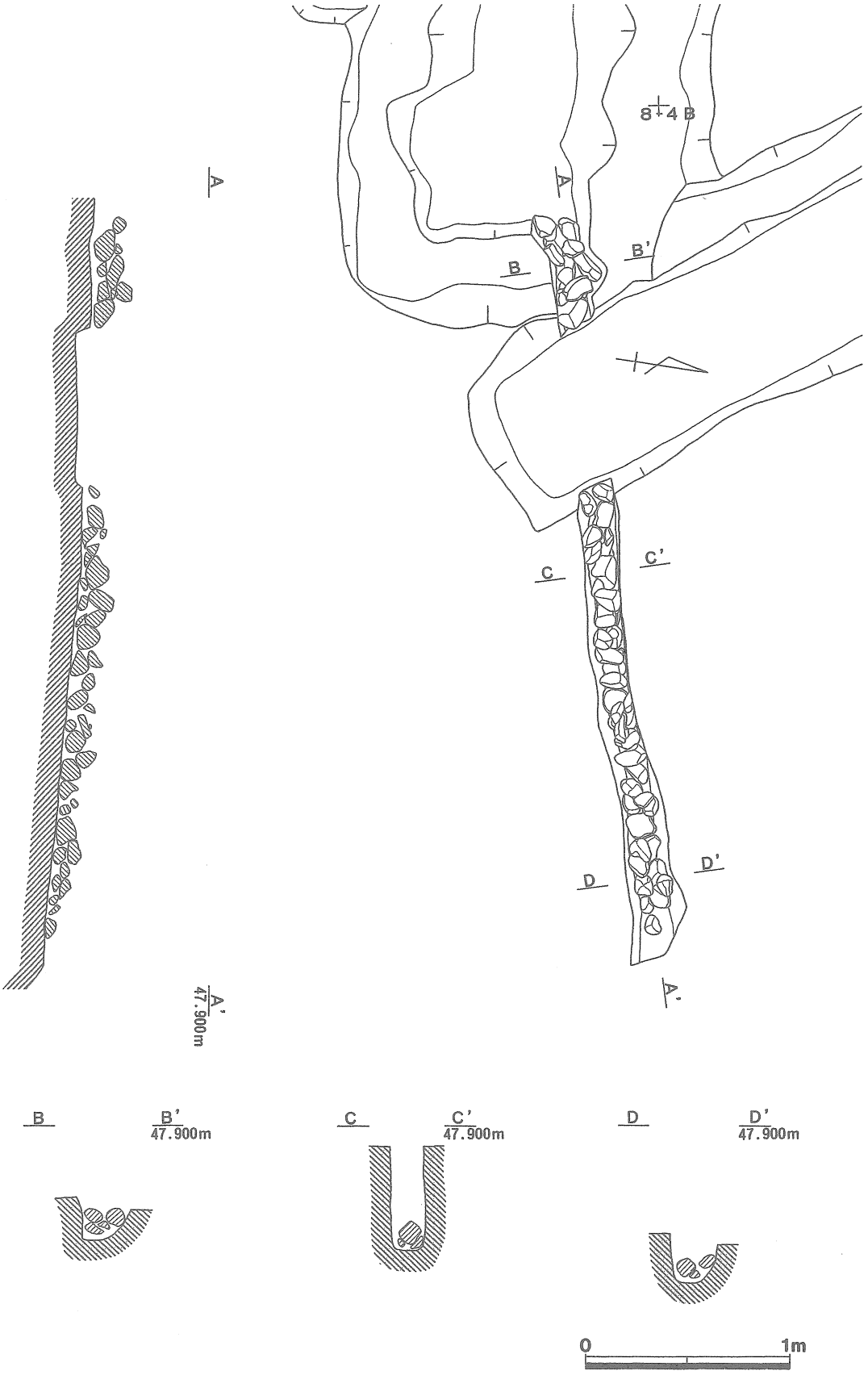
第2図　墳丘図



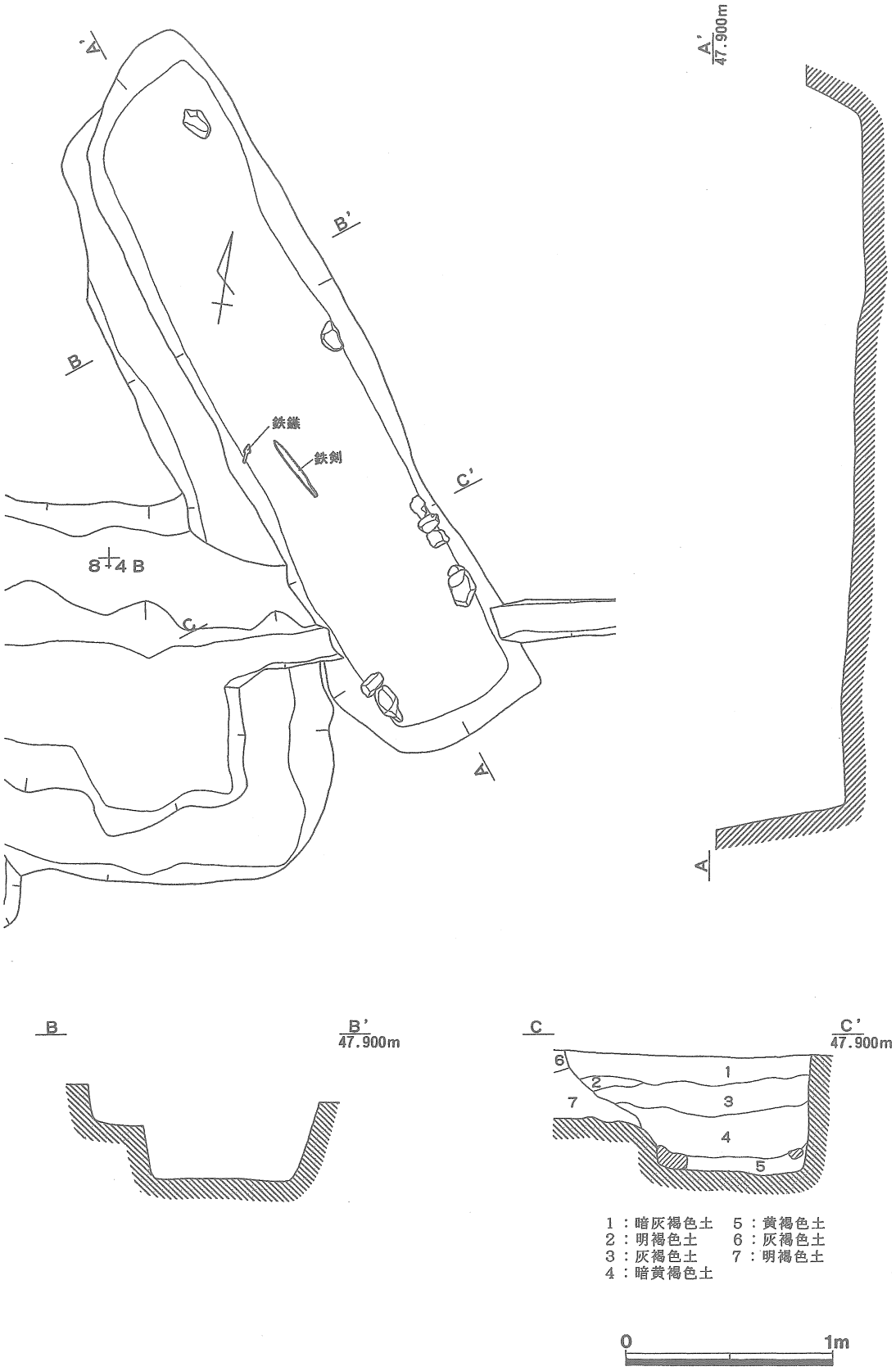
第３図　ＳＦ０１遺物出土位置・ＳＦ０１実測図


A
A'
48.000m
B
B'
C
C'
大刀2
大刀1
刀子
•60
•56
•61
8-4B
=有機質状のもの
1：暗灰褐色土
2：灰褐色土
3：黄褐色土
4：黄褐色土
5：暗黄褐色土
6：黄褐色土
1：暗灰褐色土
2：灰褐色土
3：明褐色土
4：明褐色土
5：明褐色土
6：明褐色土
7：明褐色土
8：明褐色土
0
1m

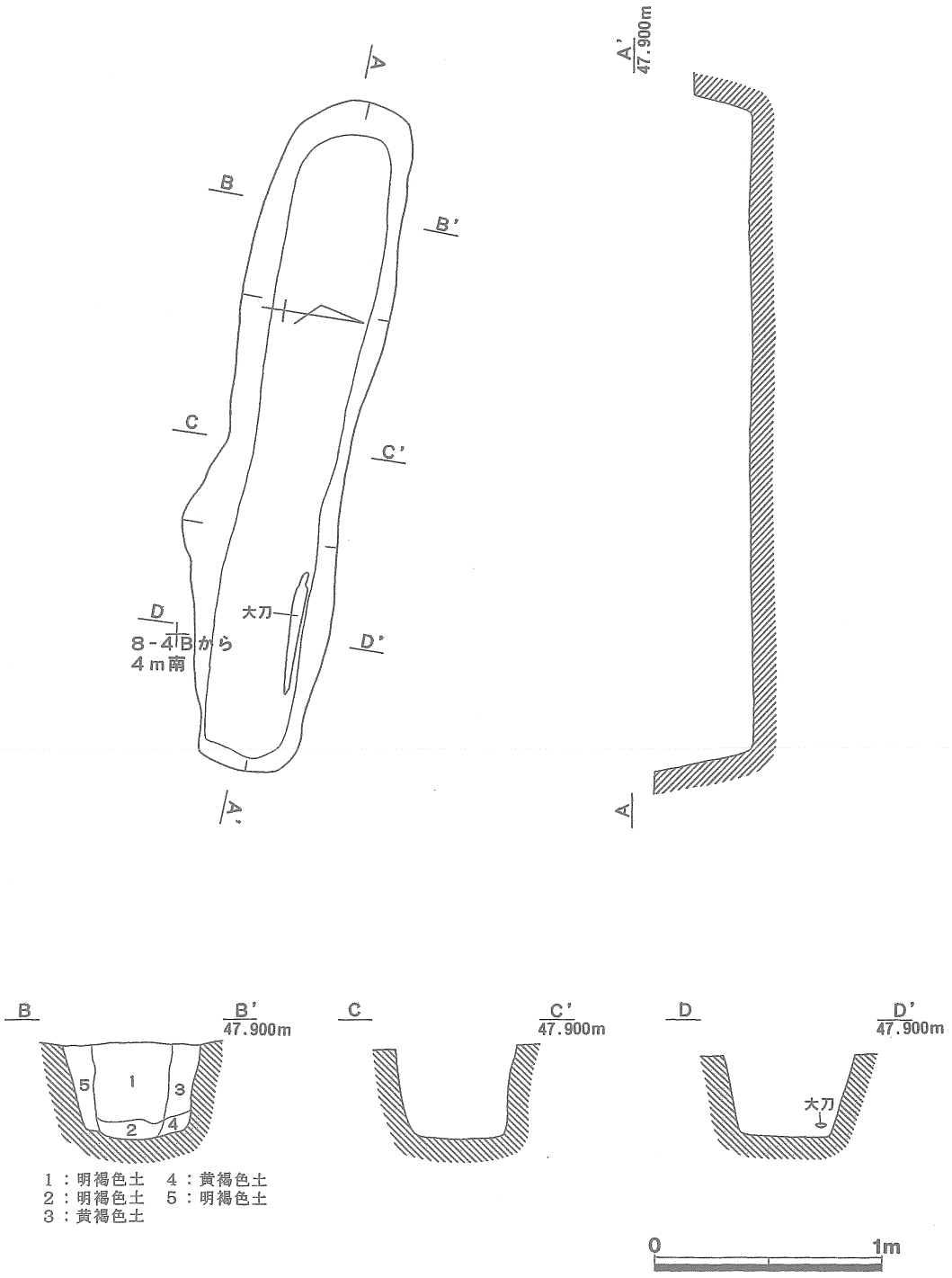
第４図　ＳＦ０２実測図



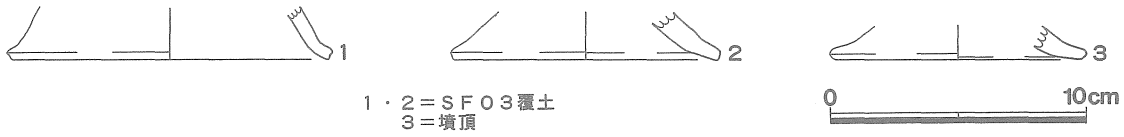
第５図　ＳＦ０２排水溝実測図


A'
B'
B
鉄鏃
鉄剣
C'
8+4 B
C
A
A'
47.900m
A
B
B'
47.900m
C
C'
47.900m
6
2
7
1
3
4
5
1：暗灰褐色土　5：黄褐色土
2：明褐色土　6：灰褐色土
3：灰褐色土　7：明褐色土
4：暗黄褐色土
0
1m

第６図　ＳＦ０３実測図

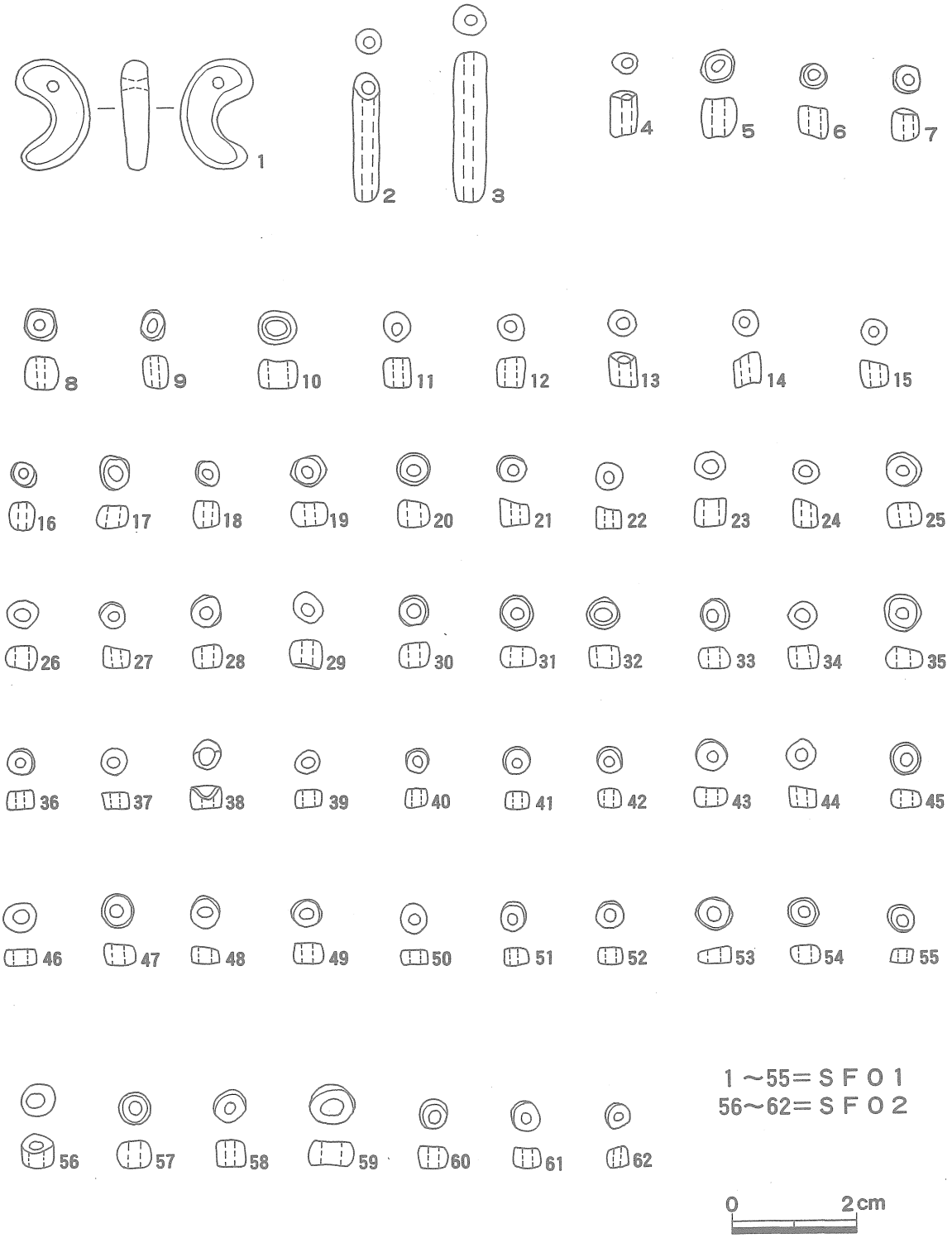

A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
大刀
8-4Bから
4m南
A'
47.900m
A
B
B'
47.900m
C
C'
47.900m
D
D'
47.900m
1
2
3
4
5
大刀
1：明褐色土　4：黄褐色土
2：明褐色土　5：明褐色土
3：黄褐色土
0
1m

第７図　ＳＦ０４実測図



1・2＝ＳＦ０３覆土
3＝墳頂

第８図　土器実測図



1～55＝ＳＦ０１
56～62＝ＳＦ０２

第９図　玉類実測図

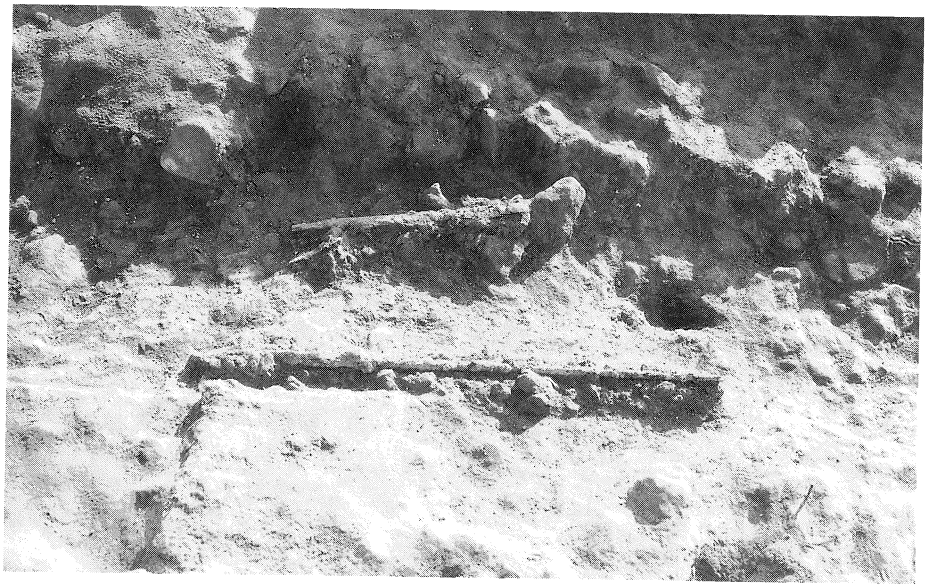
図版 3

ＳＦ０１遺物出土状況
（北から）

ＳＦ０１鉄斧出土状況
（北から）

ＳＦ０２土層断面
（西から）

図版 4



ＳＦ０２遺物出土状況
（北から）

ＳＦ０３鉄剣出土状況
（東から）

周溝完掘
（北から）

図版 1

主体部完掘（西から）

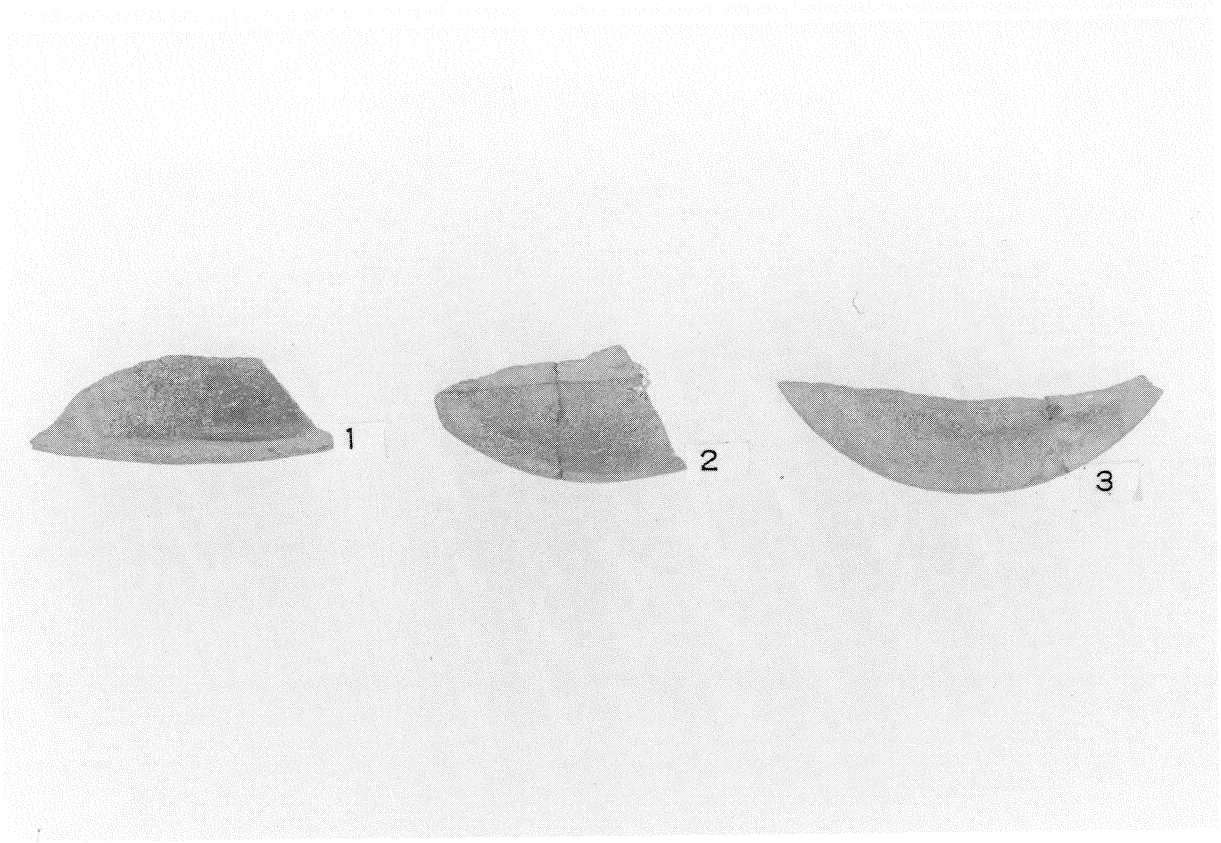
ＳＦ０１・ＳＦ０４遺物出土状況（西から）

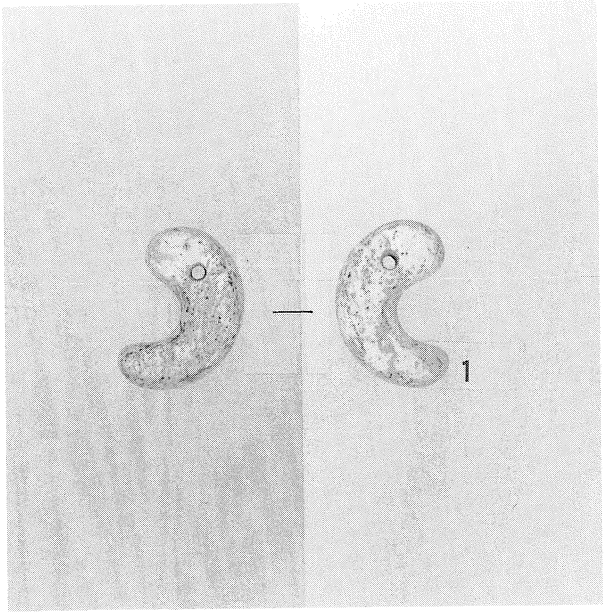
図版 2

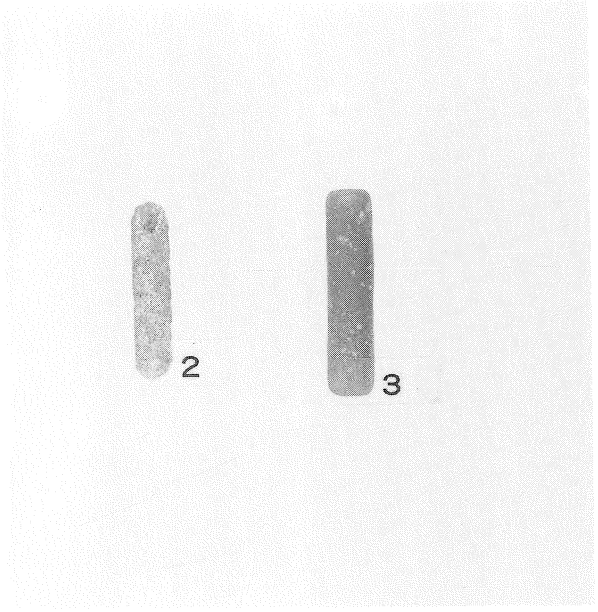
ＳＦ０１・ＳＦ０４完掘（西から）

ＳＦ０２遺物出土状況（西から）

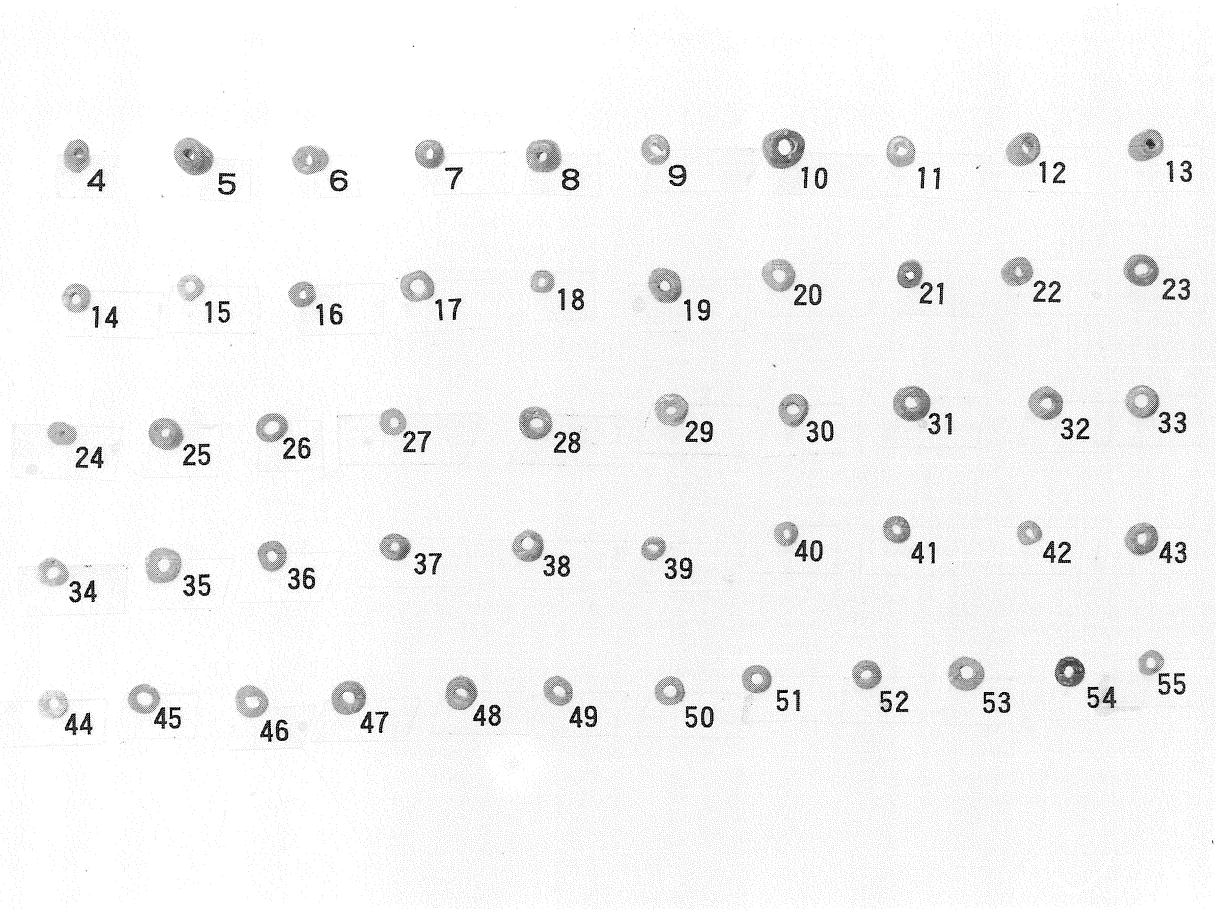
図版 5

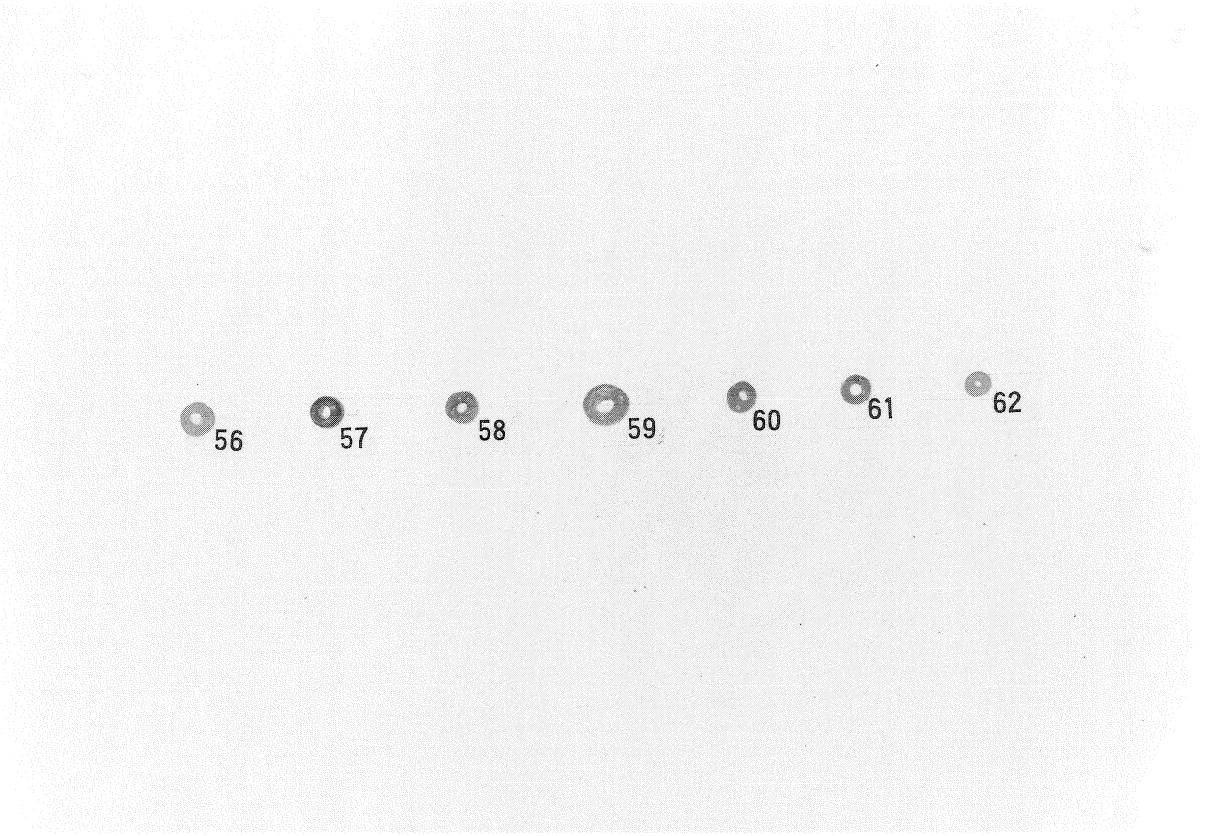






図版 6


4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55


56
57
58
59
60
61
62

V　山脇横穴墓群

1. 調査の概要

この横穴墓群は、丘陵の西側斜面、頂部から約４ｍ降りた所、横穴としては高所に築かれている。

横穴墓３基の実測は、それぞれ主軸に合わせて行い、墓前域は共通する方眼を組んで実測した。

墓前域と横穴墓の図面を20分の１の縮尺で、微細図を10分の１の縮尺で作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。

平成７年11月20日から12月８日まで、現地調査を行った。

2. 遺構の概要

ドーム形２基と尖頭形１基の計３基から成る横穴墓群である。

１号墓（第３図）

位置　３基のうちの最南端、最も谷奥に位置し、玄室掘り方のレベルは、２号墓より10㎝程度高くなる。本横穴墓に伴う墓前域は、２号墓の墓前域と切り合っていて、全容・前後関係は不明である。

玄室　規模は、長さ2.66ｍ、最大幅2.7ｍ、天井の高さ1.49ｍを測り、主軸方位は、Ｎ－86°－Ｗである。工具痕は、断面が多角形を呈する鑿状のもの、幅２㎝・2.4㎝の平鑿状のものがある。

埋葬施設　玄室中央右の玄門寄りから、幅16㎝、長さ36㎝の礫が１点検出され、大刀の切先が乗るような状況で出土した。人骨・歯は、右半からはごくわずかで、左半から多く検出された。

副葬品　土器が、左壁玄門寄りから２点（第７図－１・２）出土した。

羨道　幅90㎝前後で、長さ2.43ｍを測る。閉塞石は、長さ20㎝～40㎝の礫を小口積みにしていたが、下から２段目と３段目の境、最上段の礫の下には土が充填していて、積み直しによる可能性が高い。

２号墓（第４図・第５図）

位置　３基の中央に位置する。墓前域は１号墓・３号墓と切り合う。第10図－41の須恵器坏蓋は、掘り方から27㎝ほど浮いていた。

玄室　長さ3.0ｍ、最大幅は玄門寄りの所で3.38ｍを測り、主軸方位は、Ｎ－86°－Ｗを測る。左壁寄りから幅１ｍ、長さ1.4ｍ、深さ10㎝程度の窪みが、また中央左寄りから玄門方向に緩やかに傾斜する溝状の遺構が検出された。工具痕は、幅2.5㎝の丸鑿状、幅２㎝・2.4㎝の平鑿状のものが観察された。

埋葬施設　右壁沿いの削り出しの棺座と、主軸から左壁寄りの礫床がある。棺座は、幅70㎝～90㎝、長さ2.80ｍ、高さ10㎝を測る。礫床は、幅1.3ｍ、長さ1.8ｍの範囲で見られた。礫床は掘り方から少し浮いた状況で、礫の下から玉が出土していることから、当初の施設ではなく追葬に際し設けられたものと考える。人骨・歯は、棺座上からはわずかで、礫床上と、棺座と礫床の間から多く検出された。

副葬品　棺座奥壁際から第10図－39の皿、奥壁寄りから第12図－３の勾玉、勾玉より玄門寄りから第11図－３・５の耳環２点、耳環の間に大刀が切先を玄門方向に向けて、玄門寄りから刀子と鞍が出土した。礫床周辺からは、奥壁際から第11図－１・２の耳環２点、礫床中央右端から第11図－６の銅釧、礫床と前壁左端の土器との間から第11図－４の耳環１点が出土した。玉類は、第12図－１の琥珀玉が玄室中央右から、２の勾玉は前壁左端の土器集中地点周辺から、４の勾玉は玄室中央右から、５～96の玉類は玄室の中央から奥壁にかけて出土した。土器類は、３箇所に分布していた。玄室中央奥壁寄りから第８図－20・23・30・32、礫床上から第９図－34、玄門右袖の棺座の横から第７図－３・５・

8・9・11・12・13・14・15・16、第8図－18・19・21・28・29、前壁左端から第7図－4・6・7・10、第8図－17・22・24・25・26・27・31、第9図－33・35・36・37、第10図－38が出土した。

羨道　幅85㎝前後で、長さ2.41mを測る。閉塞石は、長さ10㎝～30㎝の礫を小口積みにしていたが、縦断面図で見ると下から2段目までは整っているが、それより上は崩れていると判断される。

3号墓（第6図）

位置　墓前域は、幅2.55m、長さ4.9mを確認した。2号墓の墓前域より約70㎝低く造られた墓前域である。第10図－42の土師器脚付埦は、掘り方から約70㎝浮いた状況で出土した。

玄室　長さ2.24m、最大幅は玄門寄りの所で2.09m、天井高さ1.75mを測り、主軸方位はN－59°－Eである。玄門は丁寧に面取りされていた。工具痕は、幅1.1㎝・1.6㎝・2.0㎝の平鑿状、幅3.5㎝の平鑿または手斧状、断面5角形の鏨状、幅8㎝・13.5㎝の削り面が緩やかに湾曲するものがある。

埋葬施設　右壁沿いに幅約1m、長さ2.1mに亘り礫床が存在した。礫の大きさは、15㎝程度のものも存在するが、10㎝以下のものが大部分である。礫は、大部分が掘り方から浮き上がり、乱雑に重なりあっている。礫床中央、奥壁際から40㎝ほどの場所から歯が検出されている。

副葬品　礫床中央から刀子が切先を奥壁に向け、礫床中央左端から大刀がやはり切先を奥壁に向け、出土した。第10図－40の土師器長胴甕は、玄室中央の礫床横から横転した状況で出土した。

羨道　幅75㎝前後で、長さ2.25m、高さ95㎝を測る。閉塞石は、長さ30㎝～40㎝の礫が小口積みされていたが、下から3段目から上は積み直されていた。羨門の左右には、板状のものをはめ込むためと考えられる幅約20㎝、7㎝から10㎝の段が存在した。

3. 遺物の概要

遺物は、1号墓から大刀・刀子・須恵器、2号墓から大刀・刀子・鞍・耳環・銅釧・玉類・土器、3号墓から大刀・刀子・土師器が出土している。鉄製品については、未整理の状況であり来年度報告することとし、今回は土器・耳環・銅釧・玉類について概述する。

土器（第7図～第10図）

39・40・42は土師器、他は須恵器である。16の底部外面には格子目の、27の底部外面には平行の、22の底部外面にも、工具痕が残る。33のヘラ削りは手持ちヘラ削り、34の肩には1対の円形貼付文が付く。36は、体部上半にカキ目調整を施し、肩に円形貼付文が1つ付く。40は、底部が丸味を帯び、体部外面と頸部内面に細かいハケ目調整を施す。口縁端部は、丸く収める。

耳環（第11図）

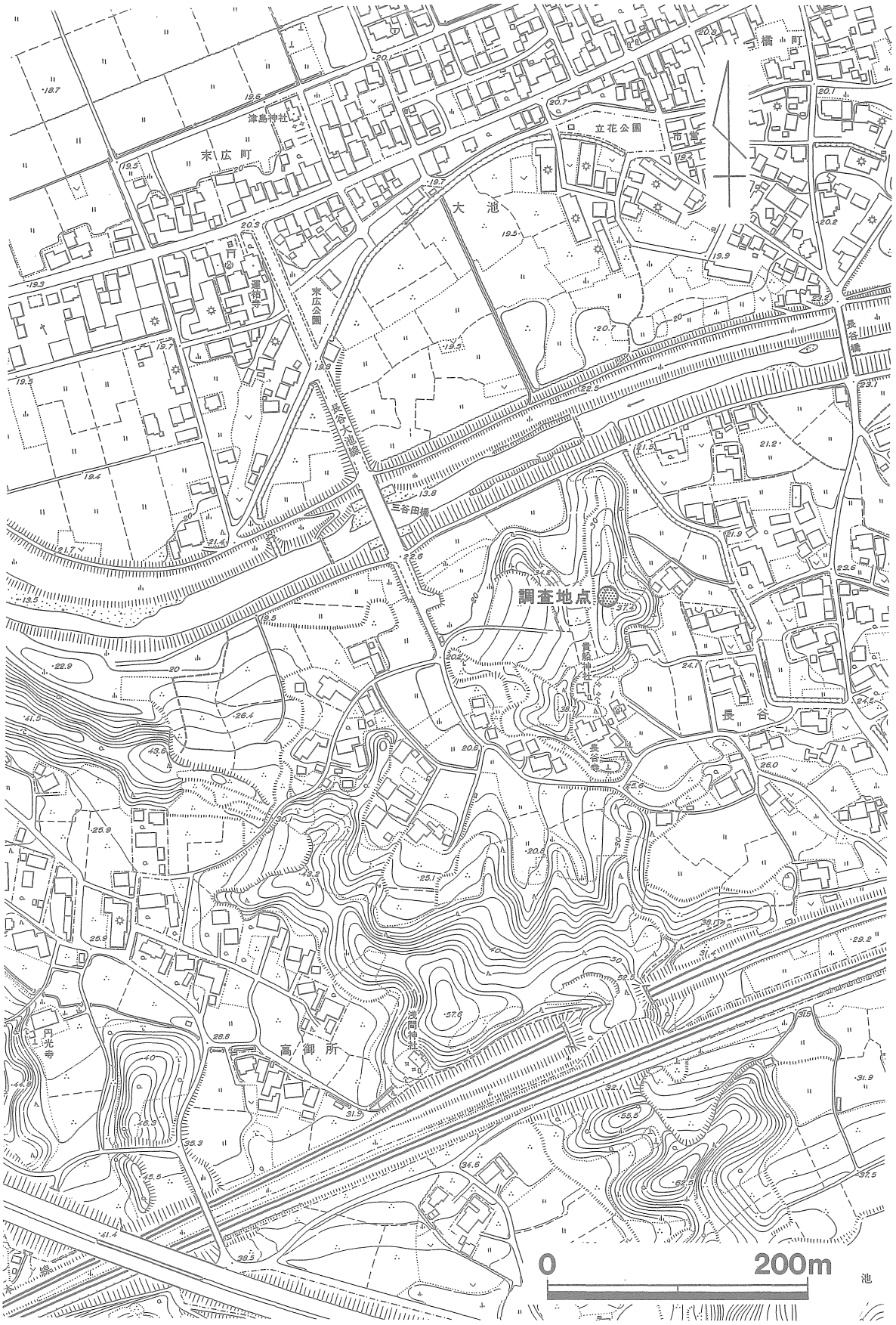
1・2・5の内側には、銀色の金属箔が残るが、3・4は芯だけが残る。

銅釧（第11図）

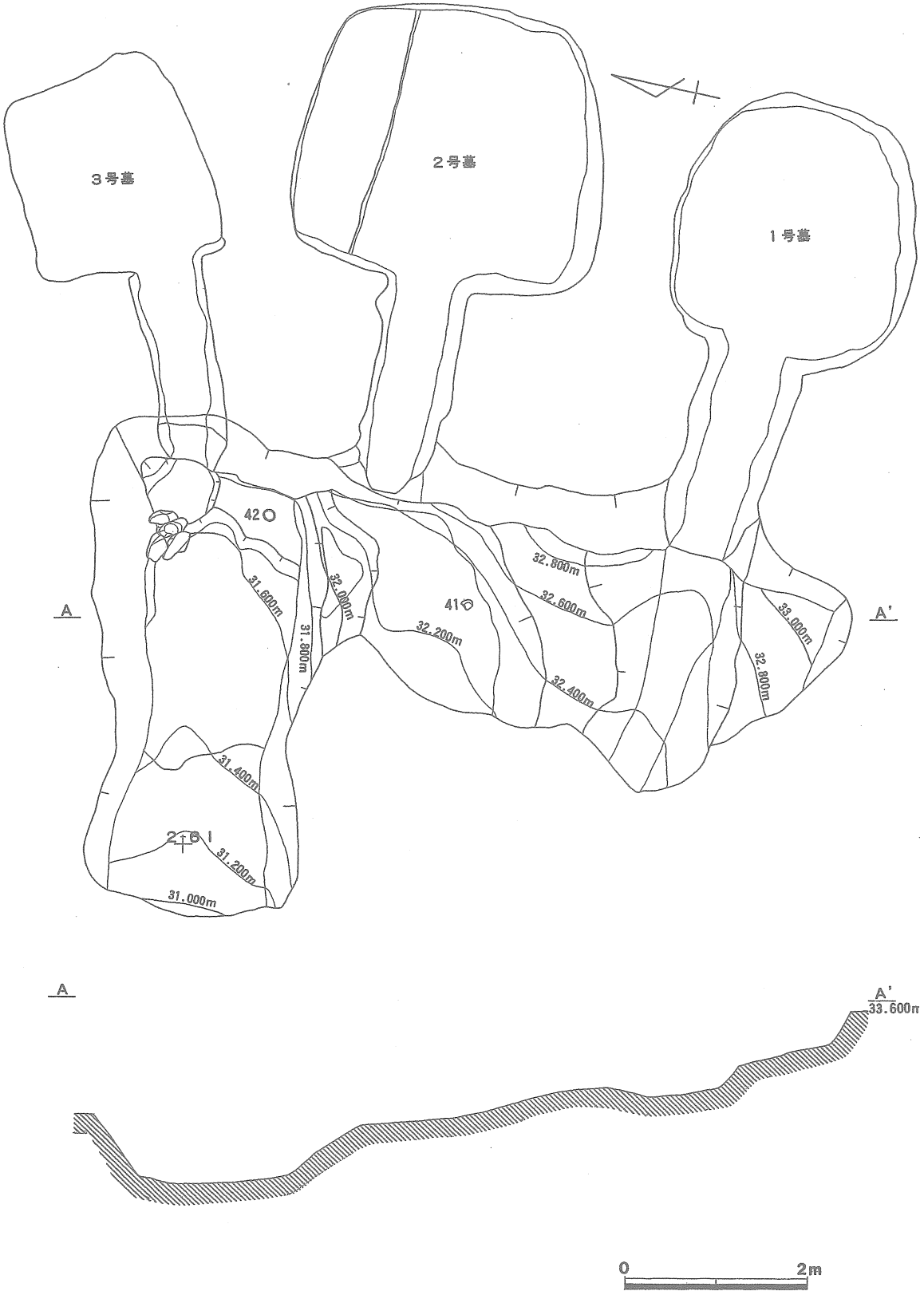
現存の幅5.65㎝、長さ7.05㎝を測る。断面は、直径3.5㎜の円形を呈する。全体に緑青に覆われているが、表面がなめらかな部分があり、金属箔が表面に施されている可能性がある。

玉類（第12図）

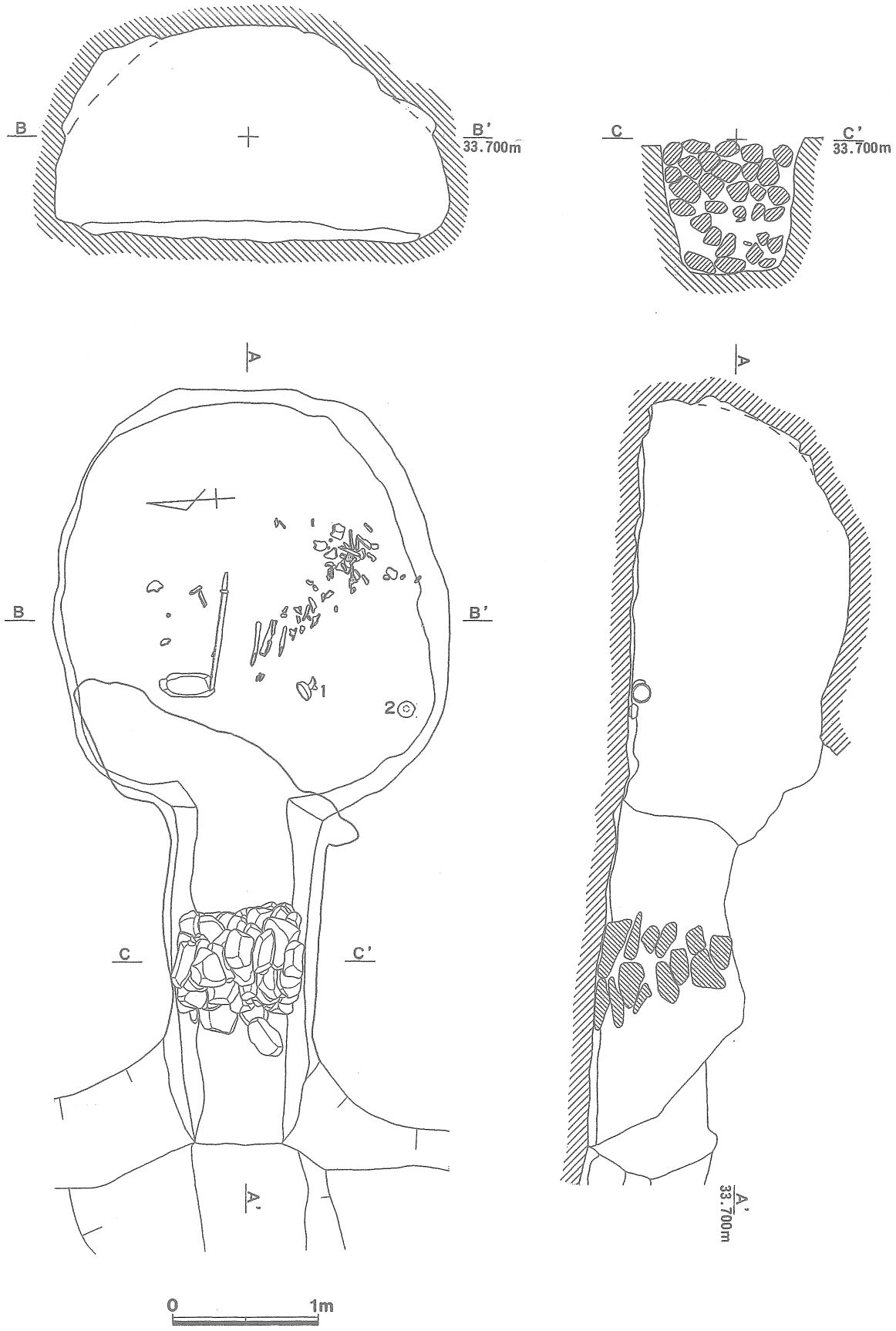
1は、琥珀製の棗玉、2は瑪瑙製の勾玉、3は濃緑色、4は黄緑色の石製勾玉でともに白色の縞が入る。5から23は石製の丸玉で、3・4の勾玉と同じ石材が使われている。24から27はガラス製の丸玉で、劣化して白色を呈する。28は赤色をした石製で、29から96まではガラス製の小玉である。31が緑色、68が黄色、57・58・61～63・67・69・70・74・75・78～80・83～85が劣化して白色を呈する。他は紺色か水色を呈する。



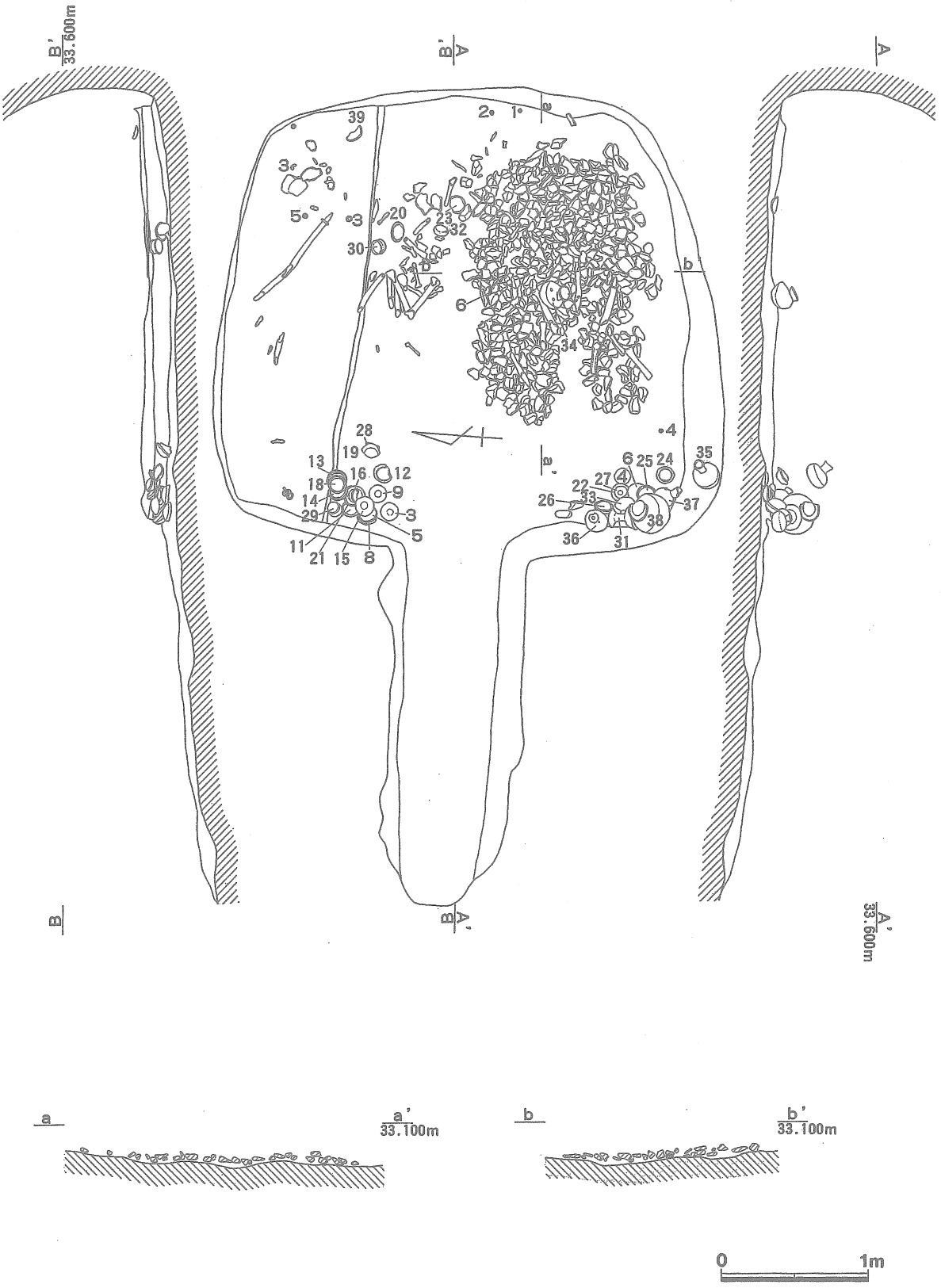
第１図　位置図


3号墓
2号墓
1号墓
42
41
A
A'
31.600m
31.800m
32.000m
32.200m
32.400m
32.600m
32.800m
33.000m
31.400m
31.200m
31.000m
0
2m
33.600m

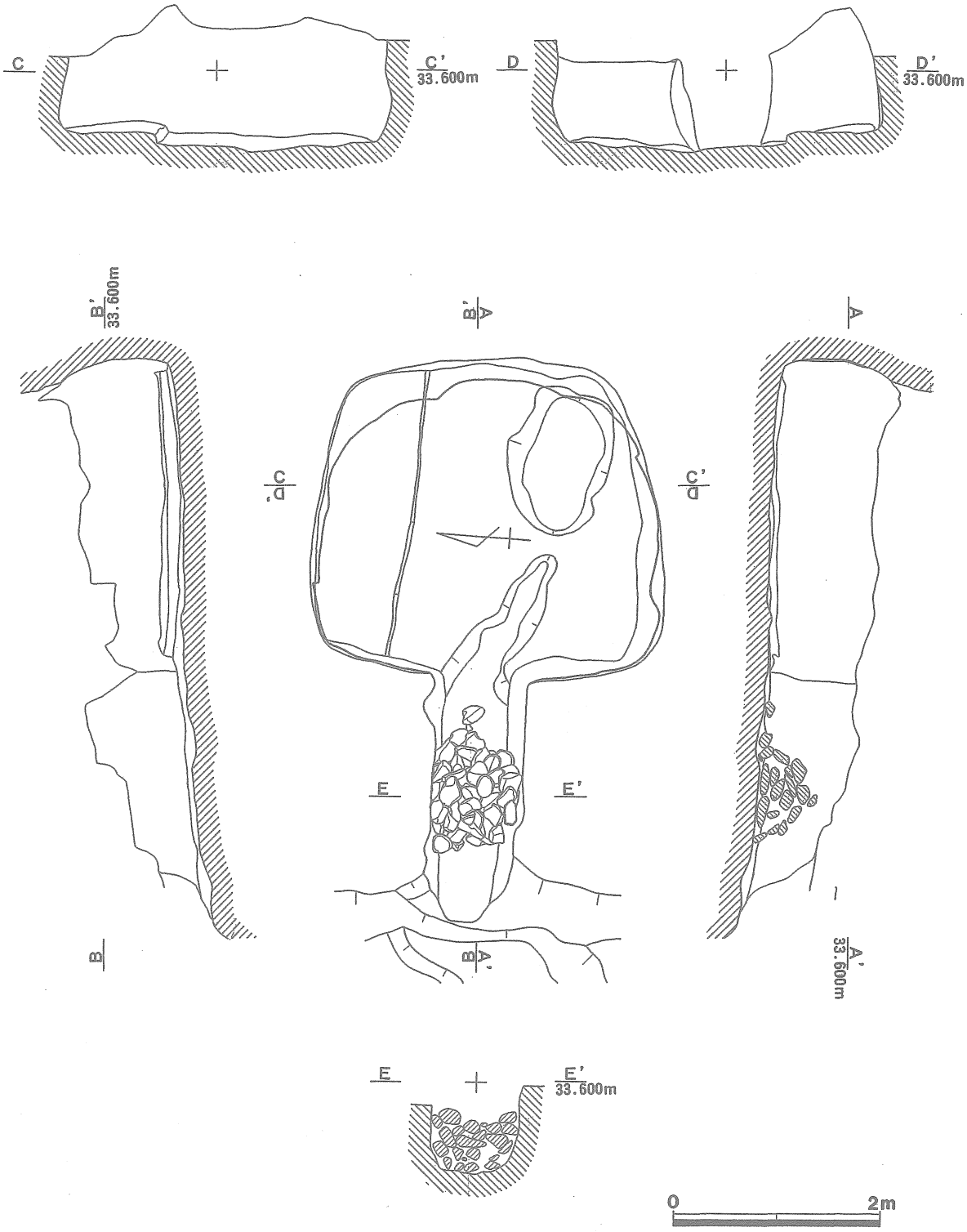
第２図　横穴墓群全体図



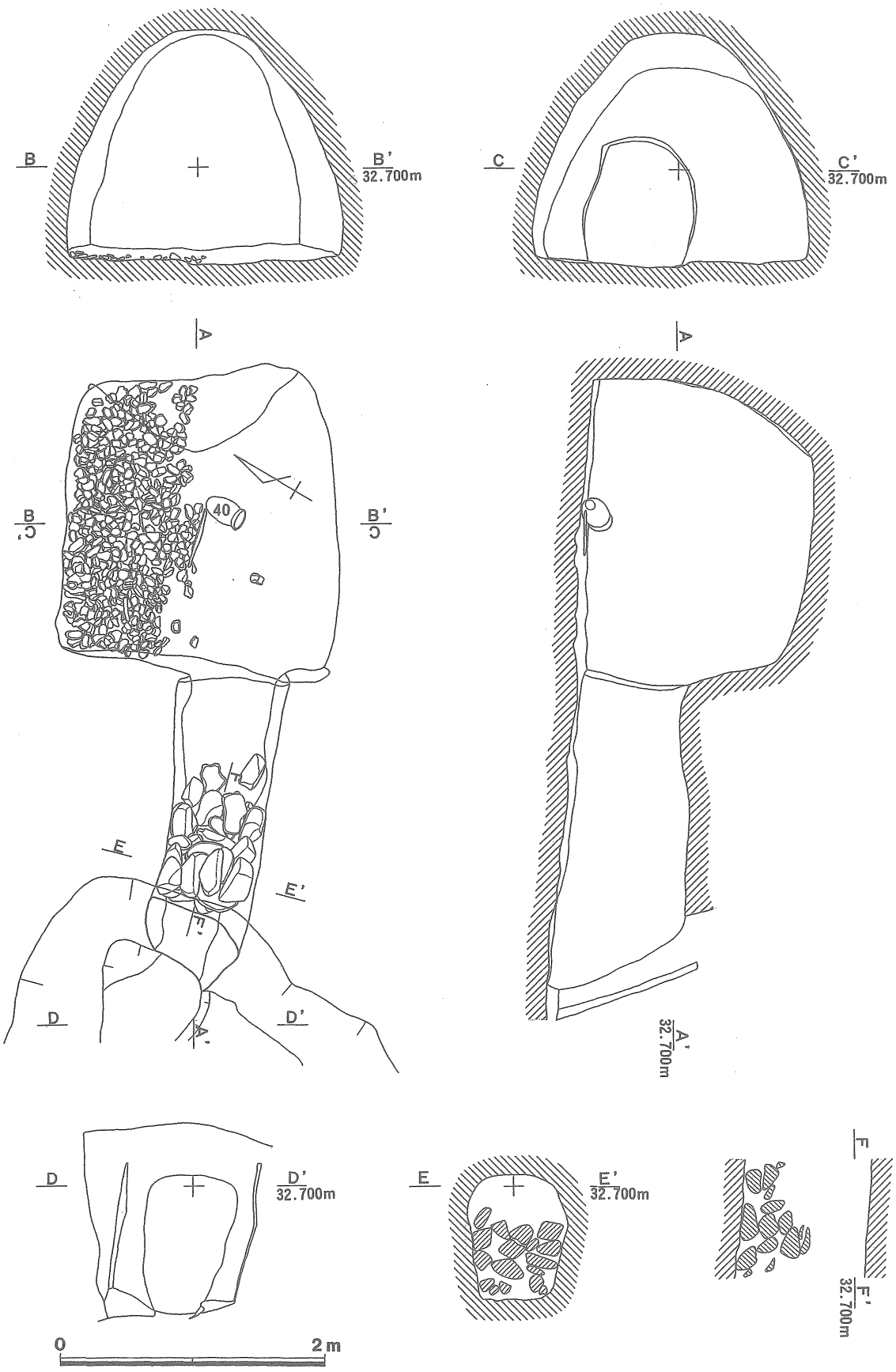
第３図　１号墓実測図


B'
33.600m
B'
A
A
39
2
1
a
3
5
3
20
23
32
30
b
b
6
34
28
19
4
13
16
12
6
25
24
35
18
9
27
22
14
29
3
26
33
37
5
38
11
21
15
8
36
31
B
B
A'
A'
33.600m
a
a'
33.100m
b
b'
33.100m
0
1m

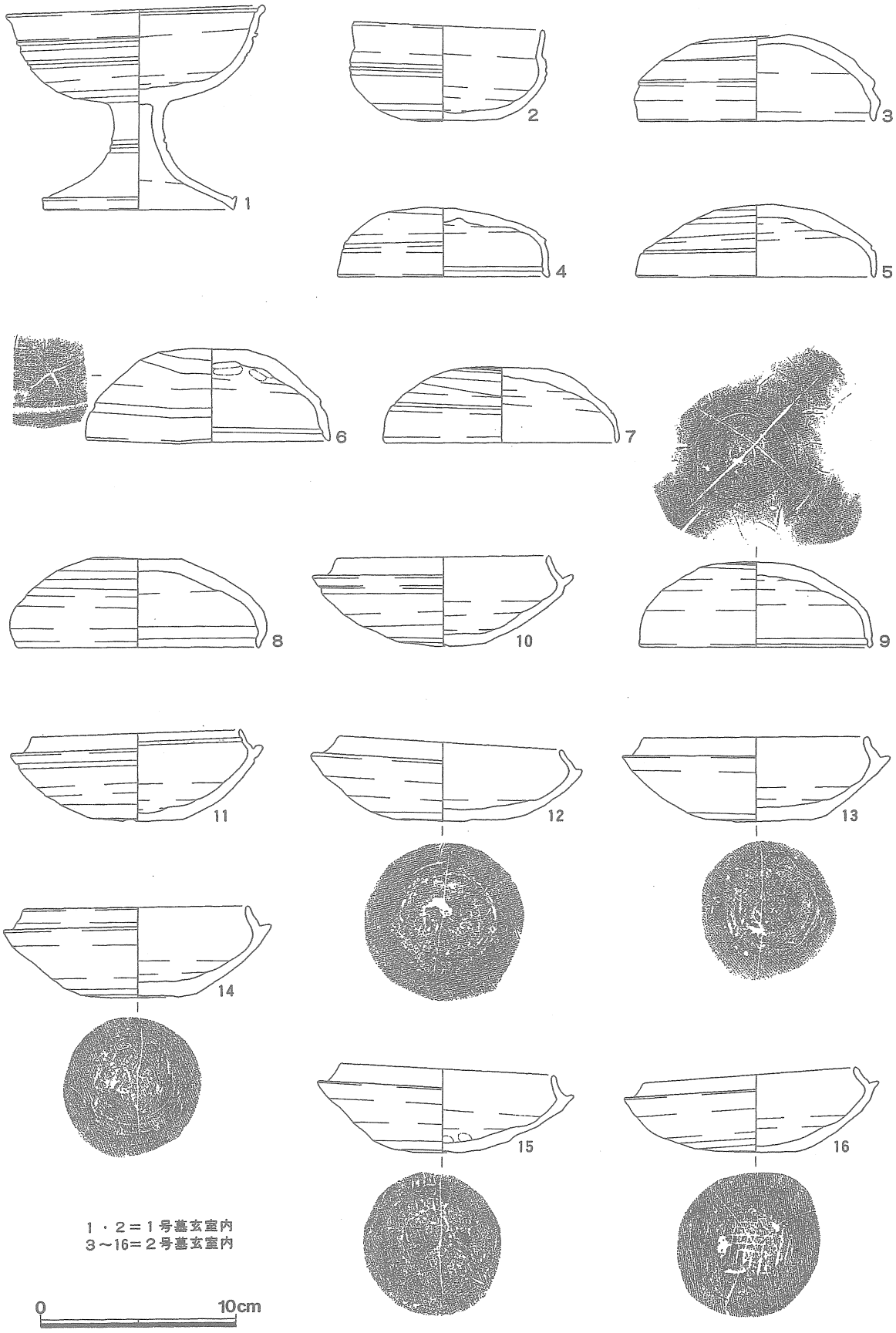
第４図　２号墓実測図(1)



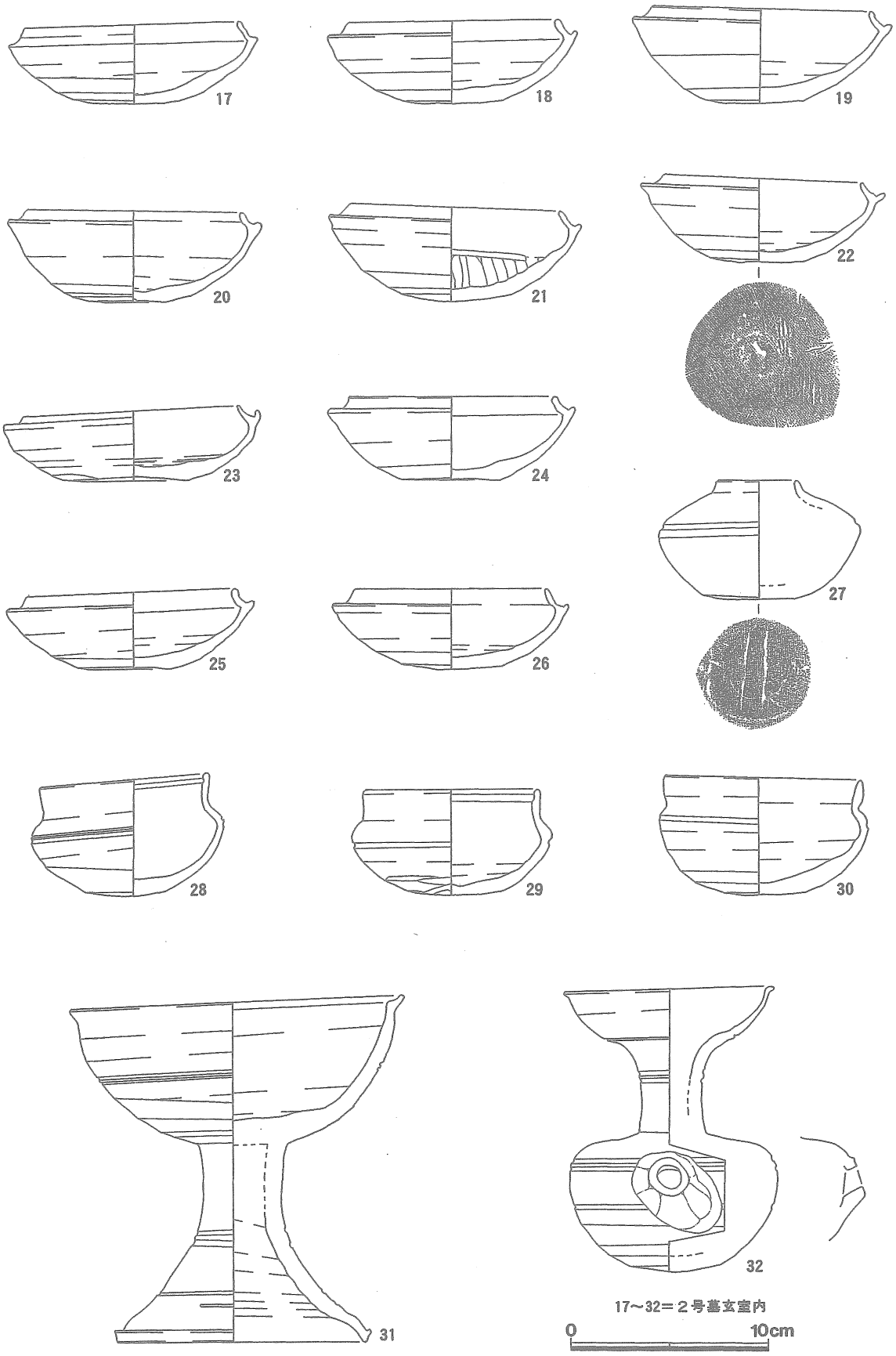
第５図　２号墓実測図(2)


B
B'
32.700m
C
C'
32.700m
A
A
B
C'
B'
C
40
E
E'
D
D'
A'
A'
32.700m
D
D'
32.700m
E
E'
32.700m
F
F'
32.700m
0
2m

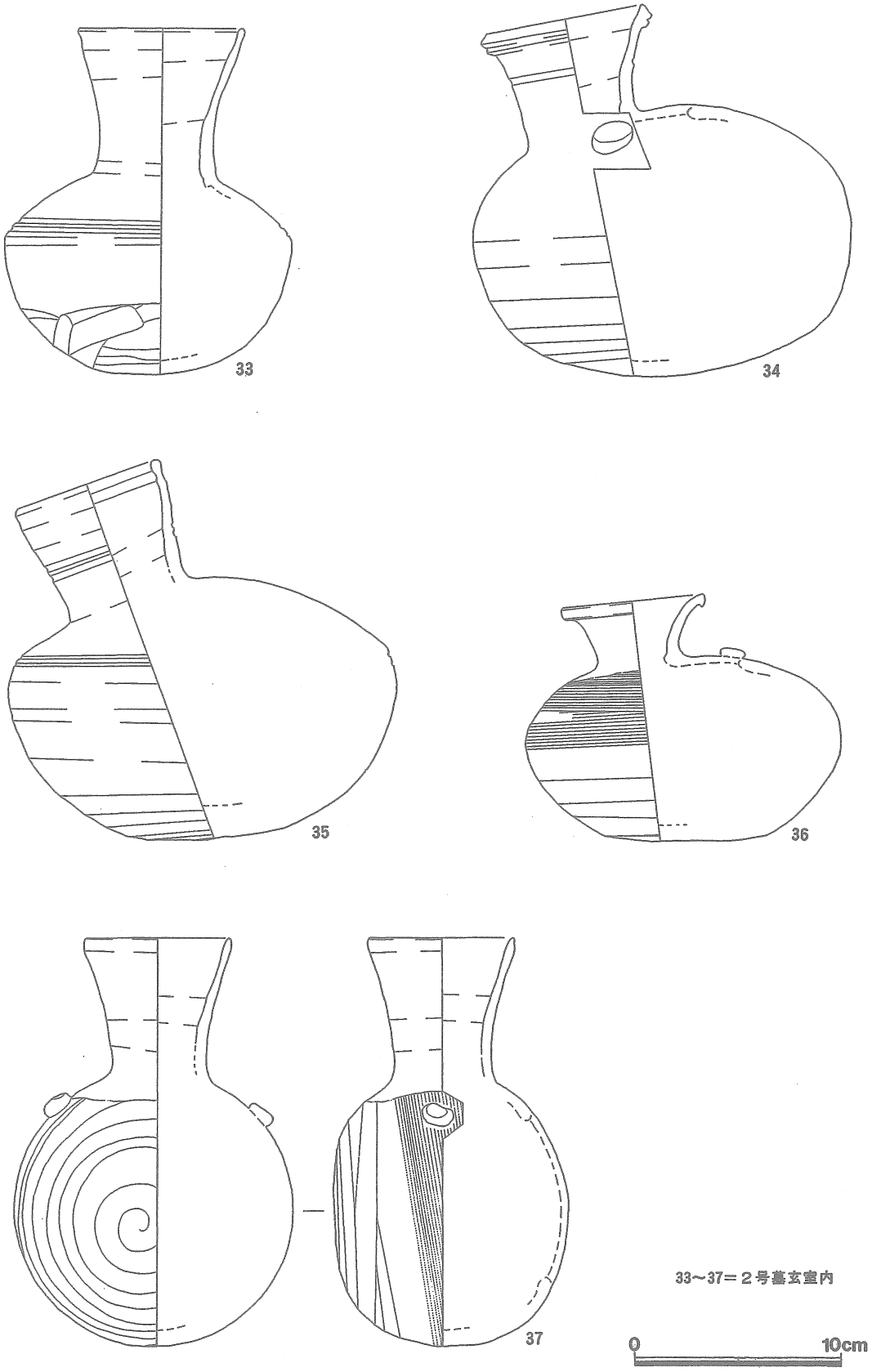
第6図　3号墓実測図



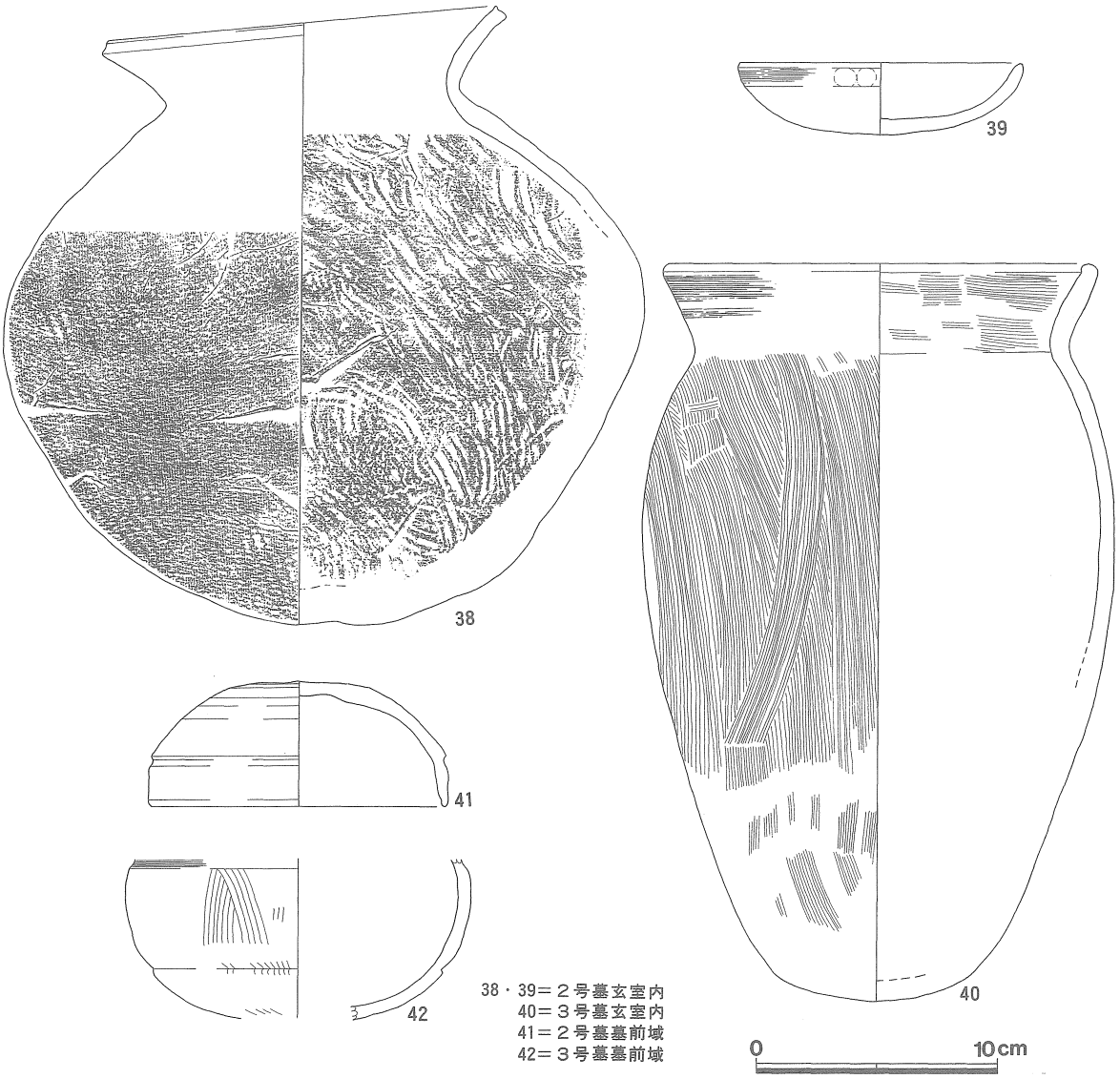
第７図　土器実測図(1)



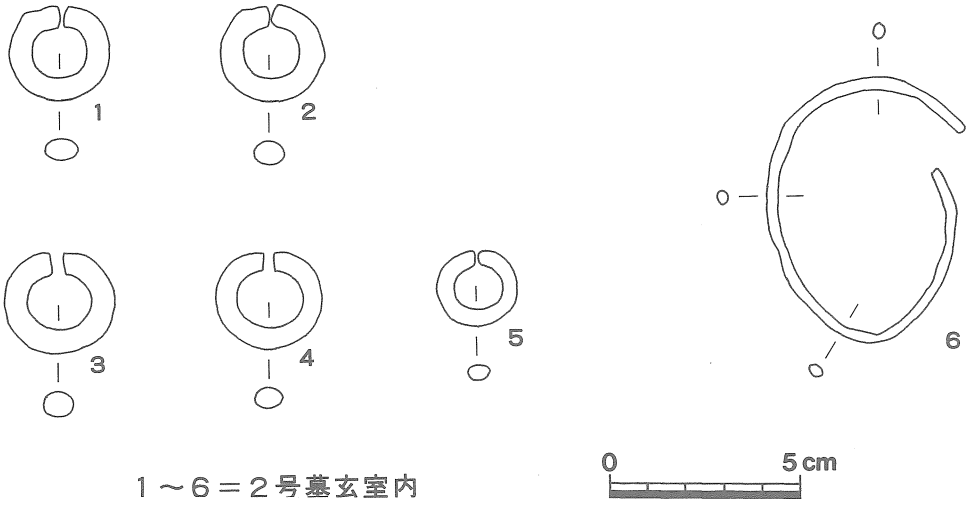
第８図　土器実測図(2)



第９図　土器実測図(3)

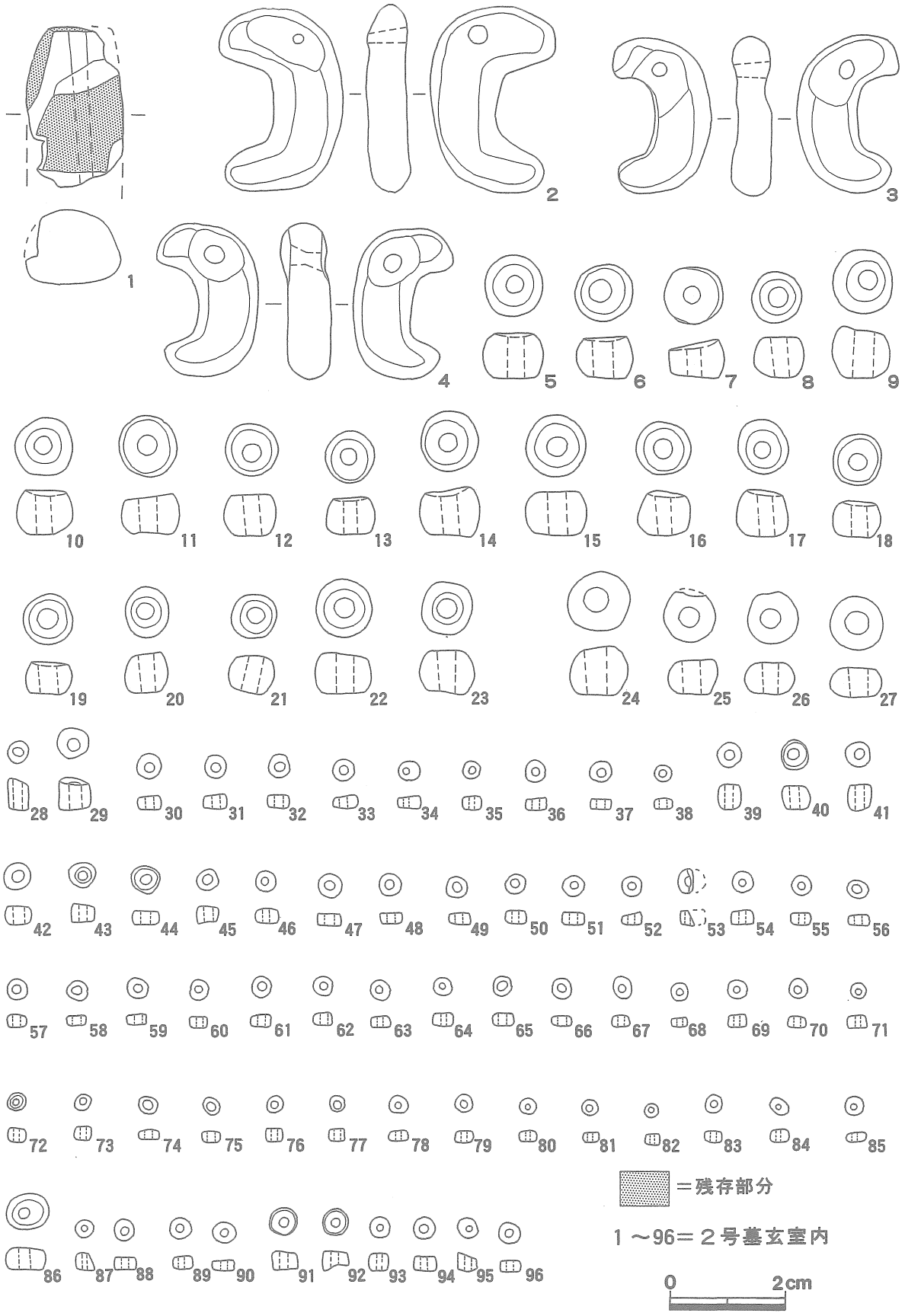


第10図　土器実測図(4)



１～６＝２号墓玄室内

第11図　耳環・銅釧実測図



第12図　玉類実測図

図版 1

墓前域完掘（北から）

2号墓完掘（南西から）

図版 2

1号墓玄室内
（北西から）

1号墓閉塞石
（北から）

1号墓完掘
（西から）

図版 3

2号墓玄室内
（北から）

2号墓閉塞石
（北から）

2号墓玄室完掘
（南西から）

Ⅵ　本村遺跡・前坪古墳群６号墳

1. 調査の概要

本村遺跡は、前坪古墳群６号墳を調査中に古墳の下および周辺から発見された。

遺構の実測は、地形に合わせてグリッドを設定して行った。遺構図を20分の１の縮尺で、微細図を10分の１・１分の１で作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。平成７年12月４日から平成８年３月31日まで現地調査を行った。

2. 遺構の概要

丘陵頂部から古墳１基、方形周溝墓４基、鞍部から土坑墓群を検出した。ここでは、方形周溝墓群・古墳と、土坑墓群に分けて記述する。

方形周溝墓

ＳＳ０１（第４図）

方形周溝墓ＳＳ02の東側に位置し、周溝ＳＤ02をＳＳ02と共有する。

周溝　ＳＤ01は、現存の長さ96㎝、覆土は灰褐色土。ＳＤ02の覆土は黒褐色を呈する。

出土遺物　ＳＤ01周辺を掘削中に第15図－１～４の弥生土器片が出土した。

ＳＳ０２（第５図）

ＳＤ02をＳＳ01と、ＳＤ05をＳＳ03と共有する。方台部の規模は、東西6.2m、南北4.73mを測る。この周溝墓上に前坪古墳群６号墳は造られている。

周溝　ＳＤ03は、東半では深さ38㎝を測り、西半は一段深くなるが、この深くなる部分は、上層にあった周溝のコピーの可能性が高い。覆土は褐色土。ＳＤ04は、方台部より一段低い所に掘られていて、深さは方台部からは68㎝、墓外からは22㎝を測る。覆土は暗灰褐色土である。ＳＤ05は、ＳＤ04同様、方台部より一段低い所に掘られていて、方台部からの深さ75㎝、ＳＳ03側からでは９㎝である。

主体部　方台部中央から主体部ＳＦ02が検出された。西端は、前坪古墳群６号墳の主体部ＳＦ01により壊されている。現存の規模は、長さ1.96m、幅1.09m～1.27m、深さ18㎝を測り、主軸方位は、Ｎ－68°－Ｗである。暗黄褐色土を覆土とする。

出土遺物　ＳＤ04の覆土中から条痕文土器の甕の破片が出土した。方台部上の古墳の盛り土を掘削中に第15図－５～15の土器片が出土した。

ＳＳ０３（第６図・第７図）

ＳＤ05をＳＳ02と、ＳＤ07をＳＳ04と共有する。南側を区画する溝は、検出されなかった。方台部の規模は、東西5.85m、南北４m以上と考えられる。

周溝　ＳＤ06は、斜面側が崩落している。方台部より一段低い所に掘られていて、深さは方台部から約１mを測る。覆土は暗灰褐色土。ＳＤ07は、南端を攪乱により壊され、覆土は暗灰褐色土。

主体部　方台部の東西間の中央から主体部ＳＦ03が検出された。南西隅をＳＫ01と切り合うが、前後関係は明らかではない。長さ2.31m、幅1.35m、深さ25㎝を測り、主軸方位は、Ｎ－75°－Ｗである。灰褐色土中から第18図－１～118の管玉が出土した。主体部を、主軸ラインで南北に２分割し、さらにほぼ中央で主軸ラインと直交するラインを設けさらに東西で２分割して、篩いにかけたところ、管玉

は南東ブロックから81点、北東ブロックから36点出土した。小口板等の痕跡はない。

出土遺物　主体部から前述の管玉が出土し、方台部掘削中に北東隅近くから第17図－２の滑石製紡錘車が出土した。周溝からの出土遺物はない。

ＳＳ０４（第４図）

ＳＤ07をＳＳ03と共有する。東溝と北溝は確認できたが、西側と南側の溝は確認されなかった。

周溝　ＳＤ08は、方台部より一段低い所に掘られていて、方台部からの深さ61㎝を測る。

主体部・出土遺物　主体部の検出、遺物の出土はない。

土坑

ＳＫ０１（第７図）

ＳＳ03の主体部ＳＦ03と切り合う。長さ2.04m、幅55㎝、深さ16㎝の細長い土坑で、覆土にしまりがなく、木の根などによる攪乱の可能性があり、太型蛤刃石斧はＳＦ03に伴う可能性がある。

ＳＫ０２（第６図）

11－４Ｄ・５Ｄ区から検出された。現存の長さ1.84m、覆土は暗褐色土。出土遺物はない。

ＳＫ０３（第７図）

11－４Ｃ・５Ｃ区から検出された。長さ2.88m、幅52㎝、暗褐色土を覆土とする。出土遺物はない。

前坪古墳群６号墳（第８図・第９図）

11－６Ｄの杭を墳頂中央とする古墳と思われたが、主体部は2.6m西で検出された。第８図Ａ－Ａ′断面の１層・２層・12層は地山の可能性が高く、６層は方形周溝墓ＳＳ02の主体部ＳＦ02の覆土、13層は方形周溝墓の周溝ＳＤ04の覆土である。７層～９層は後世の攪乱と考えられる。掘削中に出土した須恵器のレベルから、３層～５層が古墳に伴う盛り土と考えられる。

主体部　ＳＦ01は、長さ2.11m、幅1.15m、深さ35㎝を測り、主軸方位は、Ｎ－21°－Ｅである。掘り方底面は、平坦ではなく凹凸が見られる。土坑の南西隅から第18図－119の勾玉が出土した。

出土遺物　主体部から前述の勾玉が出土した他、墳丘盛り土内や古墳の周辺から、第15図－16～20、第16図－21～27の土器が出土した。

かわらけ（第10図）

前坪古墳群６号墳の墳丘掘り下げ中に、横転したり伏せた状態のかわらけが一括出土した。

ＳＤ０９（第２図）

11－４Ｂ～７Ｂ区、４Ｃ～７Ｃ区にかけて検出された。人工物でない可能性がある。

土坑墓群（第11図）

調査区の西端近く、溝状遺構ＳＤ10・ＳＤ11に挟まれた場所に土坑墓群が存在する。

ＳＤ１０（第３図・第11図）

長さ10.8m、幅は北端が狭く75㎝で、南下するほど幅広となり、南端では2.3mを測る。覆土は、下層に灰褐色土、上層に暗灰褐色土である。出土遺物はない。

ＳＤ１１（第11図）

長さ6.5m、最大幅2.0mを測る。深さは、西端で90㎝、東端で25㎝を測る。覆土は10㎝から15㎝の大きさの礫を多量に含む黄灰色砂質土で、近世以降の遺構の可能性が高い。

土坑墓

ＳＦ０４（第12図）

長さ2.23m、幅93㎝、深さ61㎝を測り、主軸方位は、Ｎ－16°30′－Ｗである。１層中に細片化した土器が混入していた。また、中央から北寄りで第18図－120・121の玉が出土している。

ＳＦ０５（第12図）

長さ2.46m、幅98cm、深さ44cmを測り、主軸方位は、Ｎ－66°－Ｅを測る。出土遺物はない。

ＳＦ０６（第12図）

長さ2.54m、幅82cm、深さ58cmを測り、主軸方位は、Ｎ－６°30′－Ｗである。南端をＳＫ06に切られているように判断される。中央南寄りの１層中上面から第16図－34～37の土器片が出土している。南北に３分割した中央から第18図－122～128の玉が出土している。

ＳＦ０７（第14図）

長さ1.53m、幅77cm、深さ35cmを測り、主軸方位は、Ｎ－７°30′－Ｗである。覆土中の３層は地山の可能性がある。中央付近から第18図－129～133の玉が出土している。

ＳＦ０８（第13図）

長さ2.74m、幅1.3m、深さ60cmを測り、主軸方位は、Ｎ－17°－Ｗである。別遺構（３層）を切っていると判断される。土坑北寄りで60cmほど浮いた状態で弥生時代後期菊川式の壺の破片が出土した。

ＳＦ０９（第13図）

長さ2.34m、幅1.4m、深さ45cmを測り、主軸方位は、Ｎ－76°30′－Ｅである。覆土は、底面上に４cmの厚さで暗灰褐色土が堆積し、その上に暗褐色土が堆積している。出土遺物はない。

土坑

ＳＫ０４（第14図）

ＳＤ10と切り合うが、前後関係は不明。長さ89cm、幅61cm、深さ18cm、主軸方位は、Ｎ－40°－Ｗである。覆土は、底面上２cmの厚さで灰褐色土が、その上に暗灰褐色土が堆積する。出土遺物はない。

ＳＫ０５（第14図）

長さ1.0m、幅55cm、深さ68cmを測り、主軸方位は、Ｎ－20°30′－Ｗである。出土遺物はない。

ＳＫ０６（第12図）

現存の長さ1.15m、幅58cm、深さ25cmを測り、主軸方位はＮ－49°－Ｗである。出土遺物はない。

3. 遺物の概要

土器（第15図・第16図）

１～15は、弥生時代中期中葉嶺田式土器で、１～４は壺、５～15は甕の破片である。１の外面には赤彩が残る。16から24は、須恵器甕の破片、25は須恵器大型瓶か壺の破片で、沈線により区画された文様帯に波状文が施される。体部下半はカキ目調整、ヘラ削りである。26・27は、土師器高坏の脚部、28は前坪古墳群６号墳掘削中に出土した山茶碗の破片である。29から37は、弥生時代後期後半の菊川式土器の破片で、29から36は壺、37は高坏の接合部である。

石製品（第17図）

１は変成岩製の太型蛤刃石斧で、重量949.9ｇ。２は滑石製の紡錘車で、側面に鋸歯文が陰刻される。

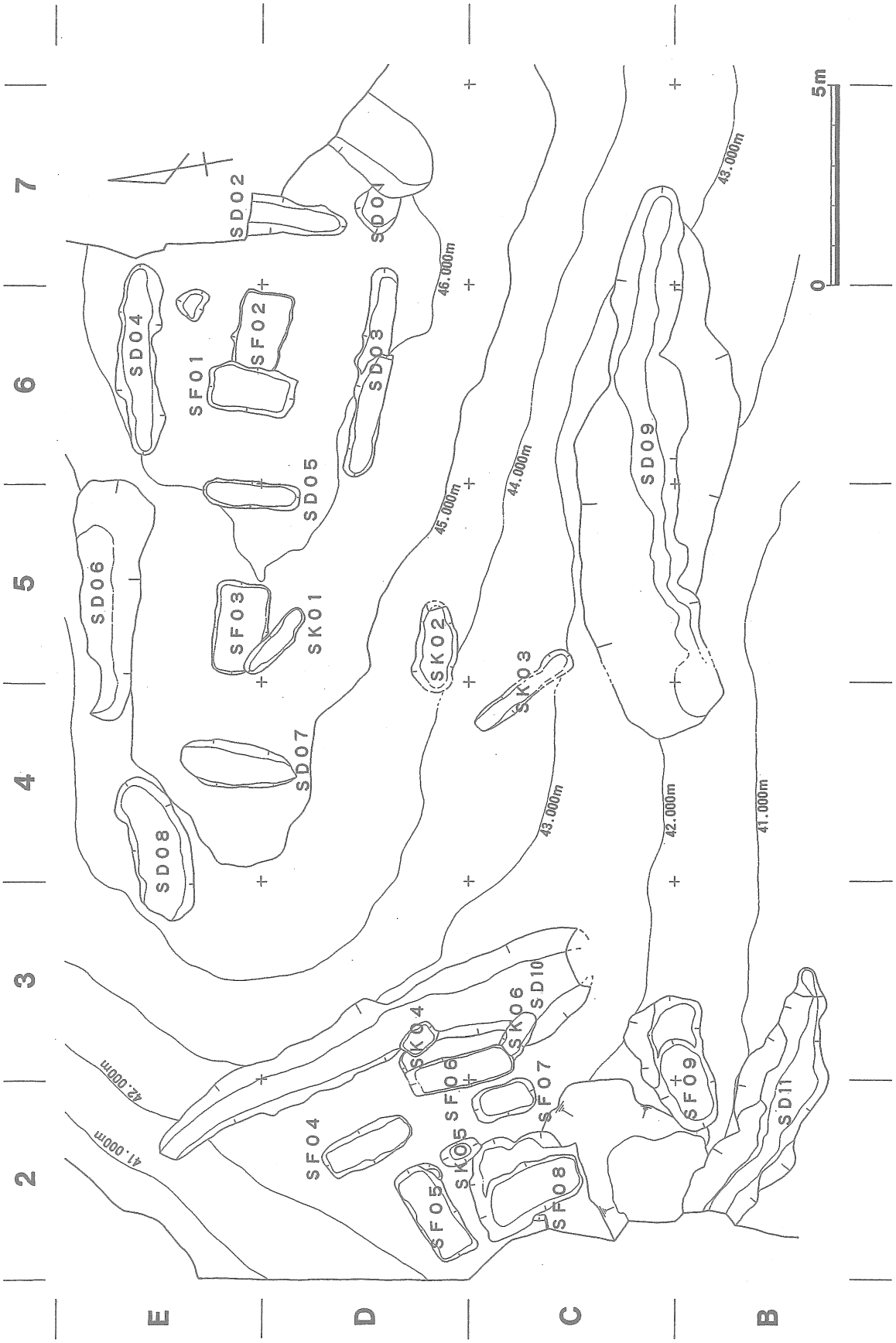
玉類（第18図）

１～118は緑色凝灰岩製の管玉で、長さ５㎜～７㎜が85点で過半数を占め、直径は、112点が２㎜から３㎜である。119は碧玉の勾玉、120は緑色凝灰岩製管玉、122～125・129・130は赤色凝灰岩製管玉、121・126～128・131～133はガラス玉で、121・131・133が紺色、他は青色か水色である。

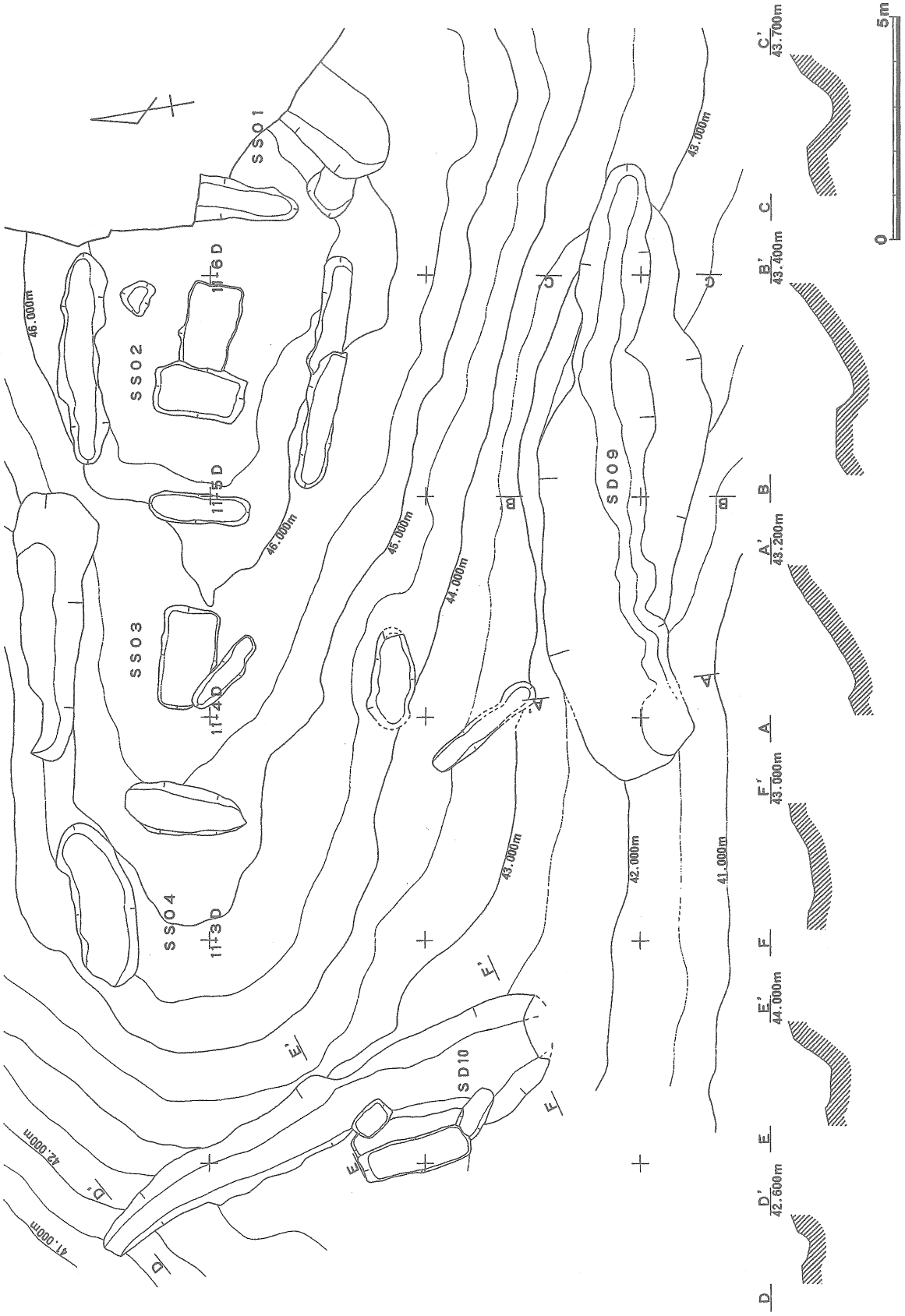
かわらけ（第19図）

器高３cm前後で、口径は、５・13・14が11cm代、他は12cm代である。15世紀～16世紀と推定。

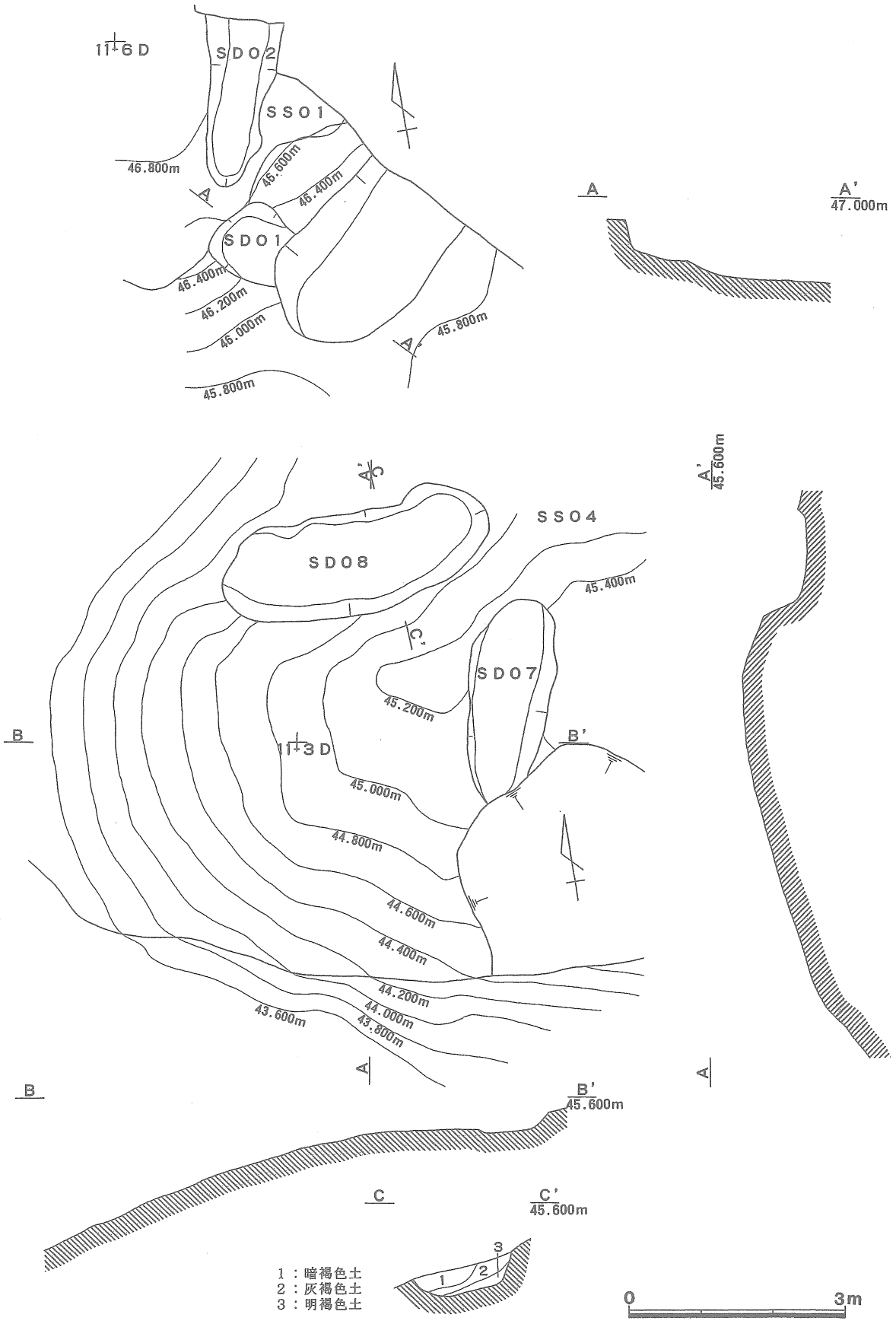
第１図　位置図


E
D
C
B
2
3
4
5
6
7
SD02
SD01
SD04
SF01
SF02
SD03
SD05
SD06
SF03
SK01
SD07
SD08
SK02
SK03
SD09
SK04
SF06
SK05
SK06
SD10
SF04
SF05
SF07
SF08
SF09
SD11
46.000m
45.000m
44.000m
43.000m
42.000m
41.000m
0
5m

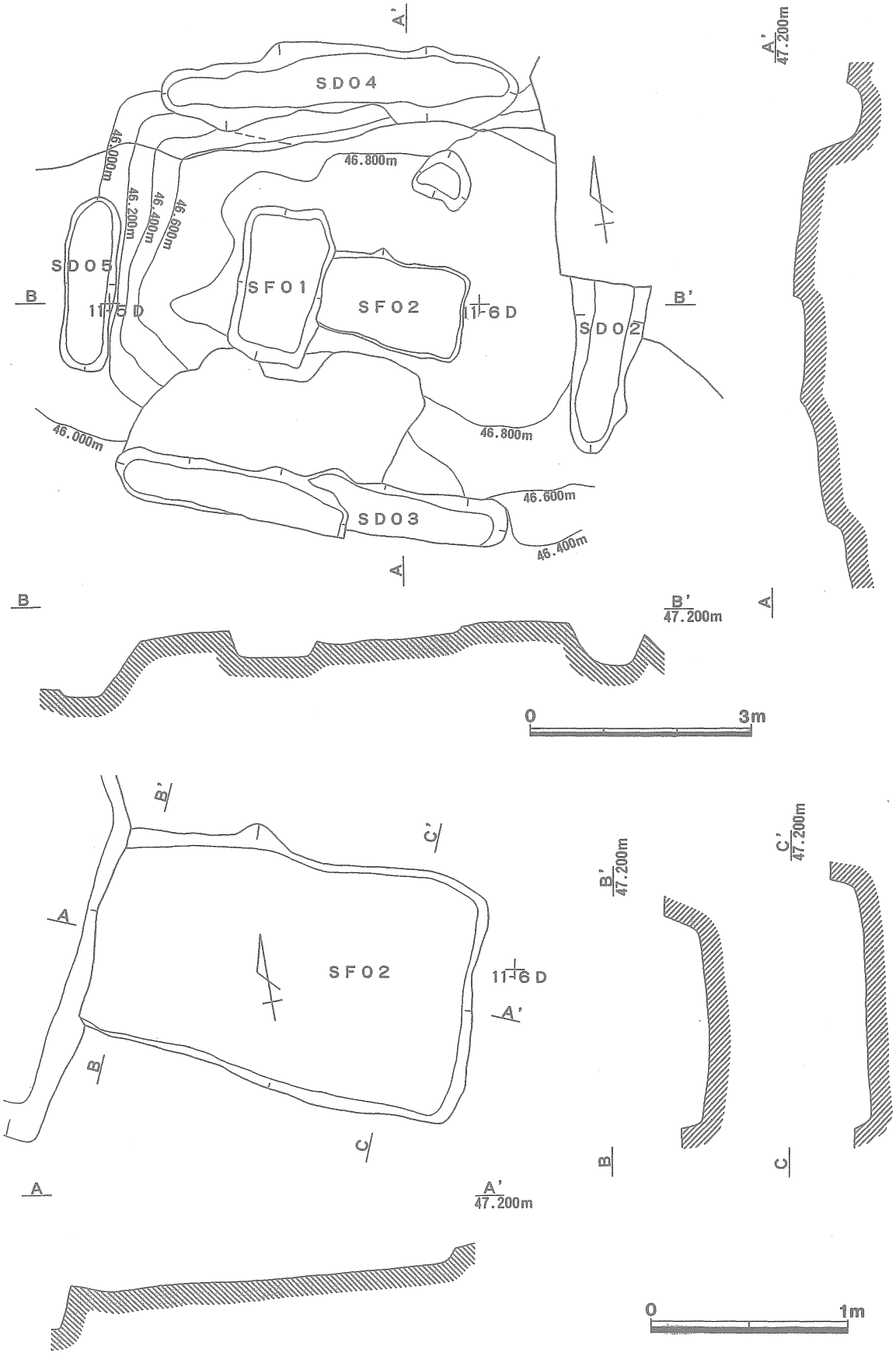
第２図　遺構全体図



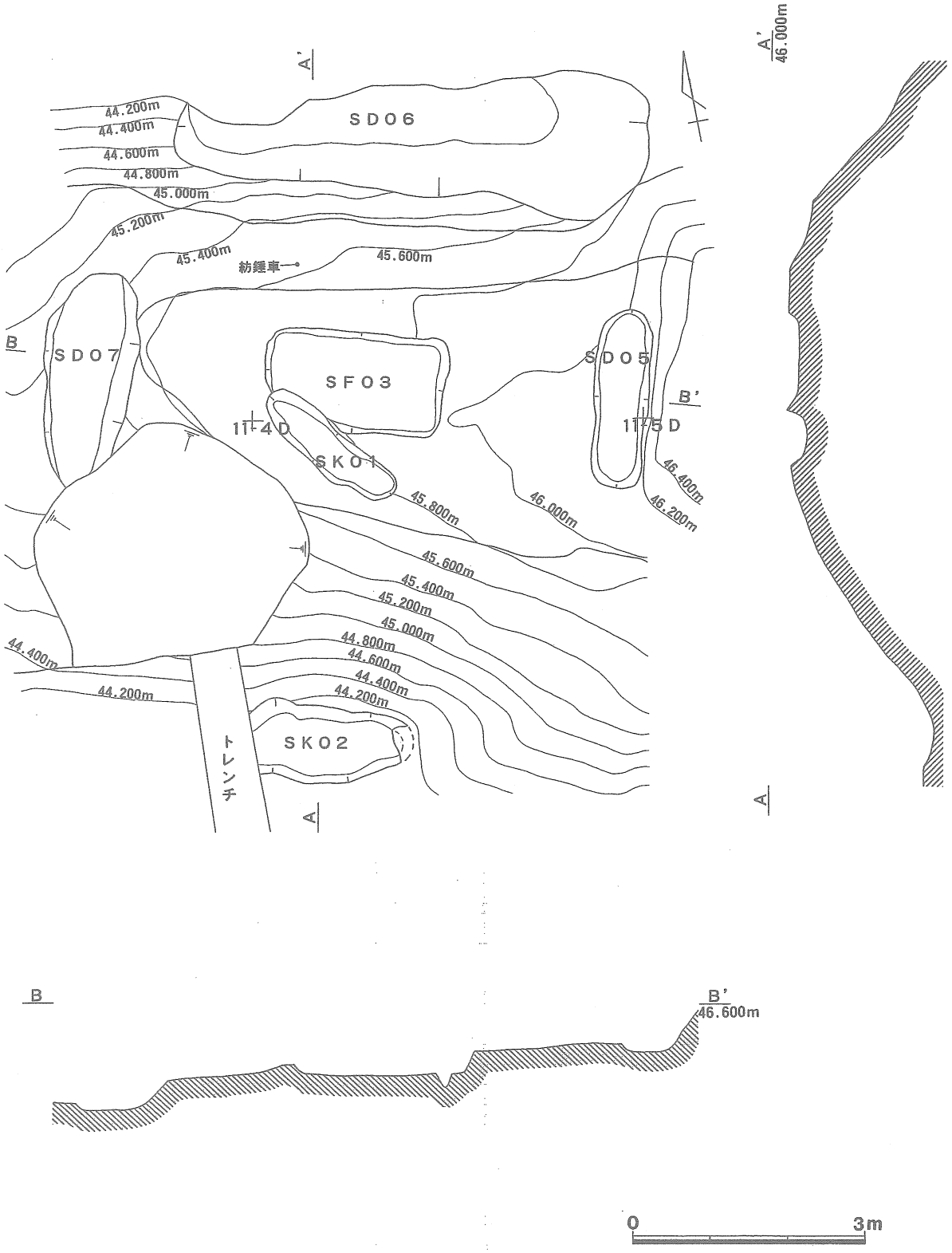
第３図　方形周溝墓群全体図



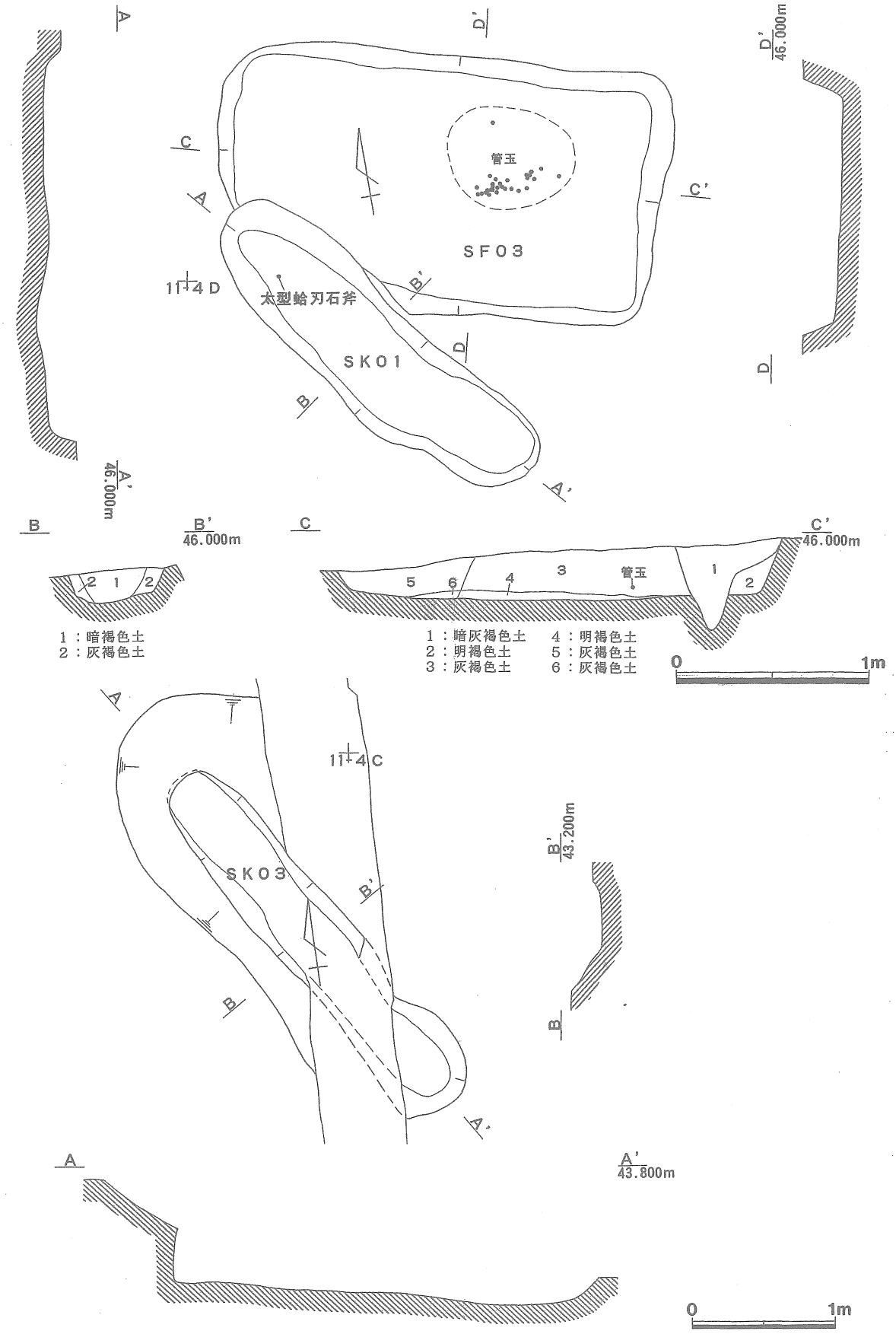
第４図　ＳＳ０１・ＳＳ０４実測図



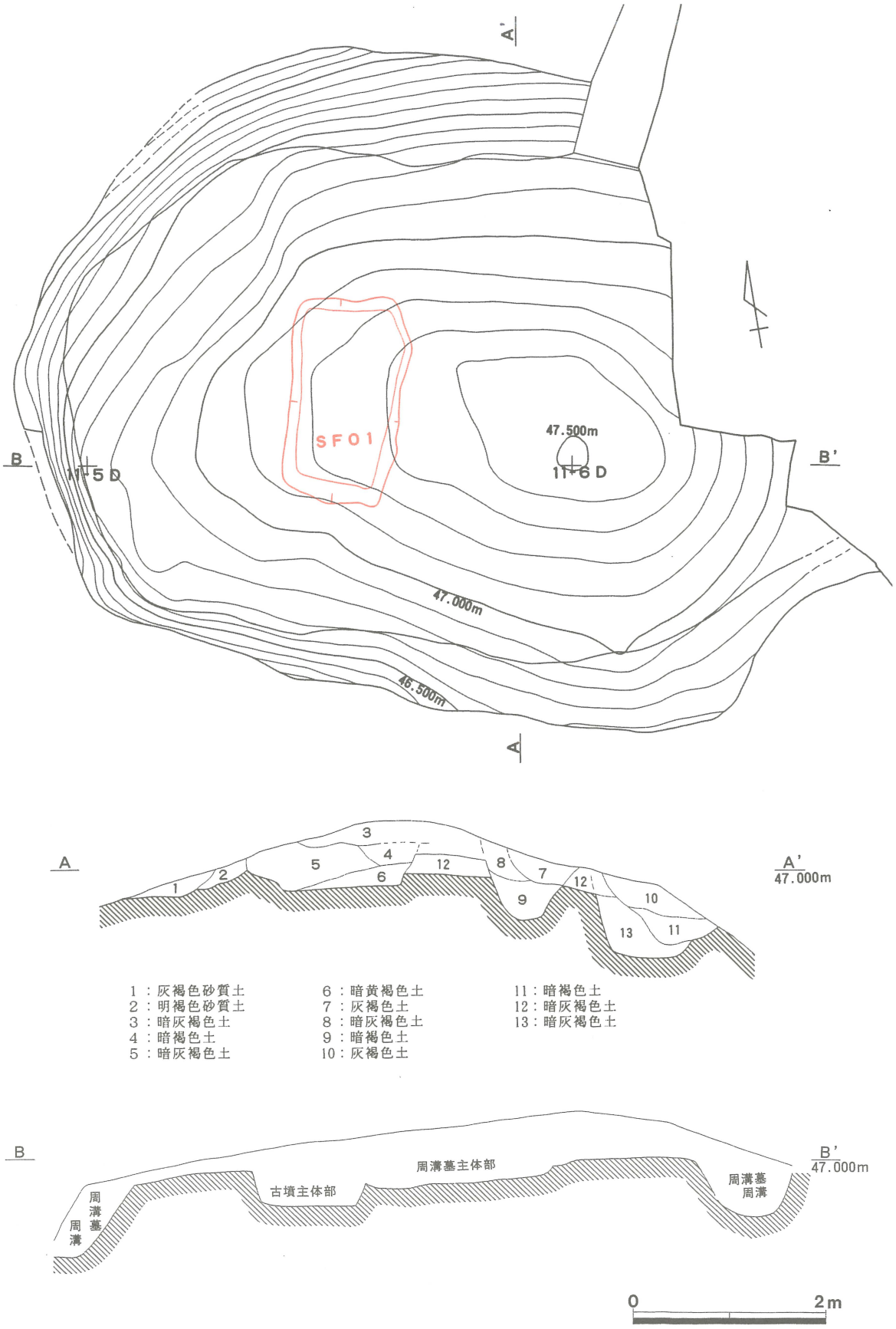
第５図　ＳＳ０２・主体部ＳＦ０２実測図


A'
A'
46.000m
SD06
44.200m
44.400m
44.600m
44.800m
45.000m
45.200m
45.400m
45.600m
紡錘車
B
SD07
SF03
SD05
B'
11-4D
11-5D
SK01
45.800m
46.000m
46.400m
46.200m
45.600m
45.400m
45.200m
45.000m
44.800m
44.600m
44.400m
44.200m
44.400m
44.200m
トレンチ
SK02
A
A
B
B'
46.600m
0
3m

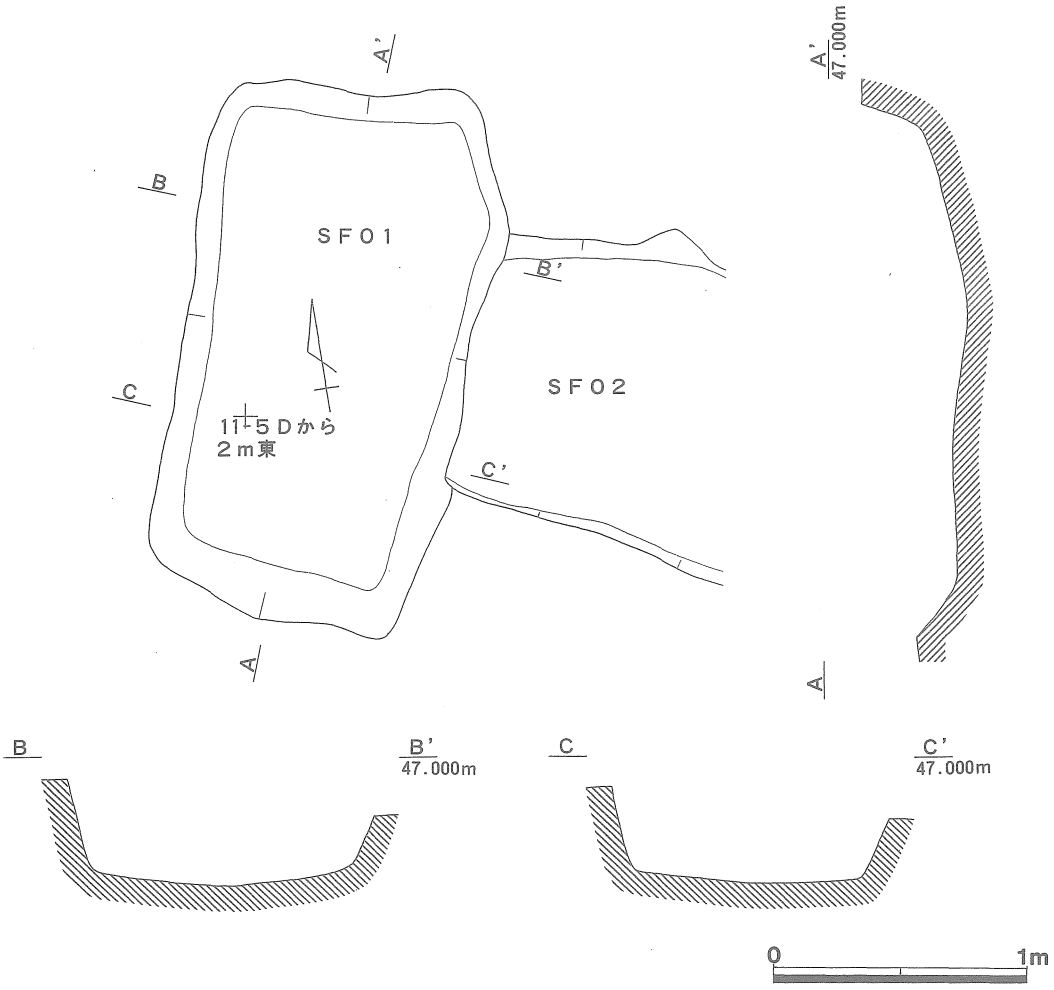
第６図　ＳＳ０３実測図



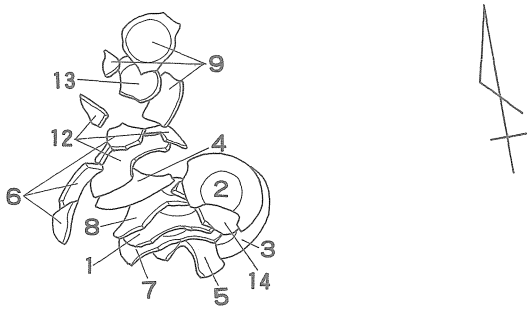
第７図　ＳＳ０３主体部ＳＦ０３・ＳＫ０１・ＳＫ０３実測図

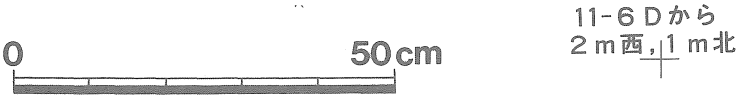


第８図　前坪古墳群６号墳　みかけの墳丘図

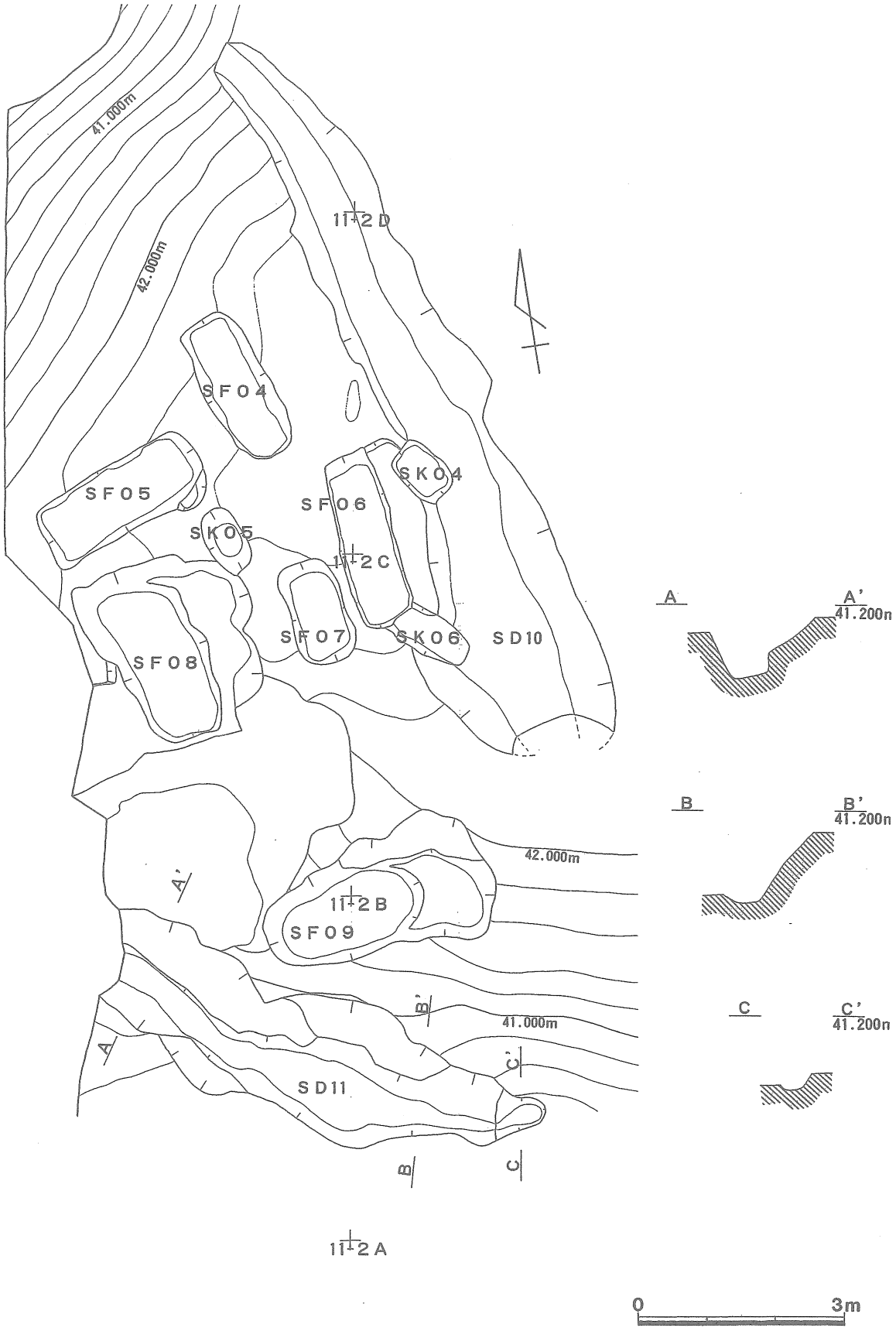


第９図　前坪古墳群６号墳主体部ＳＦ０１実測図

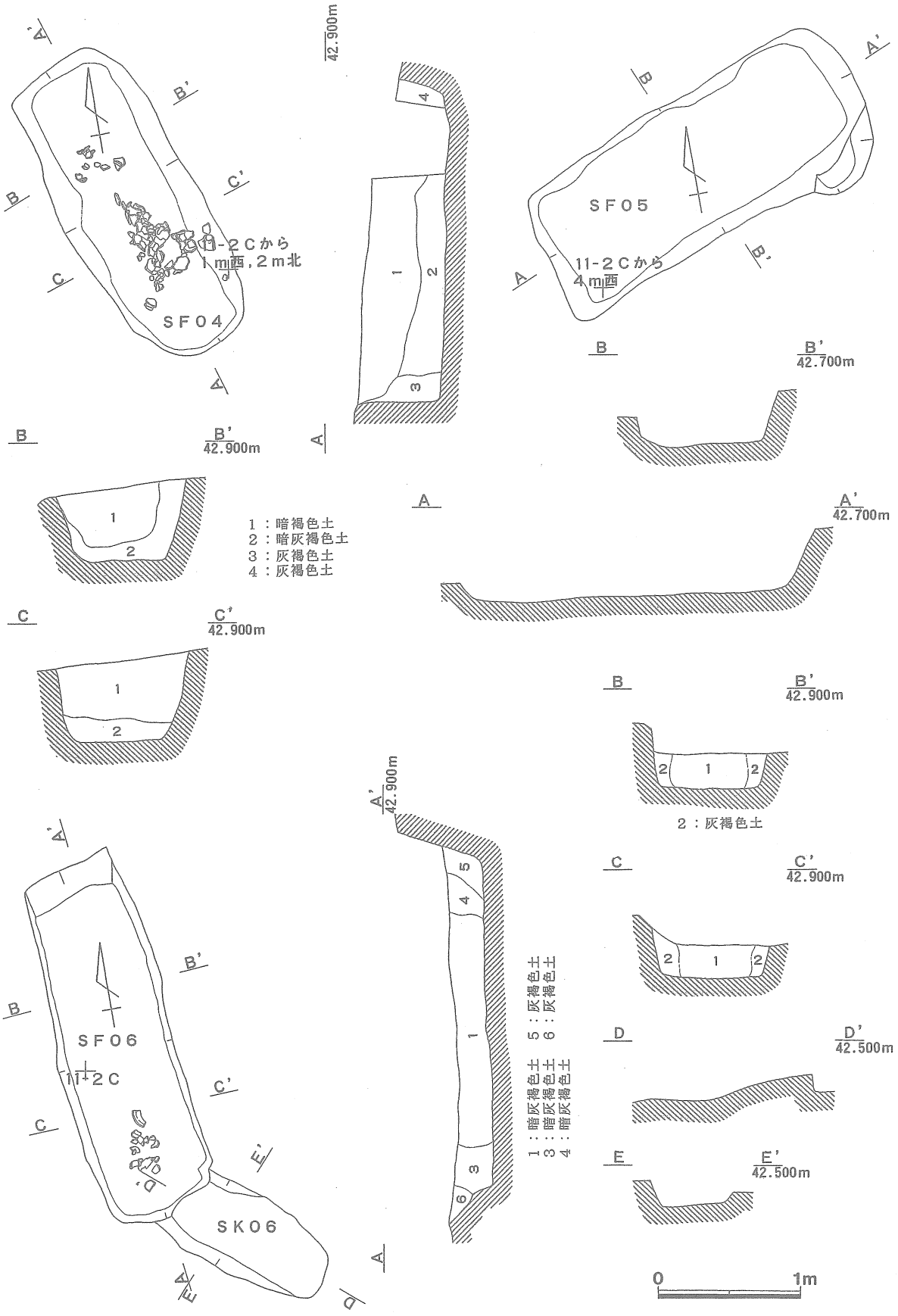




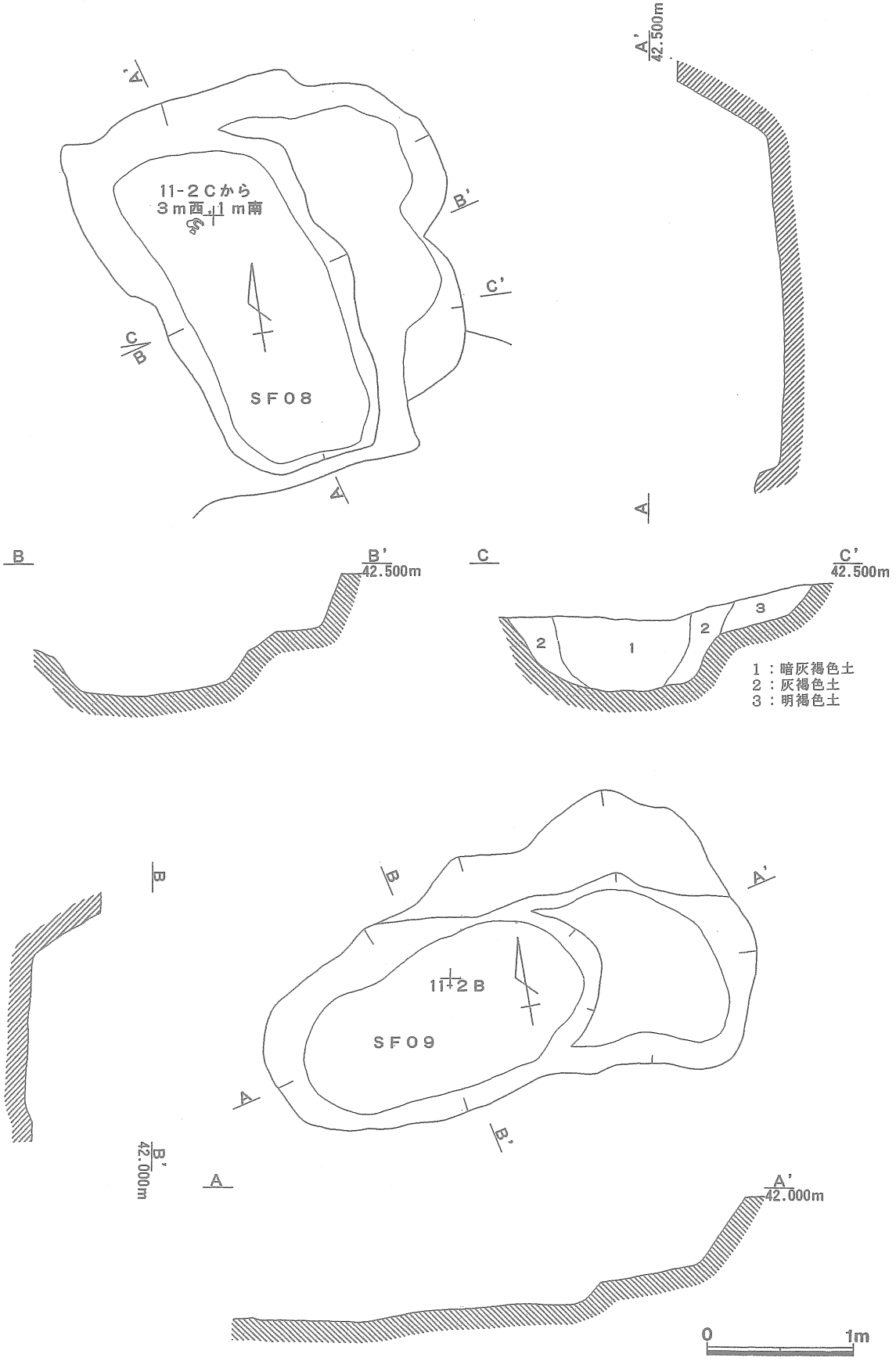
第10図　かわらけ平面実測図



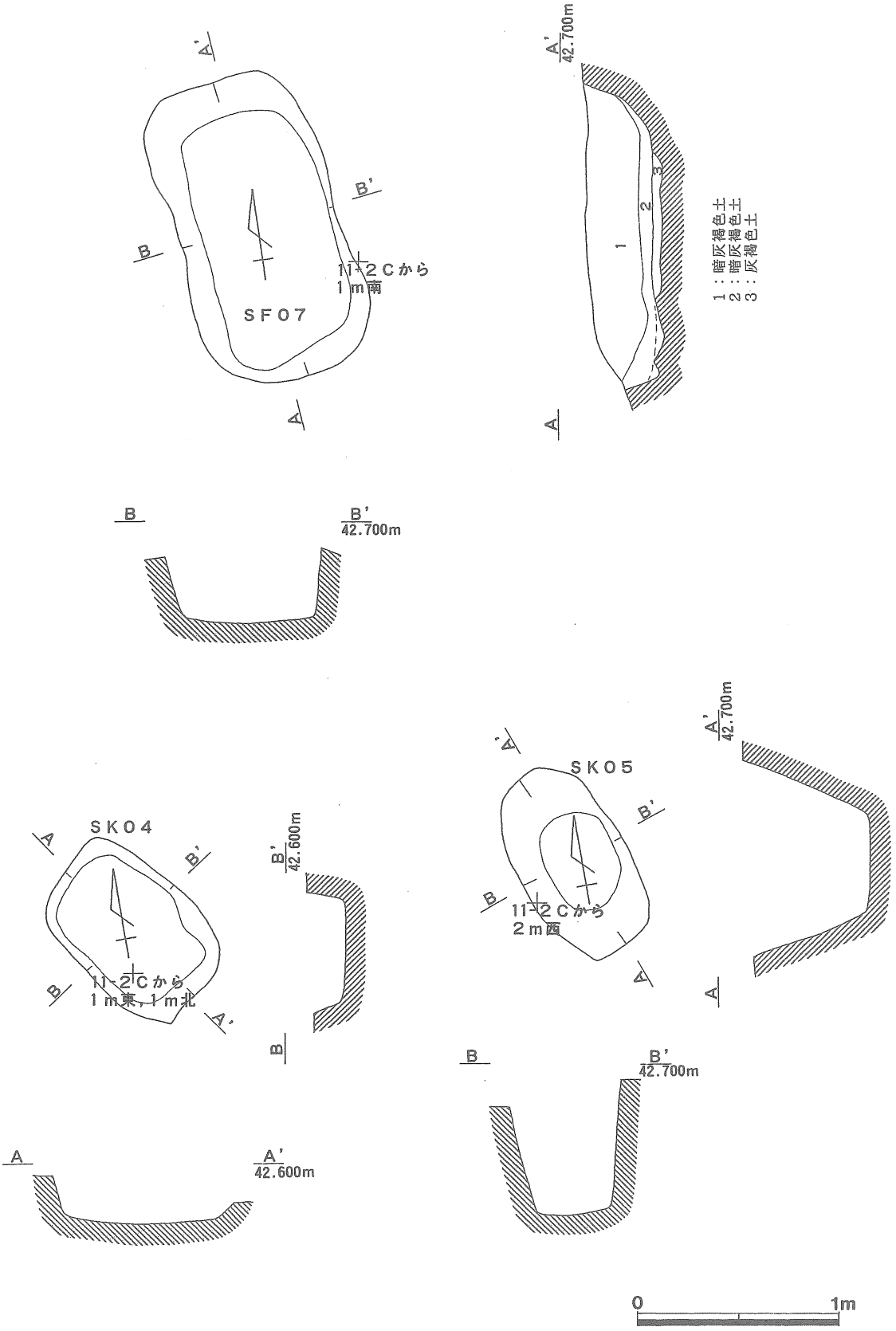
第11図　土坑墓群実測図



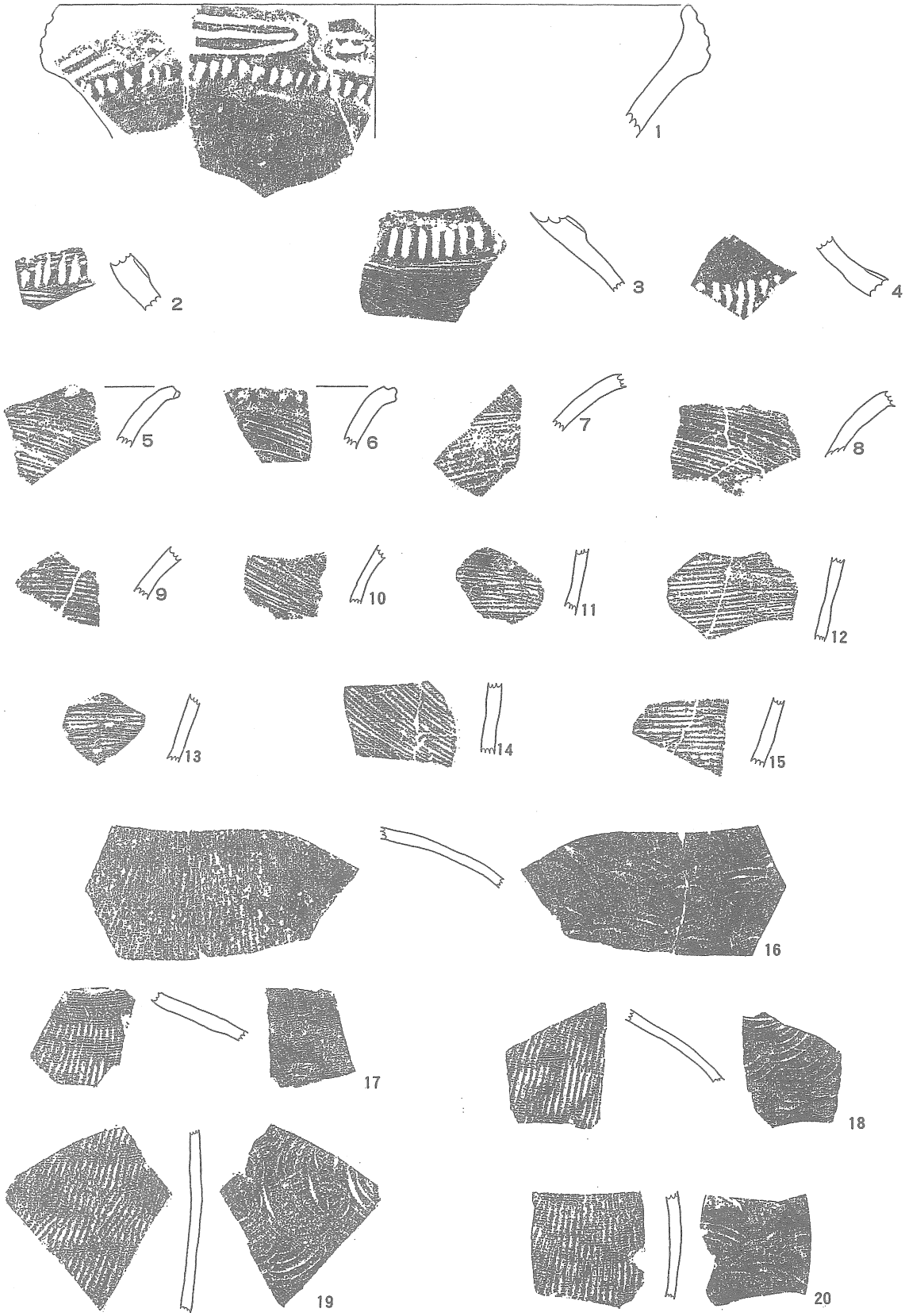
第12図　SF04・SF05・SF06・SK06実測図



第13図　ＳＦ０８・ＳＦ０９実測図



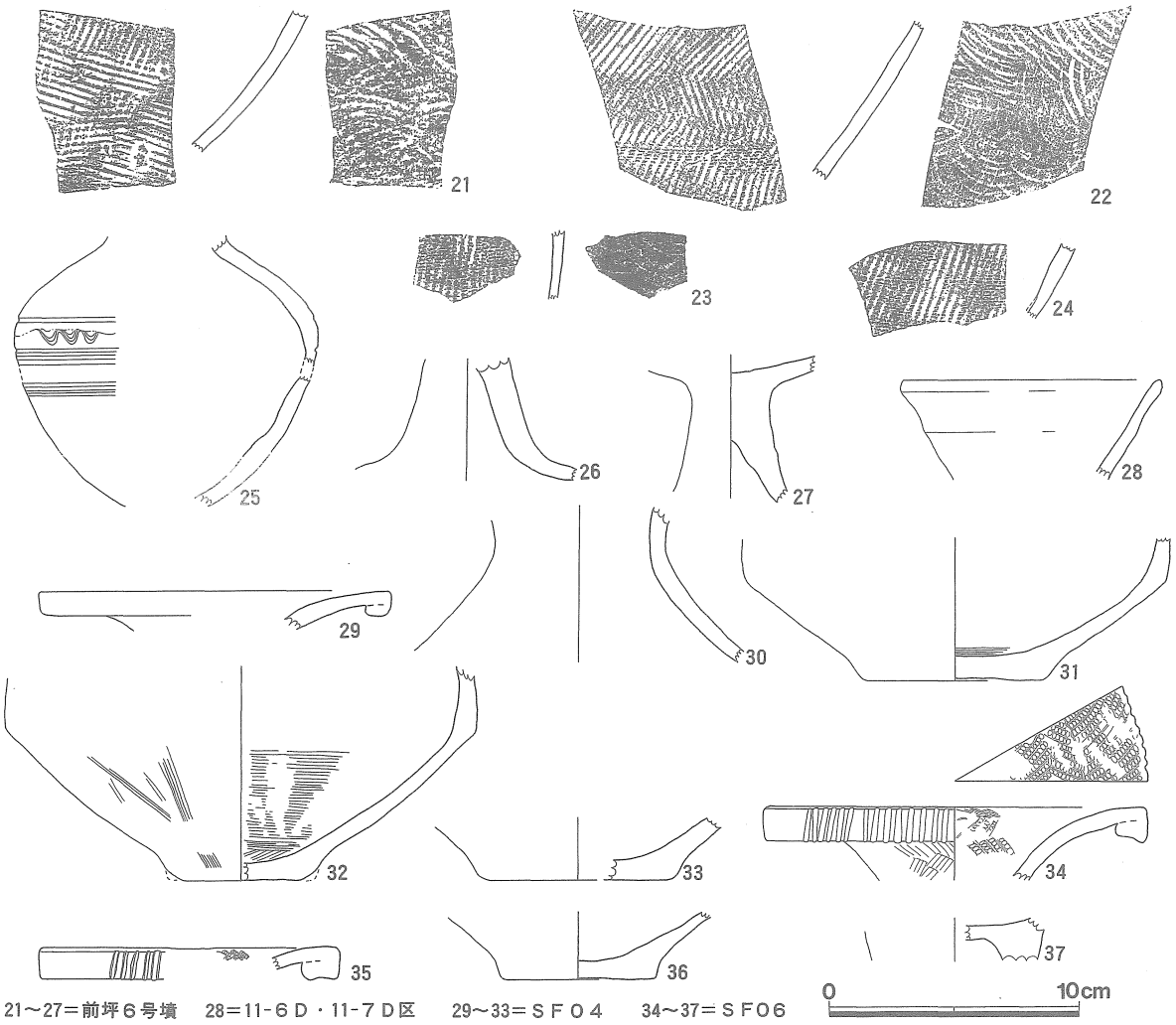
第14図　SF07・SK04・SK05実測図



1～4＝11-7Ｄ区
5～15＝11-6Ｄ・11-6Ｅ区
16～20＝前坪６号墳

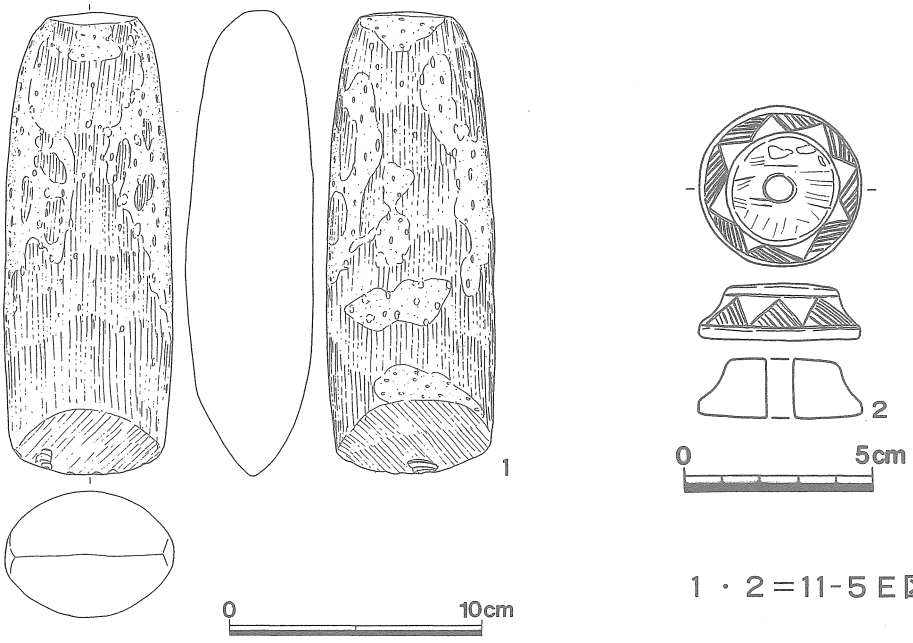
0　10cm

第15図　土器実測図(1)



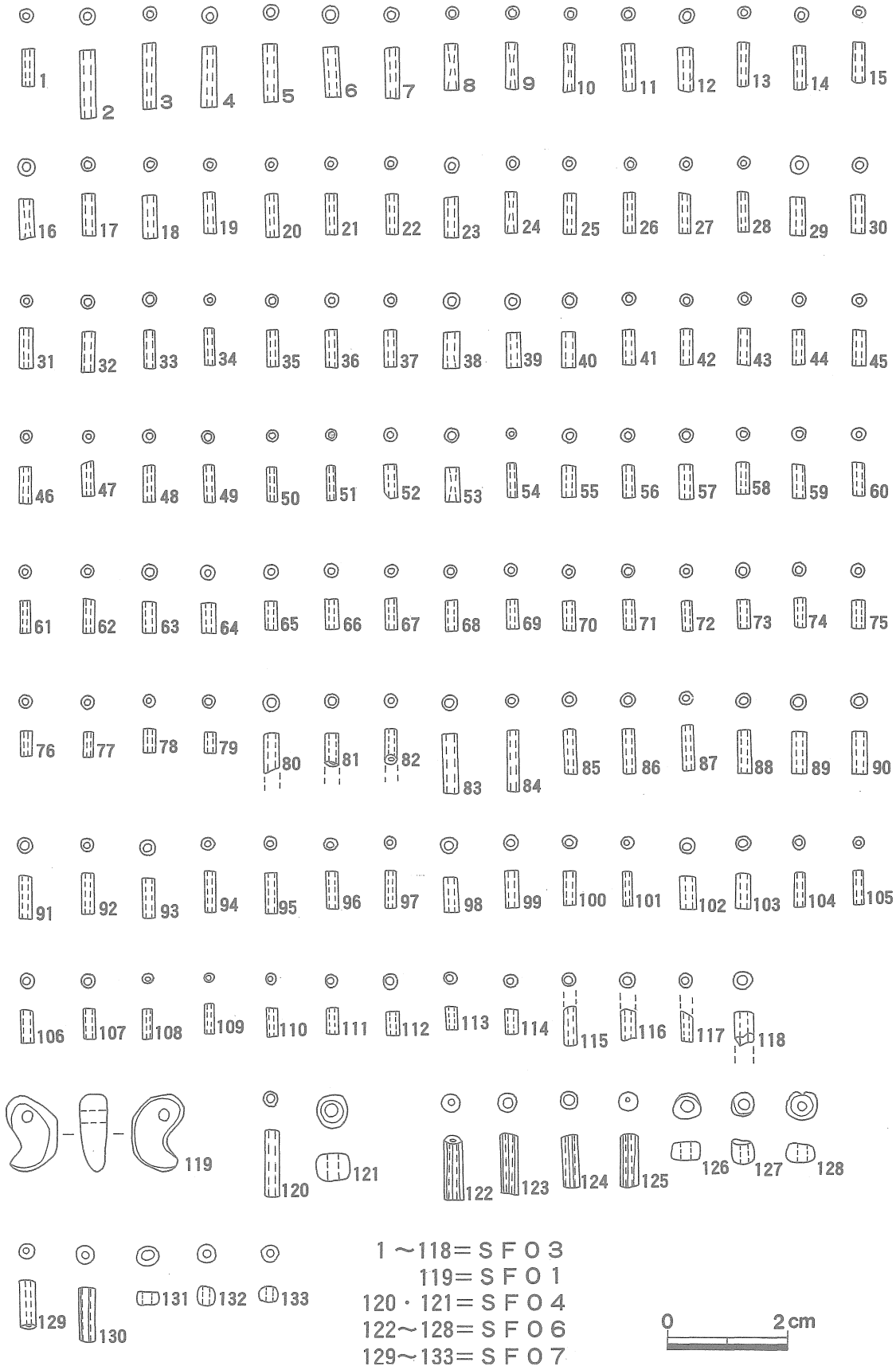
21～27＝前坪６号墳　28＝11-６Ｄ・11-７Ｄ区　29～33＝ＳＦ０４　34～37＝ＳＦ０６

第16図　土器実測図(2)

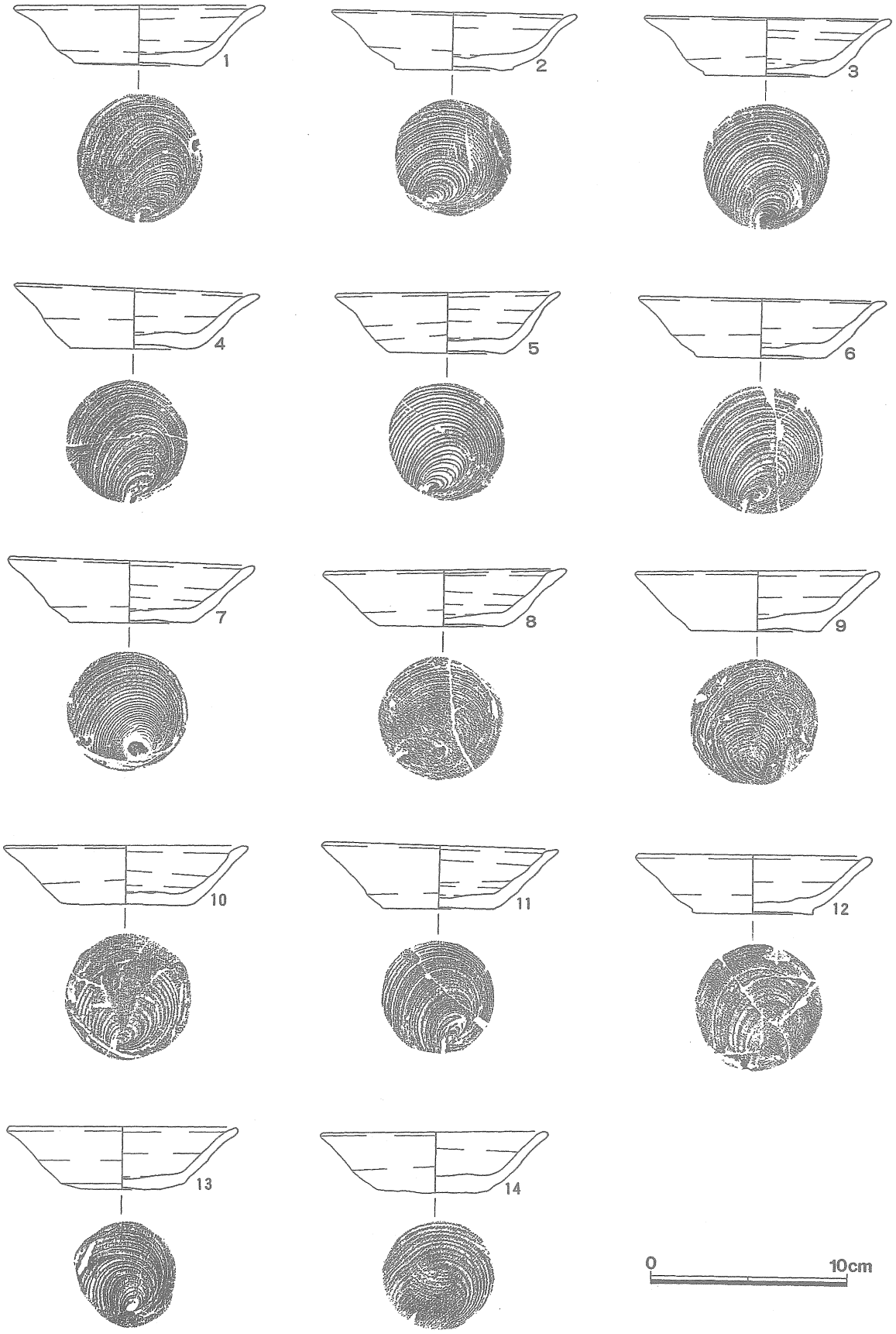


１・２＝11-５Ｅ区

第17図　石製品実測図

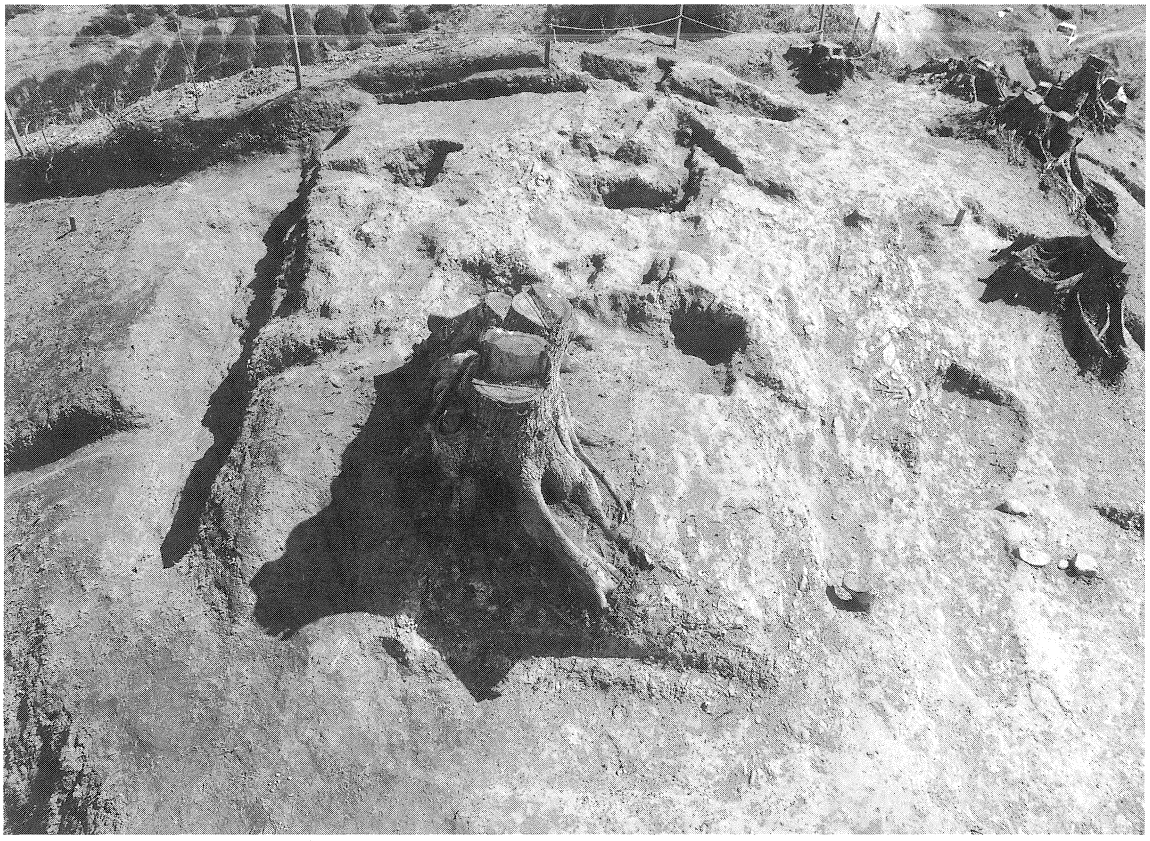


第18図　玉類実測図



第19図　かわらけ実測図

図版 1



ＳＳ０２全景（西から）

ＳＳ０３全景（東から）

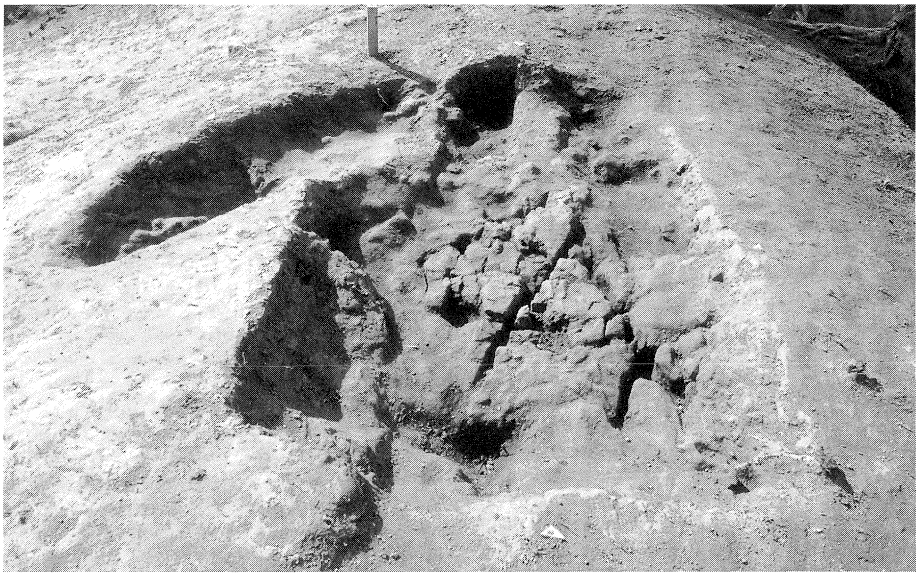
図版 2

土坑墓群全景（西から）

ＳＤ１０完掘（南から）

図版 3

SF01
（東から）



SF03・SK01
（東から）

SD02
（南から）

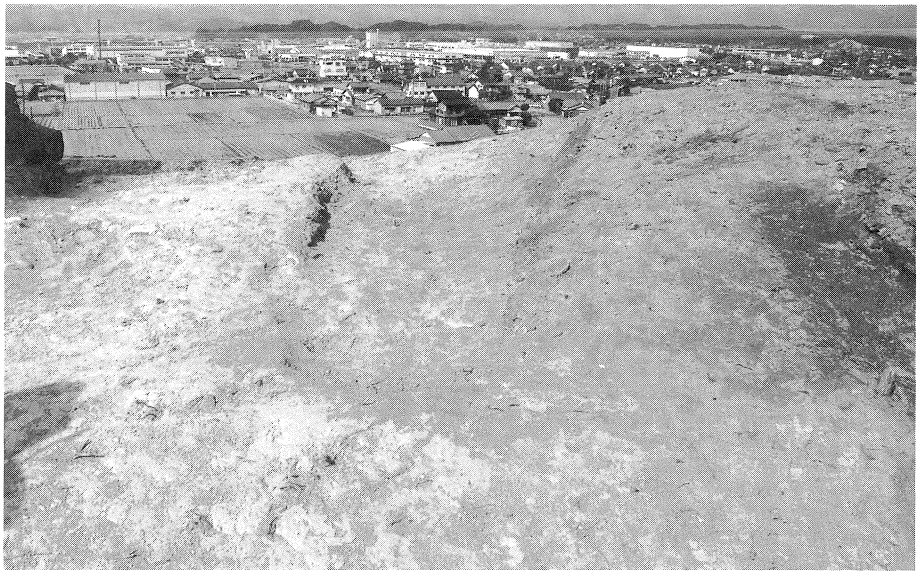
図版 4

SD03
（西から）

SD04
（西から）

SD05
（南から）

図版 5

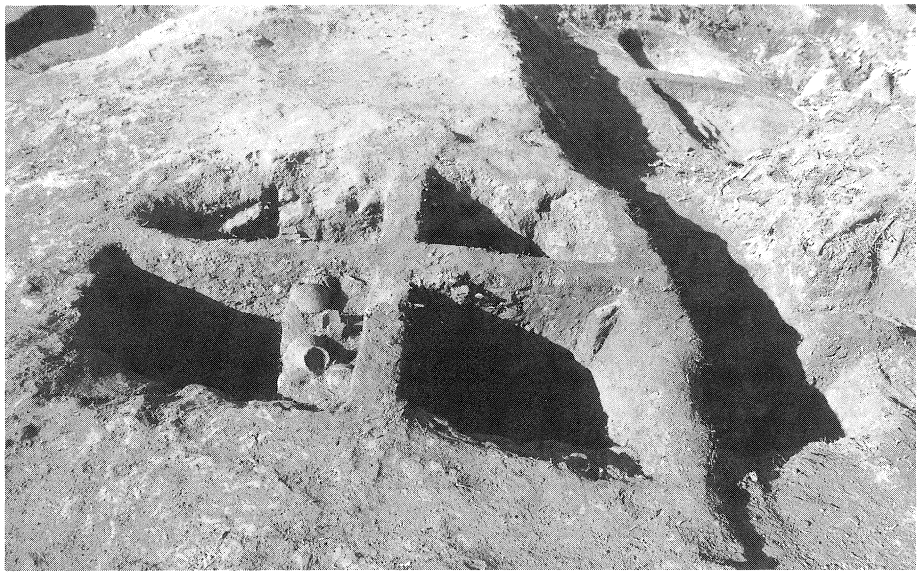


SD07
（南から）

SK02・SK03
（北から）

かわらけ出土状況
（東から）

図版 6



ＳＦ０４遺物出土状況
（東から）

ＳＦ０４完掘
（北から）

ＳＦ０５
（西から）

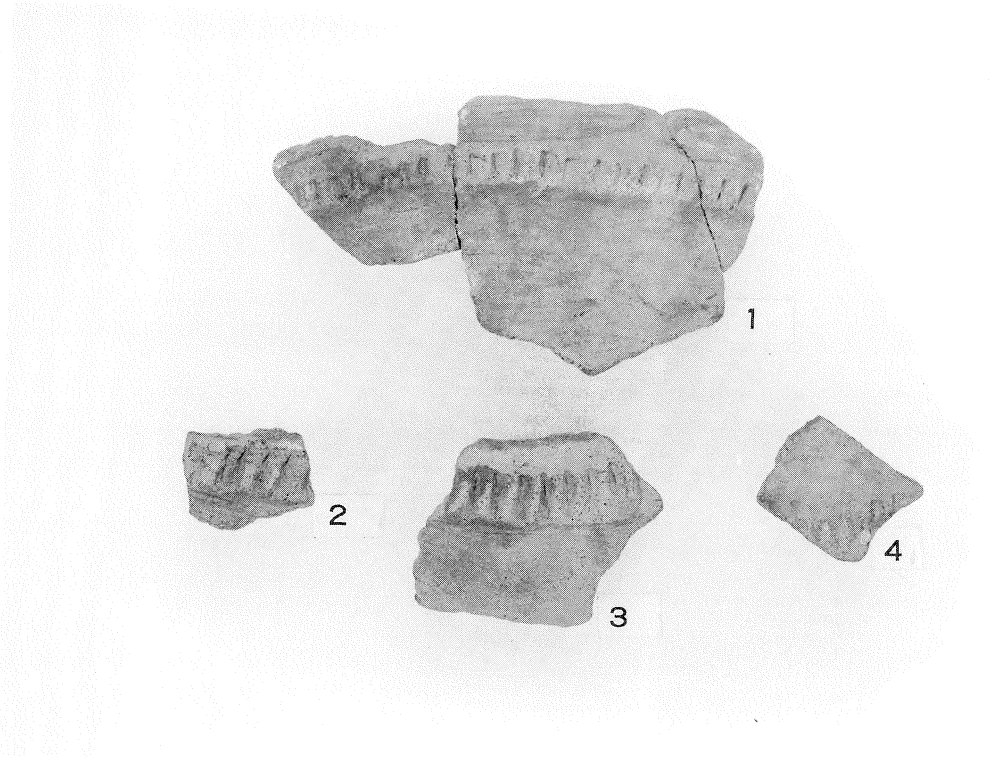
図版 7

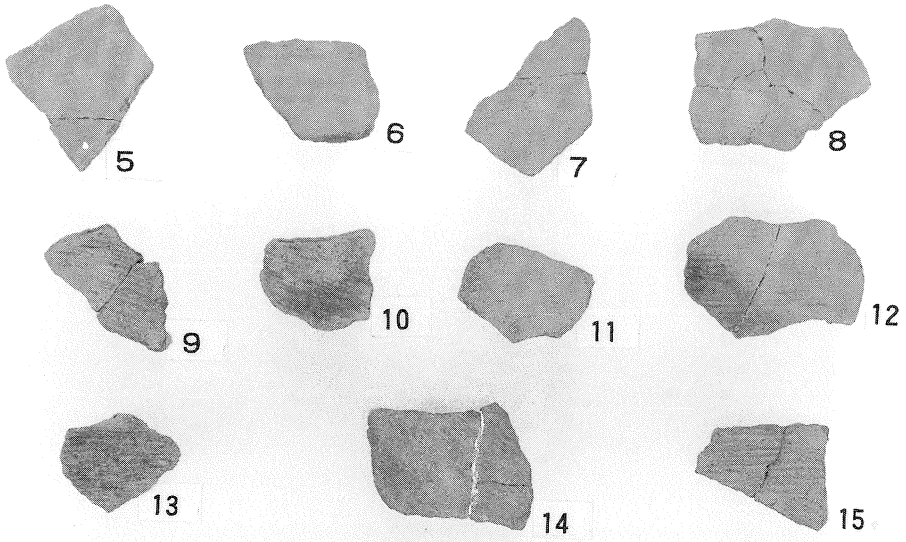
SF07
（南から）

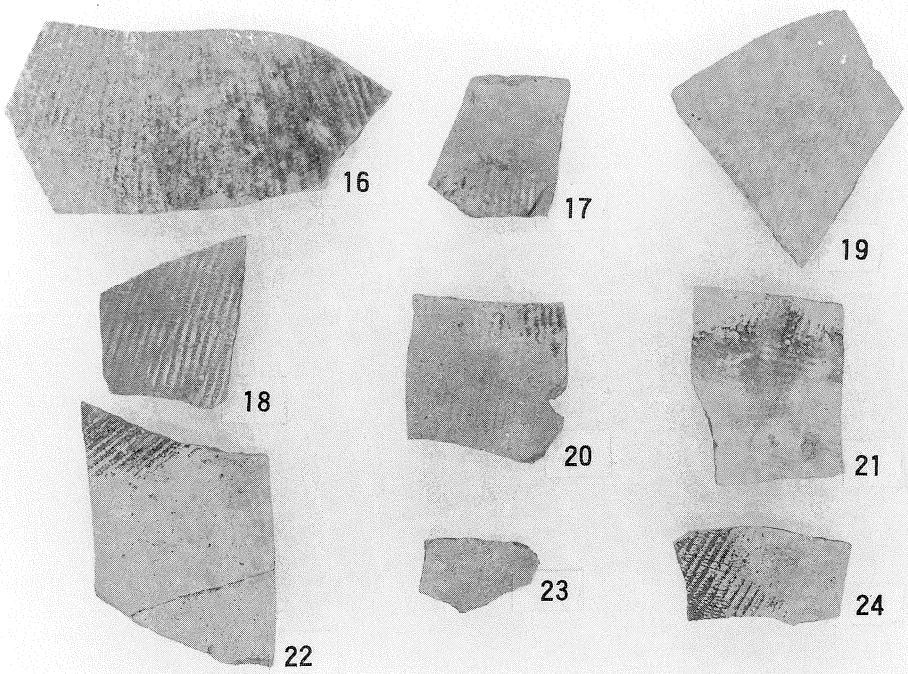
SF06・07・SK04
（東から）

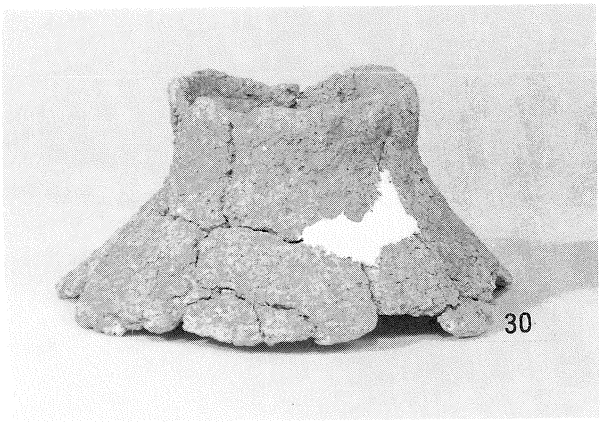
SF08
（東から）

図版 8

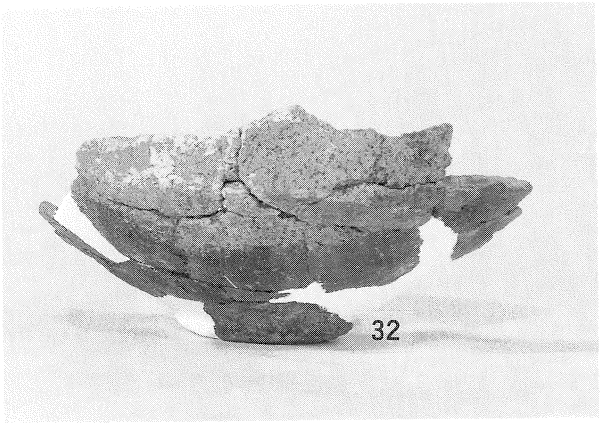





16
17
19
18
20
21
22
23
24


30

31


32

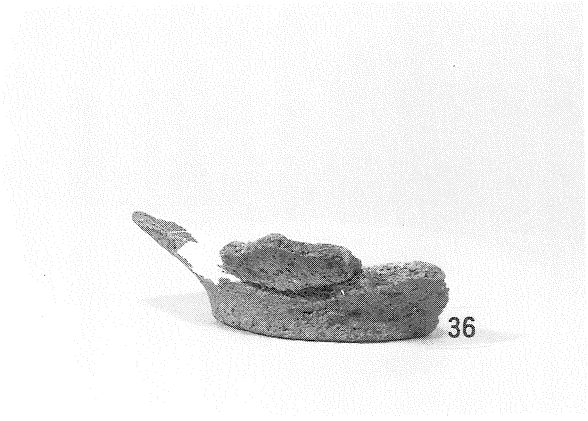

36

図 版 10

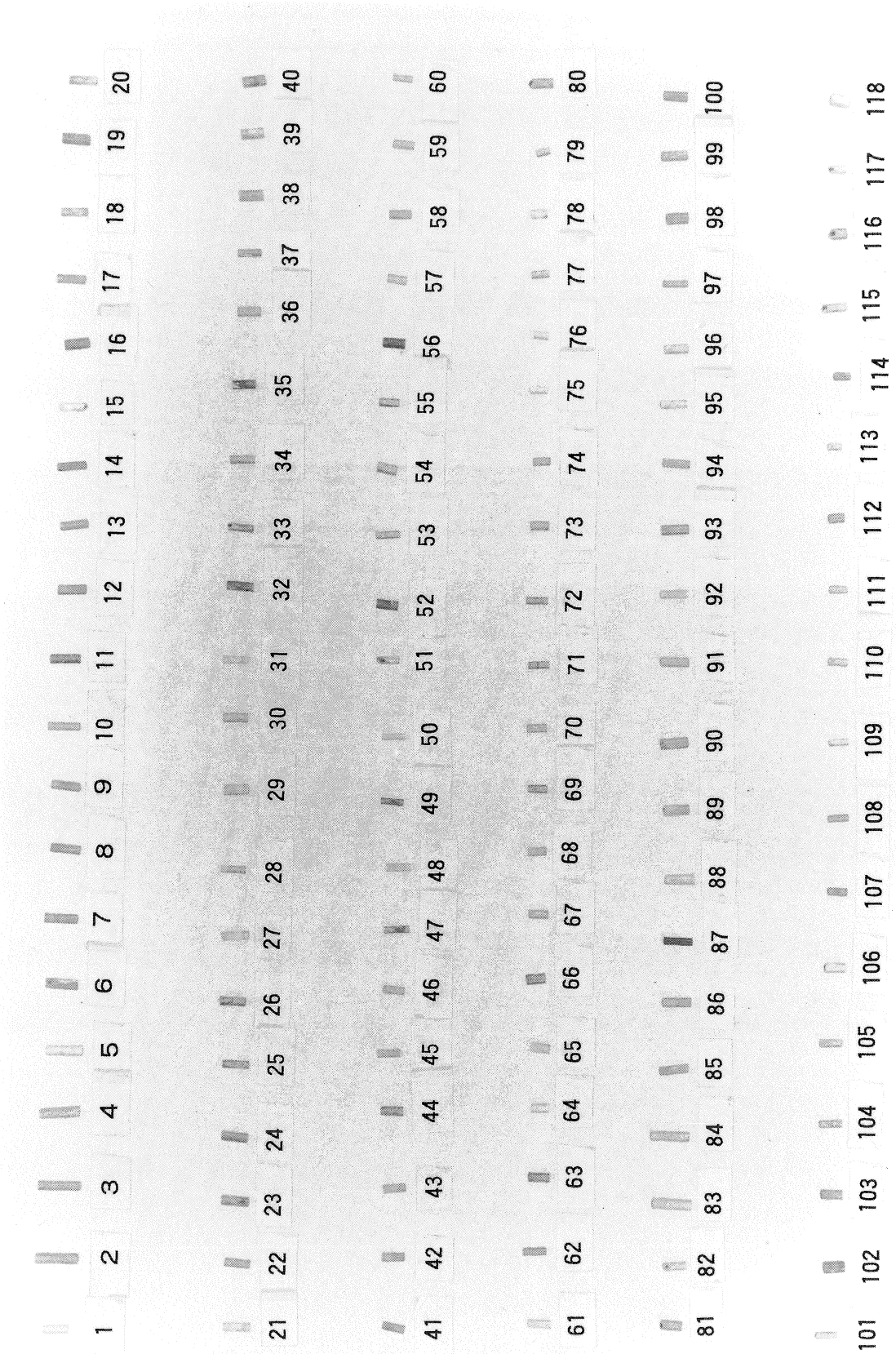
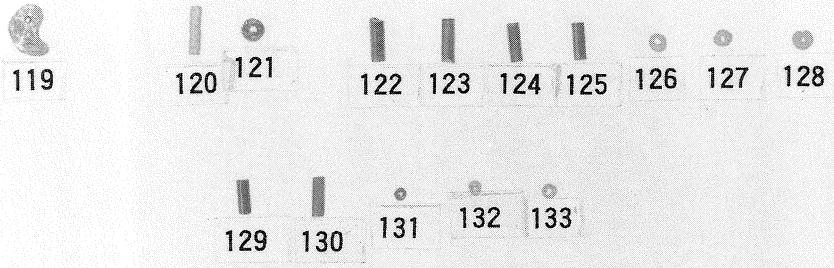
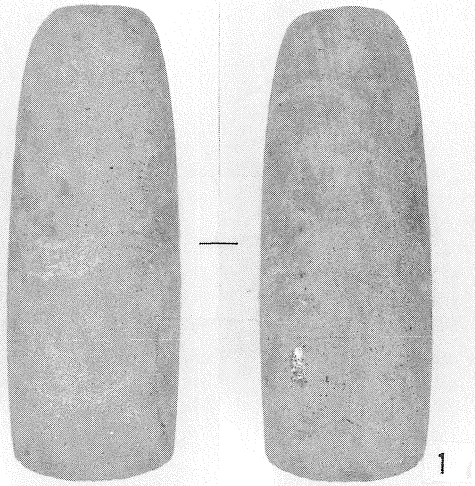

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40
41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60
61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80
81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100
101 102 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112 113 114 115 116 117 118

図 版 11





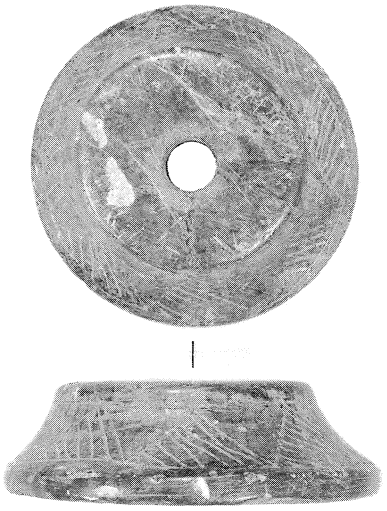
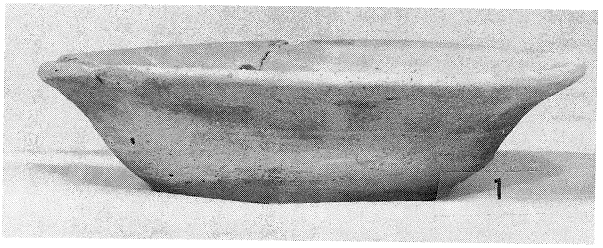
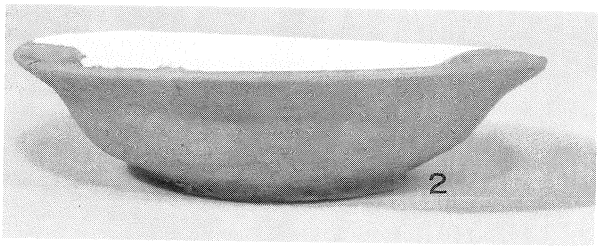
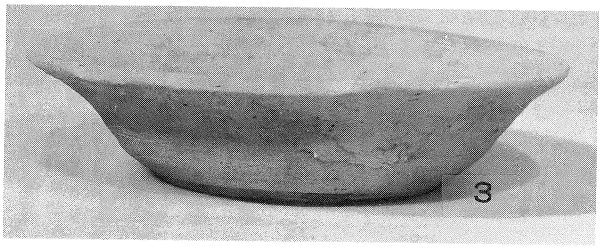
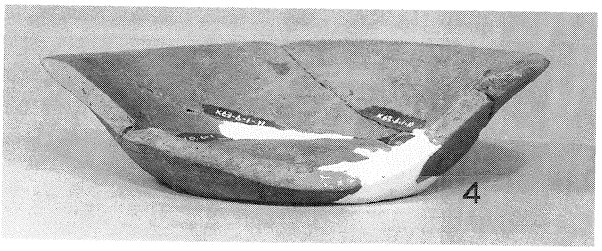


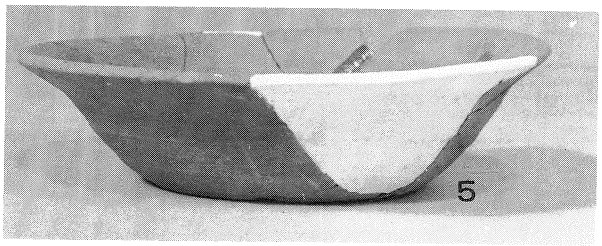
図 版 12

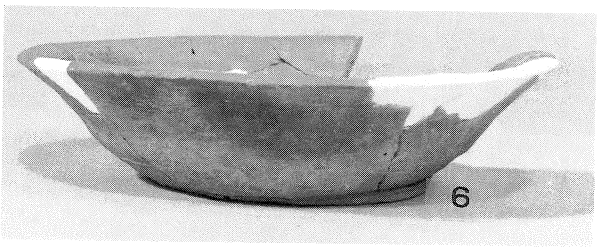

1

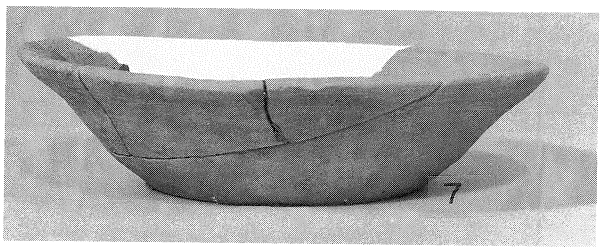

2

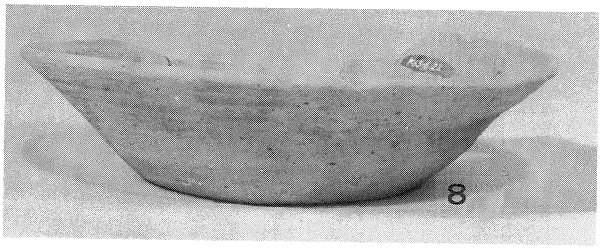

3

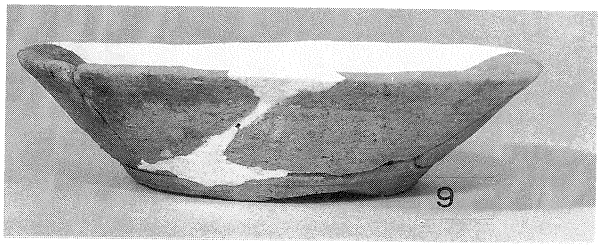

4

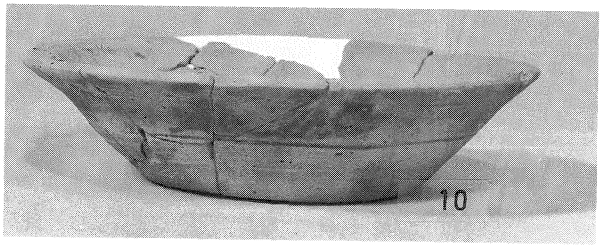

5

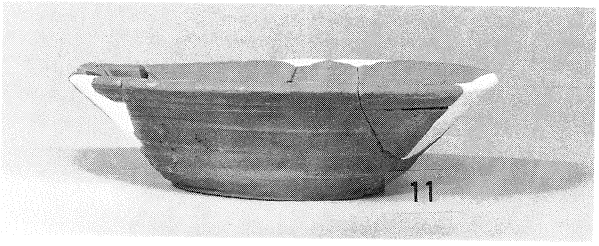

6

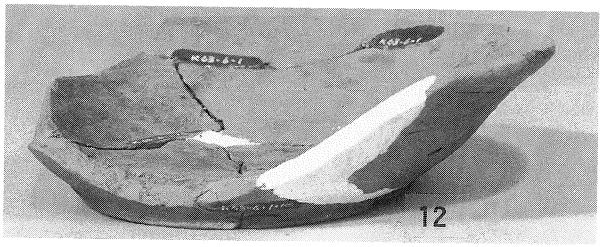

7

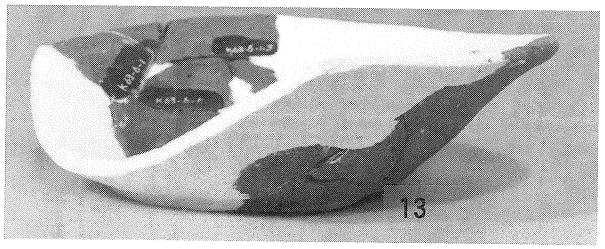

8

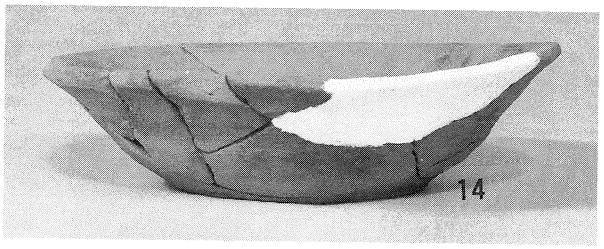

9


10


11


12


13


14

Ⅶ　本村横穴墓群Ｅ群

1. 調査の概要

この横穴墓群は、南面する丘陵斜面に築かれた３基から成る横穴墓群である。本村遺跡掘削時の重機進入路造成に伴う切り土中に２号墓の墓道がかかり、存在が明らかとなった。

横穴墓３基の実測は、それぞれ主軸に合わせて行った。横穴墓の図面は、20分の１の縮尺で、微細図を10分の１で作成した。写真撮影は、６×７カメラ１台と35㎜カメラ２台（カラーフィルム用とカラーリバーサル用）を用いた。平成８年１月23日から３月31日まで、現地調査を行った。

2. 遺構の概要

ドーム形２基と尖頭形１基の計３基から成る横穴墓群であるが、それぞれ単独で築かれている。

１号墓（第２図・第３図）

位置　丘陵頂部から９ｍほど下がった所、２号墓より約３ｍ高い所に位置する。

玄室　規模は、長さ1.90ｍ、幅2.63ｍ。天井の高さは現状1.35ｍを測るが、本来は1.15ｍ程度の天井の低い横穴墓であったと推定される。主軸方位は、Ｎ－27°－Ｗを測る。玄門は、幅50㎝、現状の高さ90㎝、本来は80㎝程度と推定される。横断面・縦断面とも緩やかに弧状を描く、ドーム形横穴である。中央と両側壁に沿って幅15㎝、深さ５㎝、断面［Ｖ］の排水溝が掘られ、墓道まで続いている。工具痕は、断面が多角形を呈する鑿状のもの、幅９㎝以上の刃先が少し湾曲するものが顕著に残る。

埋葬施設　埋葬施設はなく、奥壁際中央右から歯が検出された。

副葬品　中央排水溝上から第７図－４が、中央玄門寄りから２・３が、中央左壁寄りから１・５・６の土器が出土した。また、鉄製品の破片が６の土器の北側から出土している。

羨道　幅50㎝ほど、長さ40㎝の短羨道である。羨門の掘り方に、幅20㎝、長さ69㎝、深さ６㎝の溝が掘られている。この溝と符号するように羨門側壁には、12㎝の段差が付けられている。木板をはめ込むための施設の可能性があるが、検出された閉塞は、閉塞石で、羨道から羨門にかけて積まれていた。使用されていた礫は、15㎝から30㎝の大きさで、小口積みと横口積みが併用され、高さ80㎝まで遺存していたが、羨門天井近くは盗掘によると考えられる隙間があった。

墓道　長さ4.28ｍを確認できた。幅は、上端で1.50ｍ、下端で80㎝前後、羨門付近は幅を広げ1.05ｍを測る。羨門から45㎝ほどまではほぼ水平であるが、そこから先端にかけて約20°の傾斜が付く。第７図－７～９は、墓道出土であるが、８・９はかなり浮いた状態であった。

２号墓（第４図）

位置　丘陵斜面の張り出した場所に穿たれている。

玄室　規模は、長さ1.10ｍ、幅2.02ｍ、天井高さ92㎝を測り、隅丸長方形を呈する。きわめて天井の低い扁平は横穴である。主軸方位は、Ｎ－31°30′－Ｗを測る。玄門は、幅70㎝、天井は崩落していて高さは明らかではない。横断面・縦断面とも緩やかに弧状を描く、ドーム形横穴である。工具痕は、断面が円形を呈するものが顕著で、幅２㎝前後の平鑿状の工具痕も少し残る。

埋葬施設　埋葬施設はない。

副葬品　玄室中央奥壁寄りから刀子が、右壁の奥壁寄りから第８図－９の砥石が鉄製品とともに出土した。第８図－１の石製臼玉は流入した土の中から出土したもので、本横穴に伴う確証はない。

羨道　幅50㎝ほど、長さ55㎝の短羨道である。羨門には、幅83㎝、奥行12㎝の段が付けられていて、

この部分の掘り方に接して幅25㎝、長さ90㎝の泥層を切ったブロックが置かれていた。礫は全く検出されていないことから、この泥層のブロックを積んで閉塞をしていた可能性が高い。

墓道　長さ1.2mを確認できた。幅は、上端で1.70m、下端で95㎝を測る。羨門から25㎝ほどまではほぼ水平であるが、そこから傾斜が付く。

3号墓（第5図・第6図）

位置　1号墓と25mほど離れた所に穿たれている。

玄室　規模は、長さ2.98m、最大幅3.15m、天井高さ2.50mを測り、隅丸方形を呈する。主軸方位は、N－45°30′－Eを測る。中央から玄門寄りの天井は崩落していて、玄門の幅と高さは明らかではない。奥壁と側壁の接点、天井と奥壁の接点に稜が付く典型的な尖頭形横穴である。工具痕は、幅2㎝の平鑿状の工具痕が顕著で、幅8㎝以上の刃先が少し湾曲するものも残る。

埋葬施設　玄室中央から玄門にかけて出土した遺物の大半が10㎝以上掘り方から浮き、さらに掘り方に凹凸ができるほどひどい盗掘を受けている。礫床は存在しなかった可能性が高いが、棺台石等については不明である。

副葬品　玄室内から土器・玉類・鉄製品・鉄地金銅貼馬具等が出土したが、盗掘により散乱した状態であった。第7図－10・15・17・18の出土状況は掘り方に密着ないし密着に近い状況であったが、原位置を保っているかは不明である。

羨道　幅約1.05m、長さ3.05mの長羨道で、高さは崩落により1.7mほどあるが、本来は1.3m前後と推定される。右壁沿いの掘り方が窪んでいるが、これは排水を意識したものと考えている。閉塞は、羨門から45㎝ほどの所から奥に10㎝から35㎝の大きさの礫を80㎝の高さで小口積みしていたが、最上段の礫の上が50センチほど空いていた。また最上段の礫の上に第7図－14の坏身が置かれていたが、これらは盗掘の所業によると思われる。羨門の左右に幅50㎝から70㎝、高さ25㎝の突起状のものが削り出しにより造られていた。

墓前域　長さ5.9m、上端の幅5.6m、下端の幅4.65mを測り、中央は墓道状に窪んでいた。これほど巨大な墓前域は、市内の横穴墓では他に例がない。

3. 遺物の概要

遺物は、1号墓から鉄製品・土器、2号墓から刀子・鉄製品・砥石、3号墓から鉄製品・鉄地金銅貼馬具・土器・玉類等が出土している。鉄製品・鉄地金銅貼馬具については、未整理の状況であり来年度報告することとし、今回は土器・玉類・砥石について概述する。

土器（第7図）

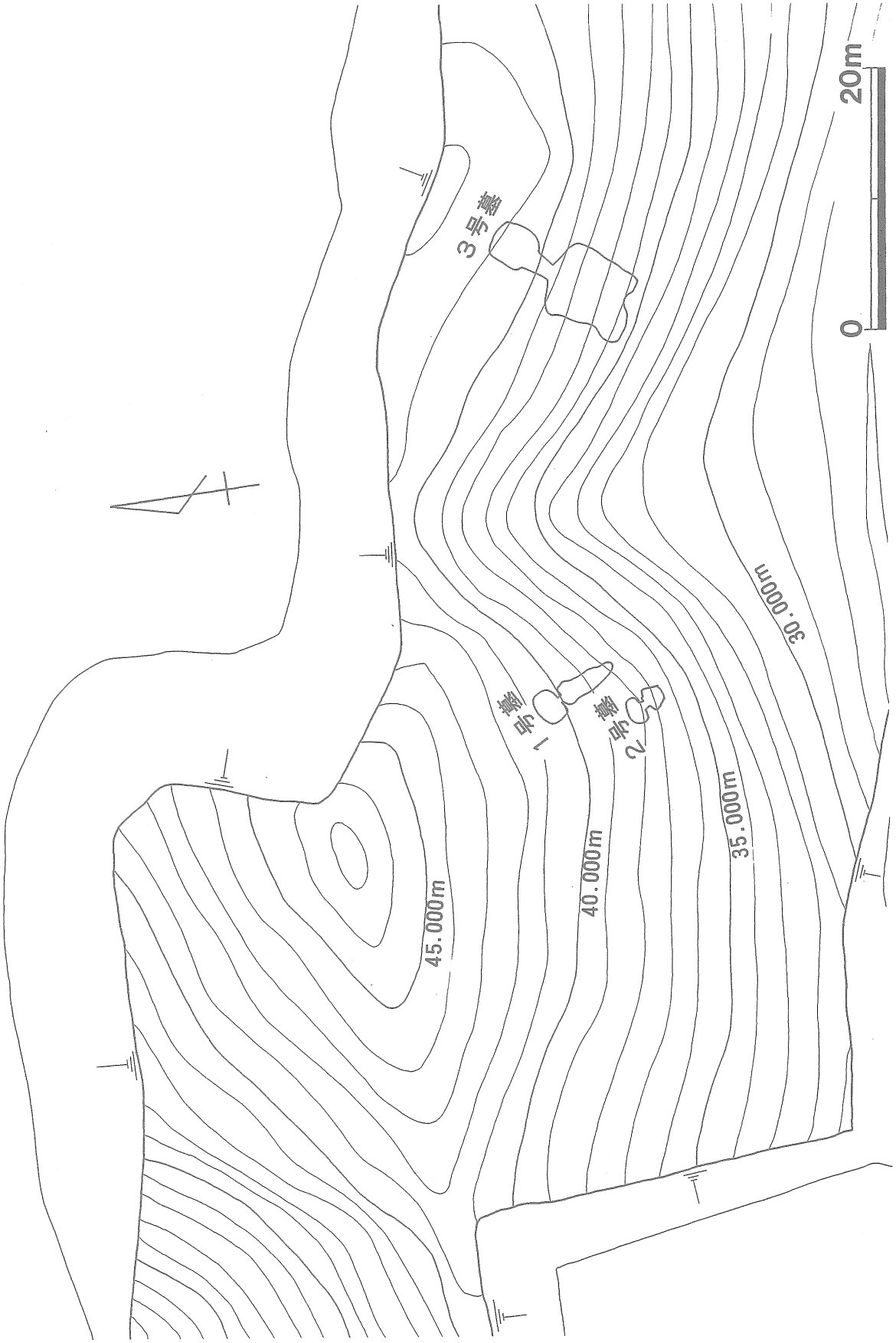
5の土師器を除き、須恵器である。4の瑳は、口縁部外面と体部の沈線の下にカキ目調整を施す。5の土師器壺の外面底部近くには縦方向のハケ目が、内面には横方向のハケ目が付く。6の埦の体部外面には沈線が施される。18の脚付き埦は、沈線により区画された文様帯があり、波状文が巡る。19の平瓶の肩には円錐形をした貼付文がある。

玉類（第8図）

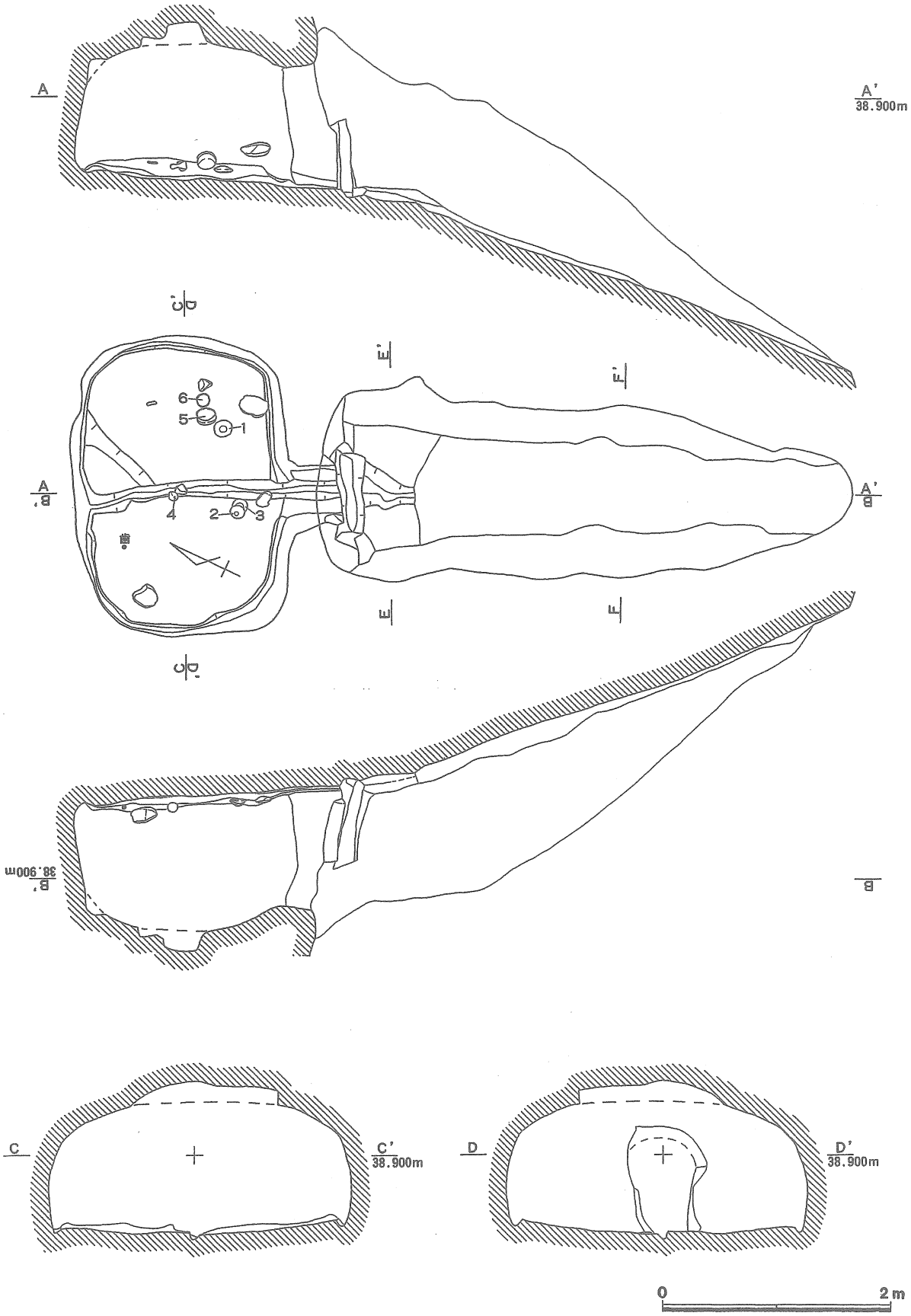
1は白色をした石製臼玉、2～4は水晶製切子玉、5は山脇横穴群2号墓出土の石製勾玉・丸玉と同じ石材の玉、6～8はガラス小玉で、6・7は劣化して白色を呈し、8は黄緑色を呈する。

砥石（第8図）

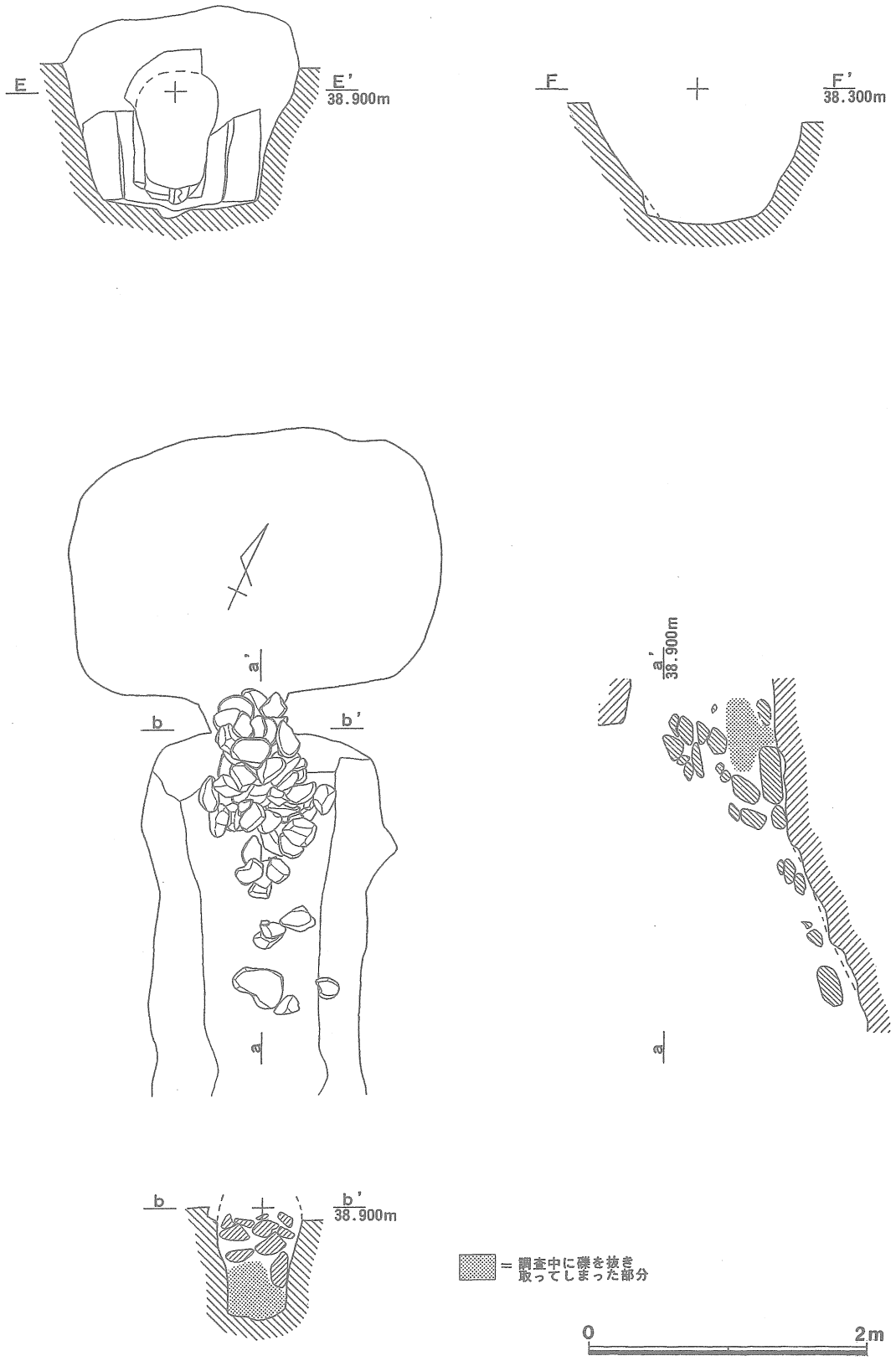
9は砂岩製の厚さ1㎝の扁平な砥石で、全面使用されている。



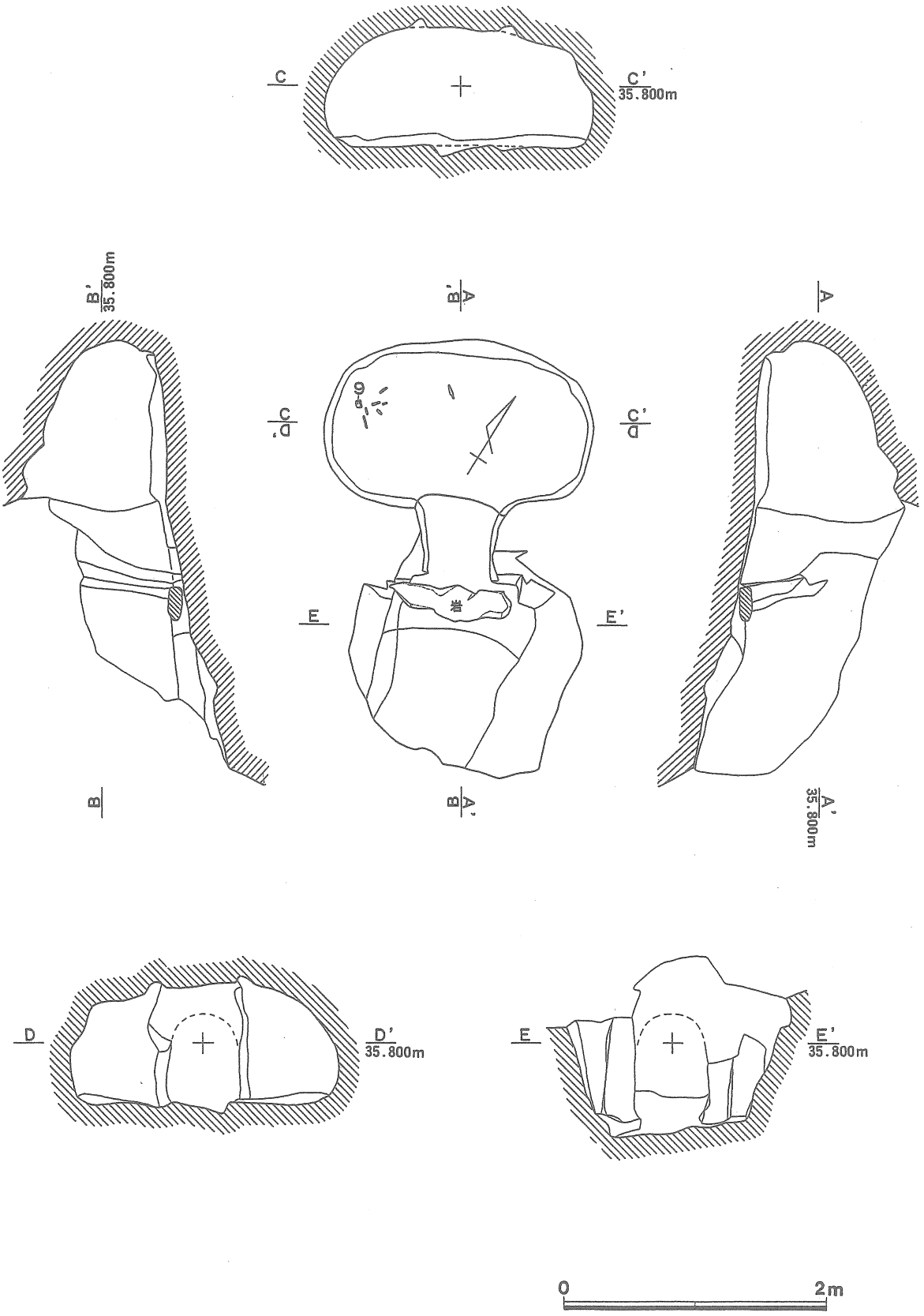
第１図　位置図


A
A'
38.900m
D
D'
E
E'
F
F'
B
B'
38.900m
A
A'
B
B'
1
2
3
4
5
6
C
C'
38.900m
D
D'
38.900m
0
2m

第２図　１号墓実測図(1)

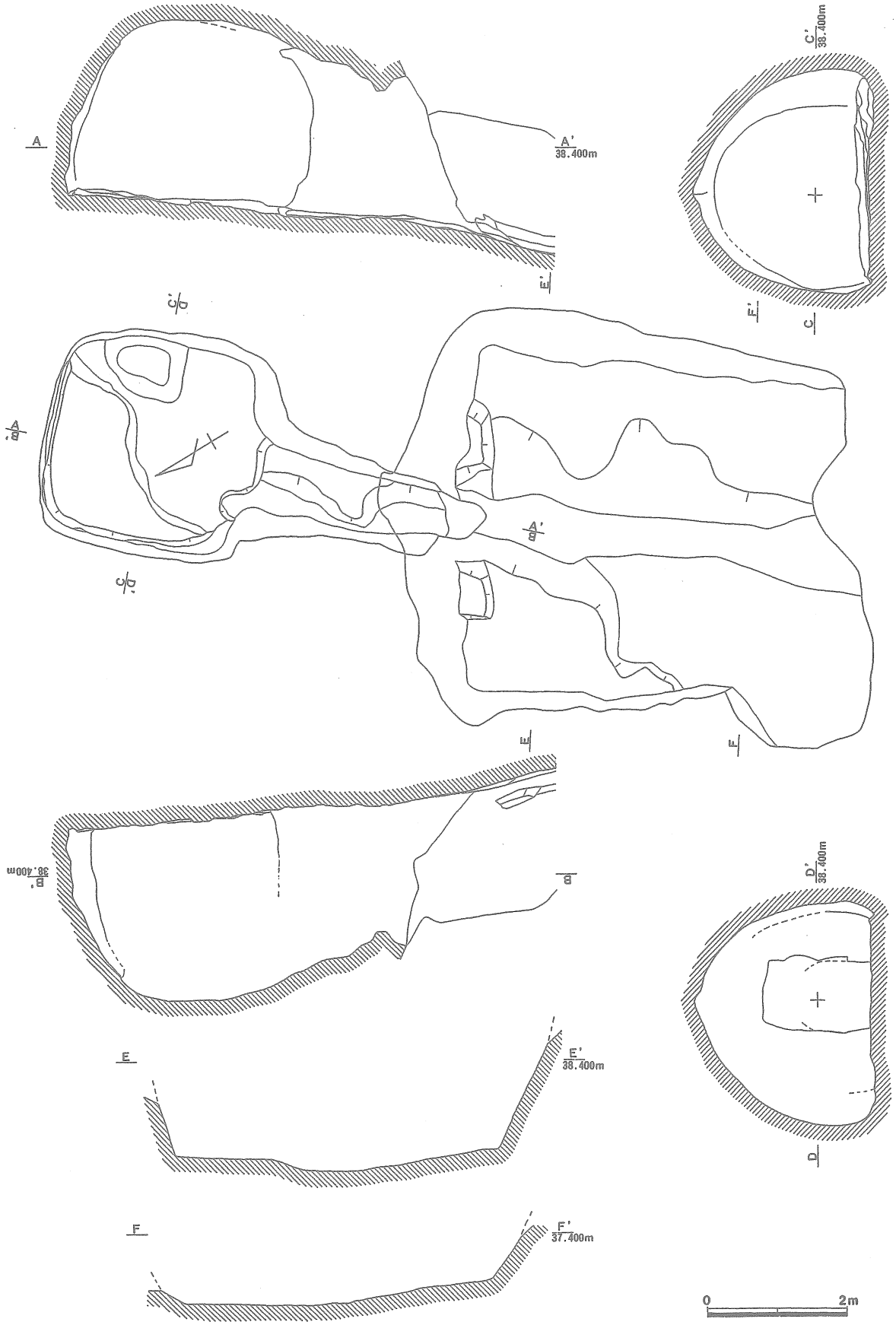

E
E'
38.900m
F
F'
38.300m
a'
b
b'
a
a'
38.900m
a
b
b'
38.900m
= 調査中に礫を抜き
取ってしまった部分
0
2m

第３図　１号墓実測図(2)



第４図　２号墓実測図

第５図　３号墓実測図(1)


A
A'
38.400m
E'
C'
38.400m
F'
C
A'
B
A'
B
E
E
B'
38.400m
B
D'
38.400m
E
E'
38.400m
D
F
F'
37.400m
0
2m

第６図　３号墓実測図(2)

1～6＝1号墓玄室内
7～9＝1号墓墓道
10～13・15～19＝3号墓玄室内
14＝3号墓羨道内

0　10cm

第7図　土器実測図

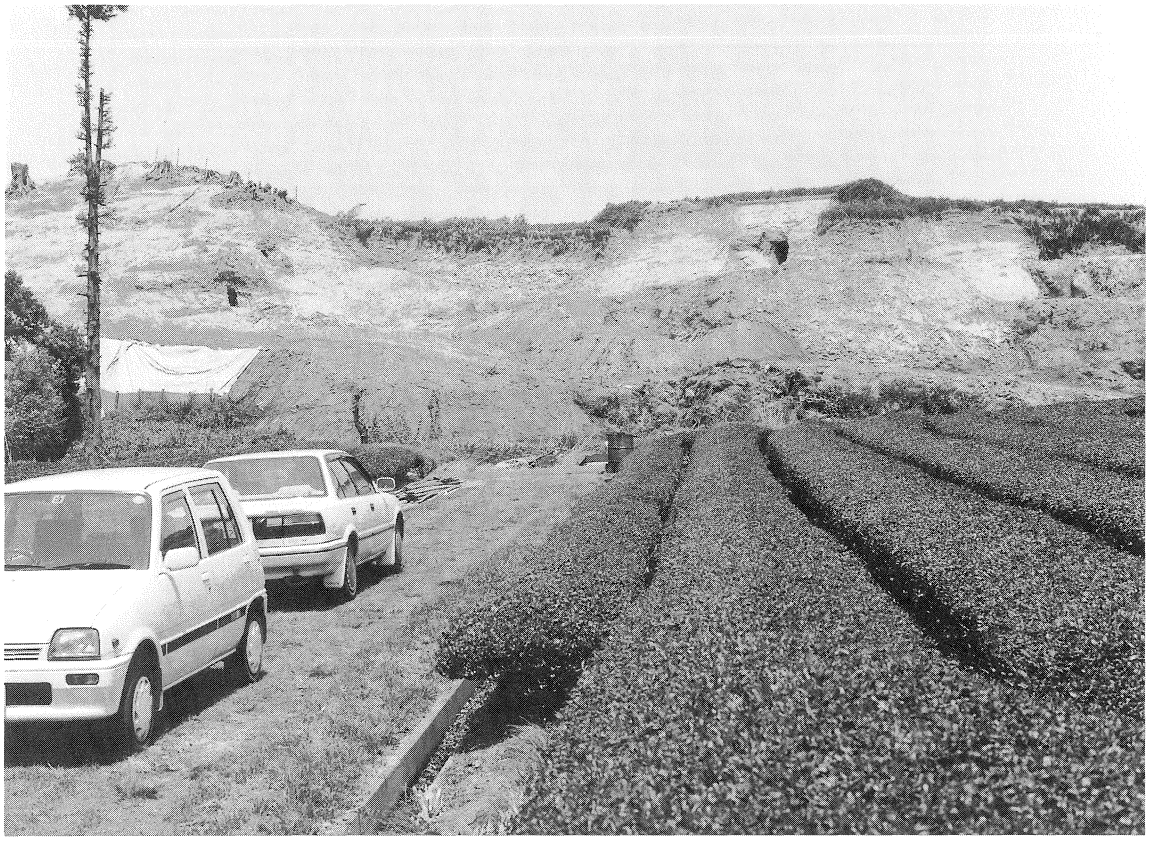
1・9＝2号墓
2～8＝3号墓

0　2cm

0　5cm

第8図　玉類・砥石実測図

図 版 1



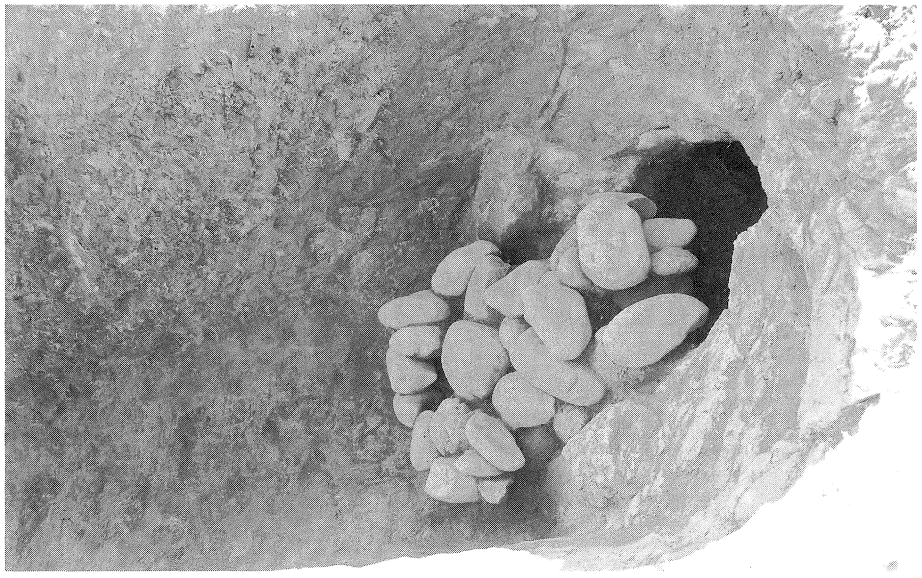
横穴墓群全景（南から）

1号墓・2号墓（南東から）

図版 2

1号墓玄室内
（右壁から）

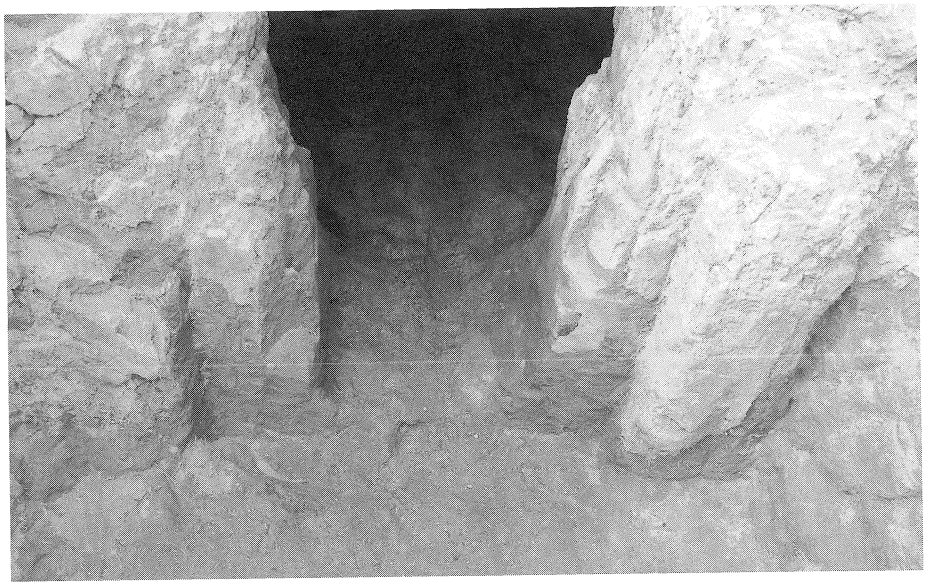
1号墓閉塞石検出状況
（東から）



1号墓羨門と閉塞石
（東から）

図版 3

1号墓羨門
（東から）

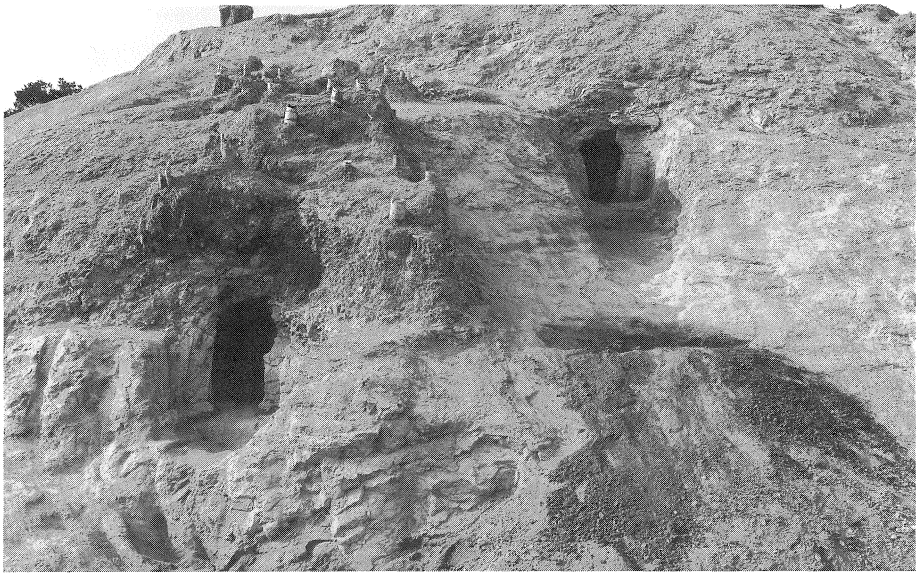


1号墓羨門
（南東から）

1号墓完掘
（南東から）

図版 4

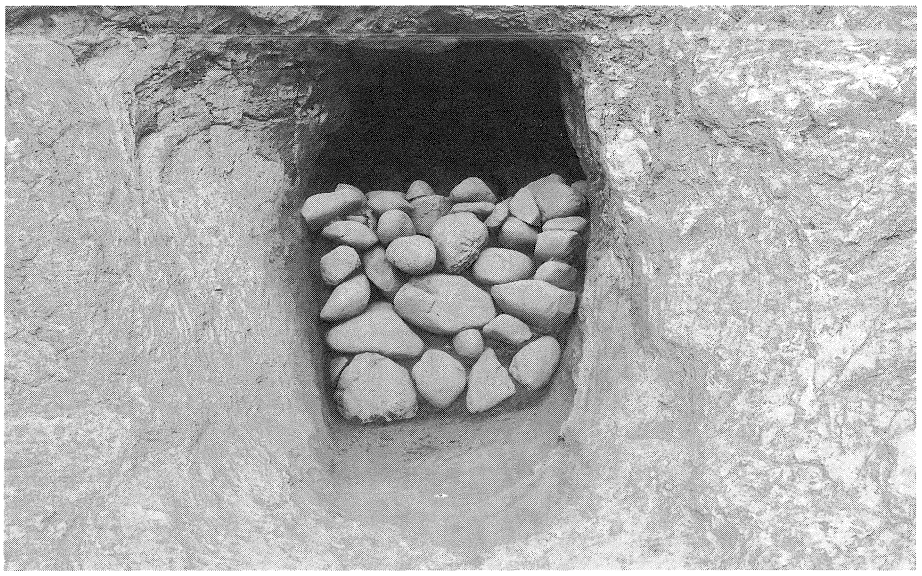
2号墓羨門
（南東から）



1号墓・2号墓完掘
（南東から）

3号墓玄室内
（玄門方向から）

図版 5

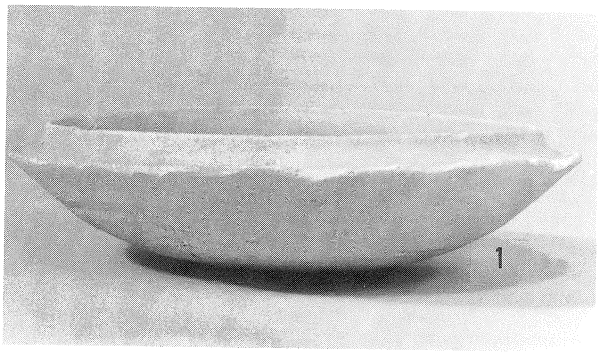


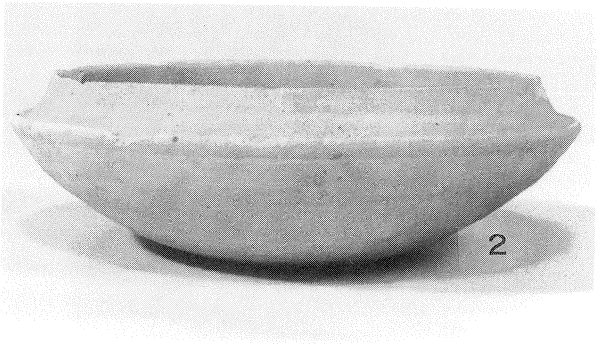
3 号墓閉塞石
（南西から）

3 号墓玄室完掘
（羨道から）

3 号墓墓前域完掘
（南西から）

図版 6

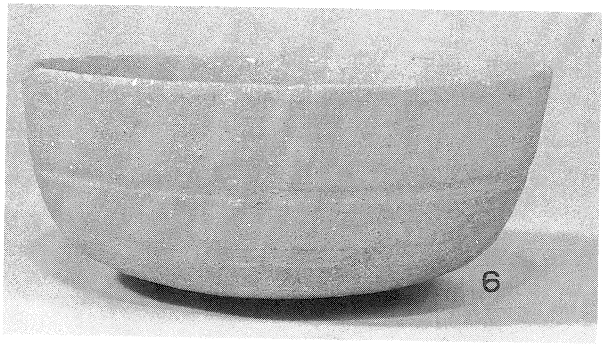

1

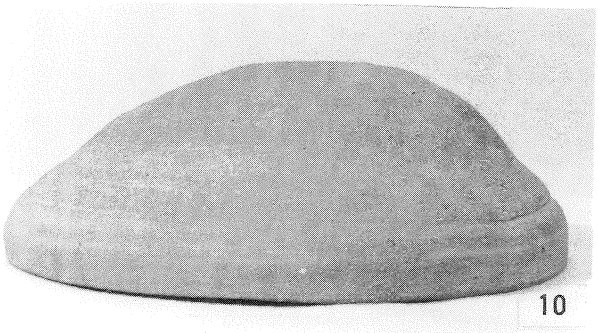

2

3

4

5


6


10

11

図版 7

12

13

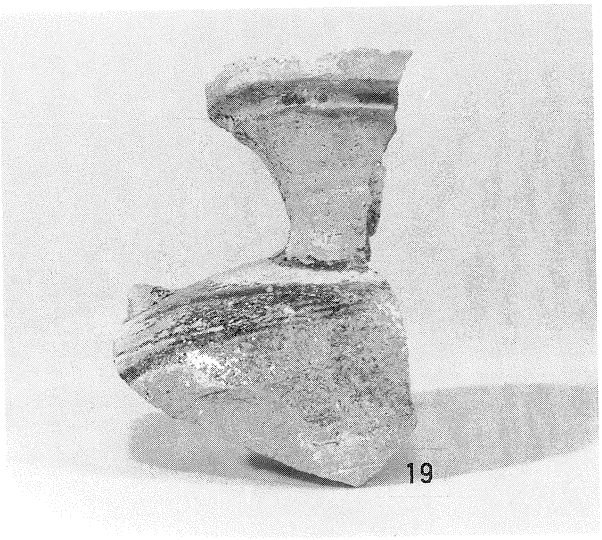
14

15

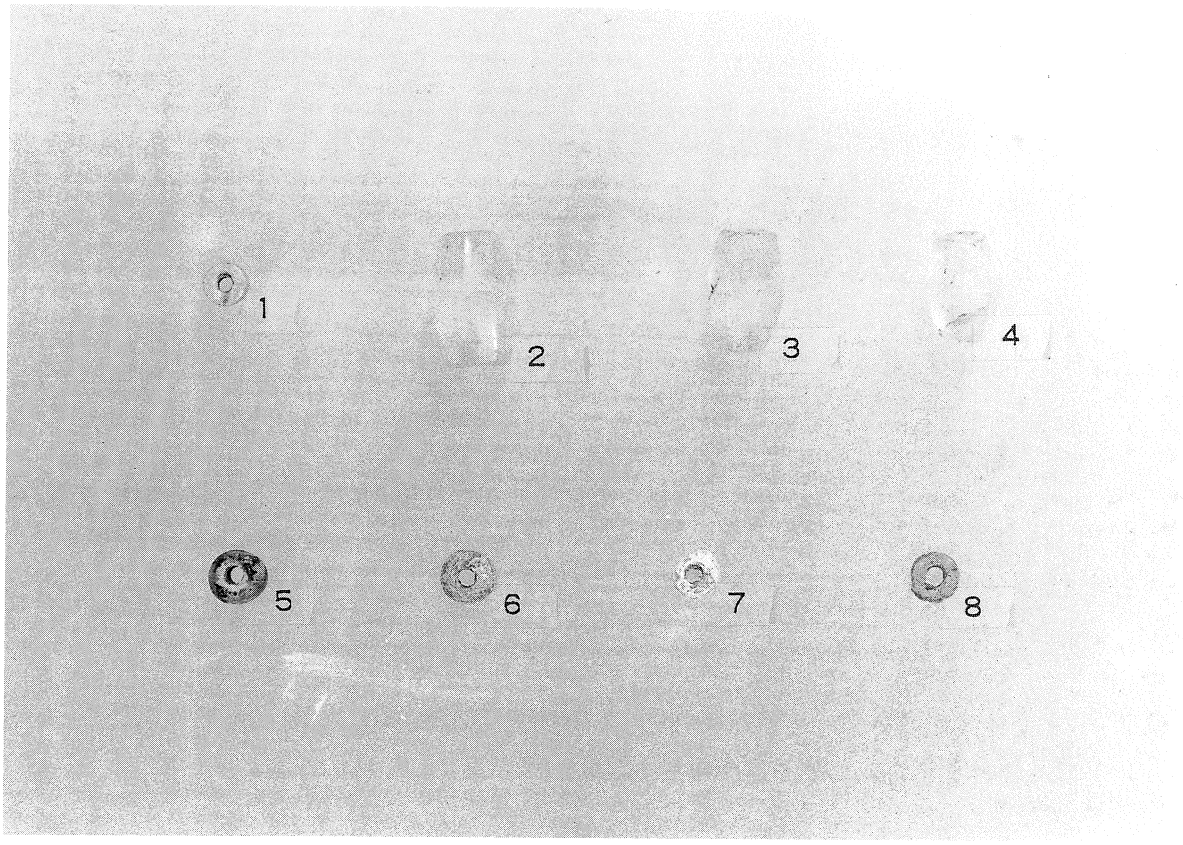
16

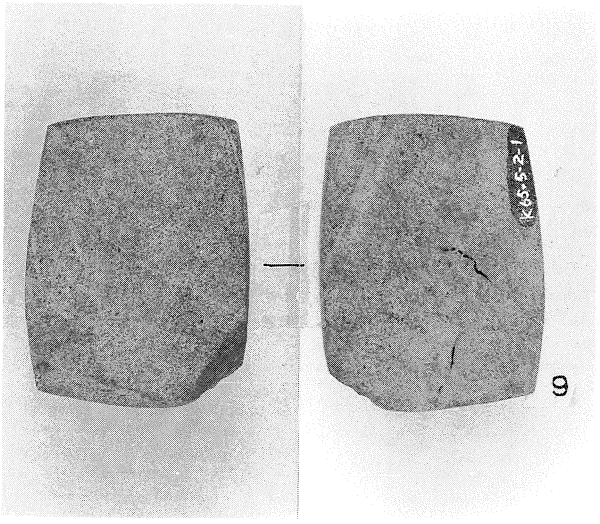
17

18


19

図版 8





（附載）

掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡から出土した炭化材の樹種について

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡では、東ノ谷遺跡から弥生時代後期の焼失家屋（竪穴住居跡）が検出され、住居構築材と考えられる炭化材が出土している。静岡県では、浜松市中平遺跡で、弥生時代後期の焼失家屋から出土した炭化材の樹種を明らかにした例がある（山内，1982）。また、袋井市坂尻遺跡や堀越ジョウヤマ遺跡等で、弥生時代の掘立柱建物の礎板や柱等の樹種が明らかにされている（山内，1985；パリノ・サーヴェイ株式会社，1991）。これらの調査結果から、構築材の用材選択の一端が明らかにされている。

本報告では、出土した住居構築材と考えられる炭化材の樹種を明らかにし、上記既存資料と比較しながら、当時の用材選択について考察する。また、西池古墳から出土した炭化材の樹種同定結果についても同時に報告する。

1. 試料

試料は、東ノ谷遺跡の弥生時代後期の２号住居跡（ＳＢ02）から出土した、住居構築材と考えられる炭化材14点（試料番号５～18、129ページ第１図参照）と、西池古墳の盛り土･埋葬土坑の覆土中から採取された炭化材４点（試料番号１～４）である。各試料の詳細は、樹種同定結果とともに表１に記した。

2. 方法

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

炭化材は、いずれも落葉広葉樹で２種類（コナラ属コナラ亜属クヌギ節・クリ）に同定された。各種類の解剖学的特徴などを以下に記す。

・コナラ属コナラ亜属クヌギ節（*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Cerris*）ブナ科

環孔材で孔圏部は１～３列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら放射状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～20細胞高のものと複合放射組織とがある。柔組織は周囲状および短接線状。柔細胞はしばしば結晶を含む。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.）ブナ科クリ属

環孔材で孔圏部は１～４列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、１～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。

番号	出　土　地　点	時代・時期	用　途	樹　　種
1	西池古墳盛り土内	古墳時代中期	不明	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
2	西池古墳盛り土内	古墳時代中期	不明	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
3	西池古墳ＳＦ０２	古墳時代中期	不明	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
4	西池古墳ＳＦ０２	古墳時代中期	不明	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
5	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №33	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
6	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №109	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
7	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №125	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
8	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №146	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
9	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №185	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
10	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №188	弥生時代後期	建築部材	クリ
11	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №193	弥生時代後期	建築部材	クリ
12	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №197	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
13	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №208	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
14	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №212	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
15	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №265	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
16	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №266	弥生時代後期	建築部材	クリ
17	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №289	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
18	東ノ谷遺跡ＳＢ０２ №290	弥生時代後期	建築部材	コナラ属コナラ亜属クヌギ節

第１表　炭化材の樹種同定結果

4. 考察

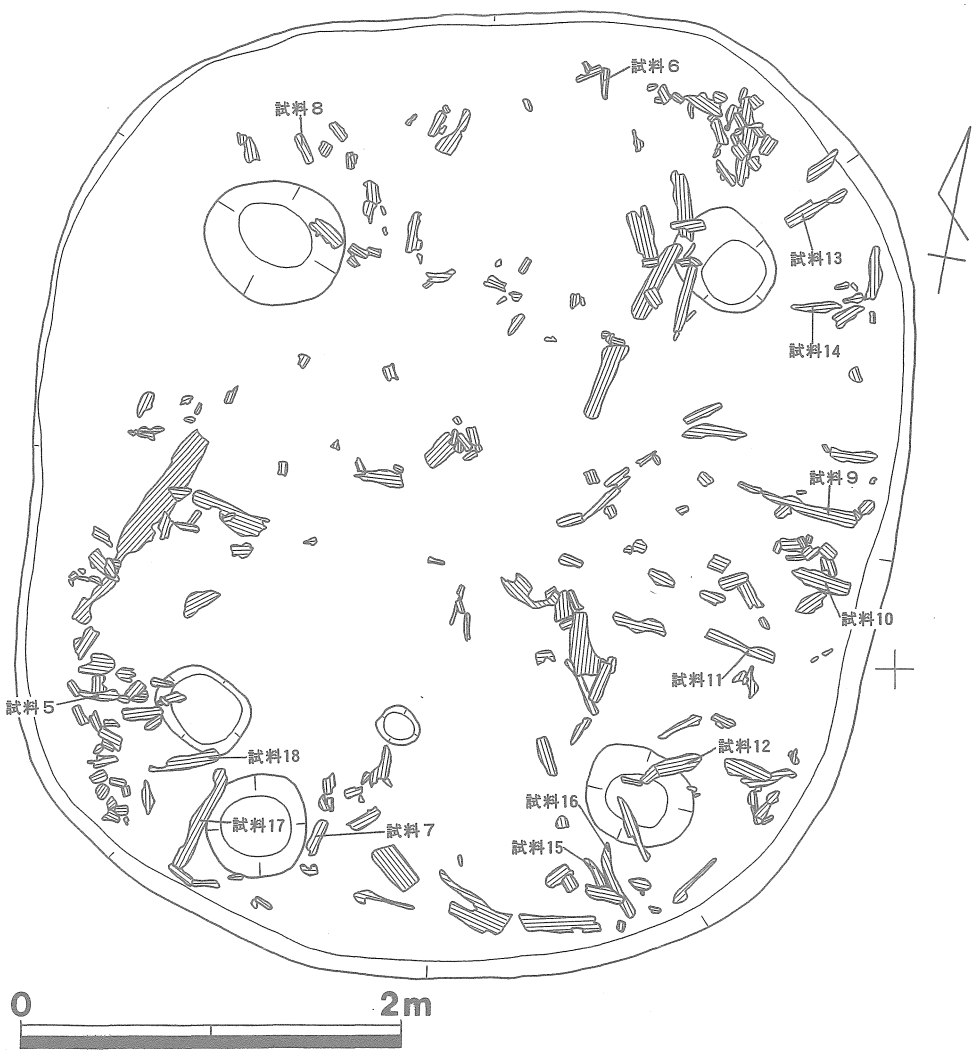
(1)住居構築材の用材選択について

弥生時代後期の２号住居跡から出土した炭化材は、その多くがクヌギ節であり、他にクリが３点認められた。このことから、住居構築材はクヌギ節を主とする樹種構成であったことが推定される。浜松市中平遺跡では、弥生時代後期の２軒の住居跡から出土した炭化材の樹種が明らかにされているが（山内，1982)、そのうち１軒は全てクヌギ節であり、今回の結果と調和的である。一方、もう１軒の住居跡では、スギ・コナラ・クリ・アカガシ亜属が出土しており、樹種構成が住居によって異なる様子がうかがえる。しかし、ほとんどの木材が高い強度を有している点では共通している。住居構築材は、関東地方の調査例から、遺跡周辺の植生を反映することが明らかとなっている（高橋・植木、1994)。これらのことを考慮すると、本遺跡周辺では、クヌギ節などの落葉広葉樹を主とする植生が見られ、その中から住居構築材として適当な強度や大きさ（径・長さ）を有している木材としてクヌギ節やクリを選択していたことが推定される。

一方、袋井市坂尻遺跡や堀越ジョウヤマ遺跡等で出土した掘立柱建物の柱には、イヌマキを中心とした針葉樹が多く使用されており、広葉樹は少ない（山内，1985;パリノ・サーヴェイ株式会社，1991)。これらの結果が、建物の形態や用途による使用樹種の違いを表しているのか、地域の植生を反映しているのかは現時点では不明である。今後さらに類例を蓄積することで明らかにしたい。

(2)古墳の盛り土・埋葬土坑覆土中から出土した炭化材について

炭化材は全てクヌギ節であった。これらの炭化材がどのような経緯で盛り土に混入したのか、その詳細は明らかではない。盛り土の由来とも密接に関係する問題であり、今後さらに検討を行う必要が



第１図　東ノ谷遺跡ＳＢ０２炭化材平面実測図

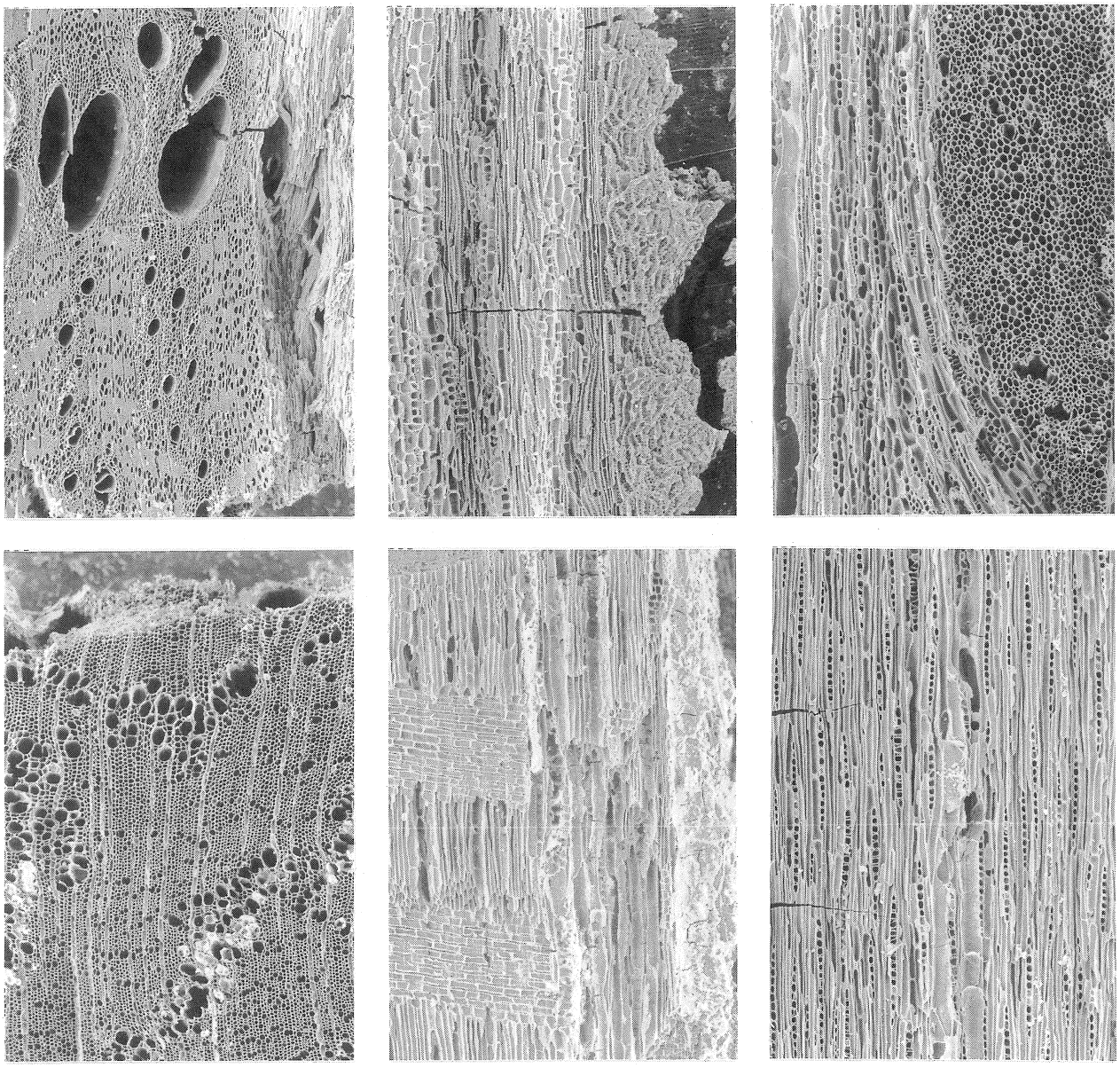
ある。しかしながら、樹種が全てクヌギ節であることから、周囲の植生は弥生時代後期と同様であったことが推定される。

〈引用文献〉

・パリノ・サーヴェイ株式会社（1991）「袋井市堀越遺跡出土材の樹種」『堀越ジョウヤマ遺跡発掘調査報告書』，Ｐ49～52，静岡県袋井市教育委員会
・高橋敦・植木真吾（1994）「樹種同定からみた住居構築材の用材選択」『PALYNO』2，Ｐ５～18
・山内文（1982）「中平遺跡出土炭化材・木材の樹種同定」『西鴨江中平遺跡』，Ｐ290，浜松市教育委員会
・山内文（1985）「坂尻遺跡出土の木質遺物」『坂尻遺跡（自然科学編）一般国道一号線袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書』，Ｐ13～24，建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・袋井市教育委員会

図版 1

炭化材



1. コナラ属コナラ亜属クヌギ節（試料番号6）
2. クリ（試料番号10）
 a：木口，b：柾目，c：板目

200μm：a
200μm：b, c

報告書抄録

ふりがな	かけがわしながやとちくかくせいりようちないいせきはっくつちょうさほうこくしょ いち
書名	掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅰ
副書名	向山遺跡　東ノ谷遺跡　西池古墳　山脇横穴墓群　本村遺跡・前坪古墳群６号墳 本村横穴墓群Ｅ群
編集者名	前田庄一
編集機関	掛川市教育委員会
所在地	〒436-8650 静岡県掛川市長谷701番地の１　ＴＥＬ（0537）21-1158
発行年月日	西暦 2002年３月15日

ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
むかいやま 向山遺跡	静岡県掛川市長谷1772-1外	22213	508	34度45分46秒	137度59分35秒	19950707～19950807	600㎡	区画整理事業
ひがしのや 東ノ谷遺跡	静岡県掛川市長谷1757-4外	22213	505	34度45分48秒	137度59分39秒	19950808～19951102	600㎡	区画整理事業
にしいけ 西池古墳	静岡県掛川市長谷1480-1外	22213	507	34度45分30秒	137度59分48秒	19951106～19951227	400㎡	区画整理事業
やまわき 山脇横穴墓群	静岡県掛川市長谷1480-1外	22213	506	34度45分49秒	137度59分40秒	19951120～19951208	100㎡	区画整理事業
ほんむら 本村遺跡・ まえつぼ 前坪古墳群６号墳	静岡県掛川市高御所1433-1外	22213	63-6	34度45分44秒	137度59分28秒	19951204～19960331	900㎡	区画整理事業
本村横穴墓群Ｅ群	静岡県掛川市高御所1433-1外	22213	65-5	34度45分43秒	137度59分27秒	19960123～19960331	100㎡	区画整理事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
向山遺跡	墓跡	中世	地下式壙		
東ノ谷遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居跡	土器・石器	
西池古墳	古墳	古墳時代	古墳	鉄製品・玉	
山脇横穴群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	土器・玉類	
本村遺跡・	墓跡	弥生時代	方形周溝墓	土器・玉類	
前坪６号墳	古墳	古墳時代	古墳	土器・玉類	
本村横穴群Ｅ群	横穴墓	古墳時代	横穴墓	土器・玉類	

掛川市長谷土地区画整理用地内遺跡発掘調査報告書Ⅰ

・向山遺跡
・東ノ谷遺跡
・西池古墳
・山脇横穴墓群
・本村遺跡・前坪古墳群６号墳
・本村横穴墓群Ｅ群

平成14年３月15日

編集発行　掛川市教育委員会
掛川市長谷701-1
TEL (0537) 21-1158

印 刷 所　株式会社 彩光堂
掛川市宮脇248-1
TEL (0537) 24-0013